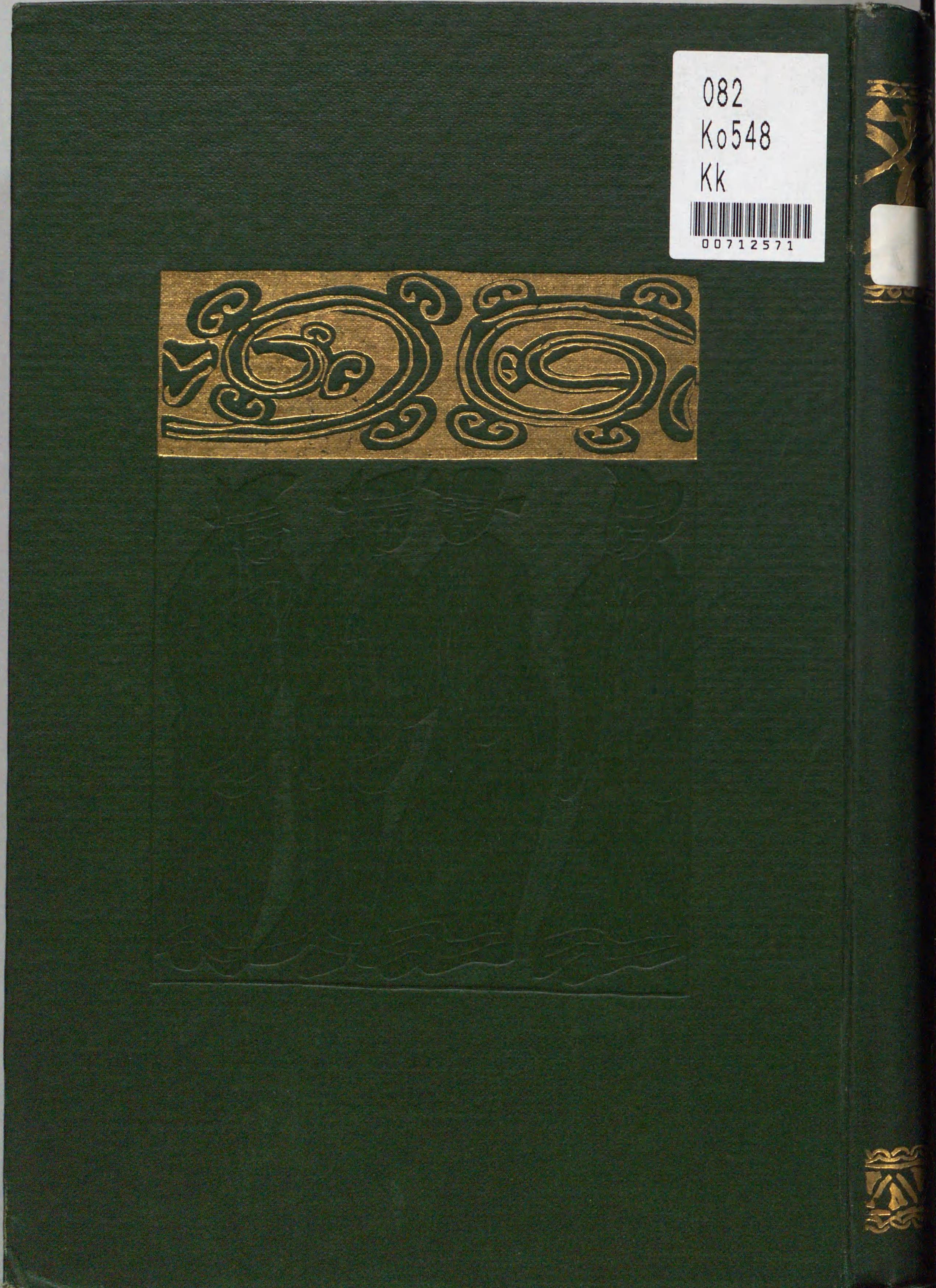


082
Ko548
Kk





國譯漢文大成

文學部
第十七卷

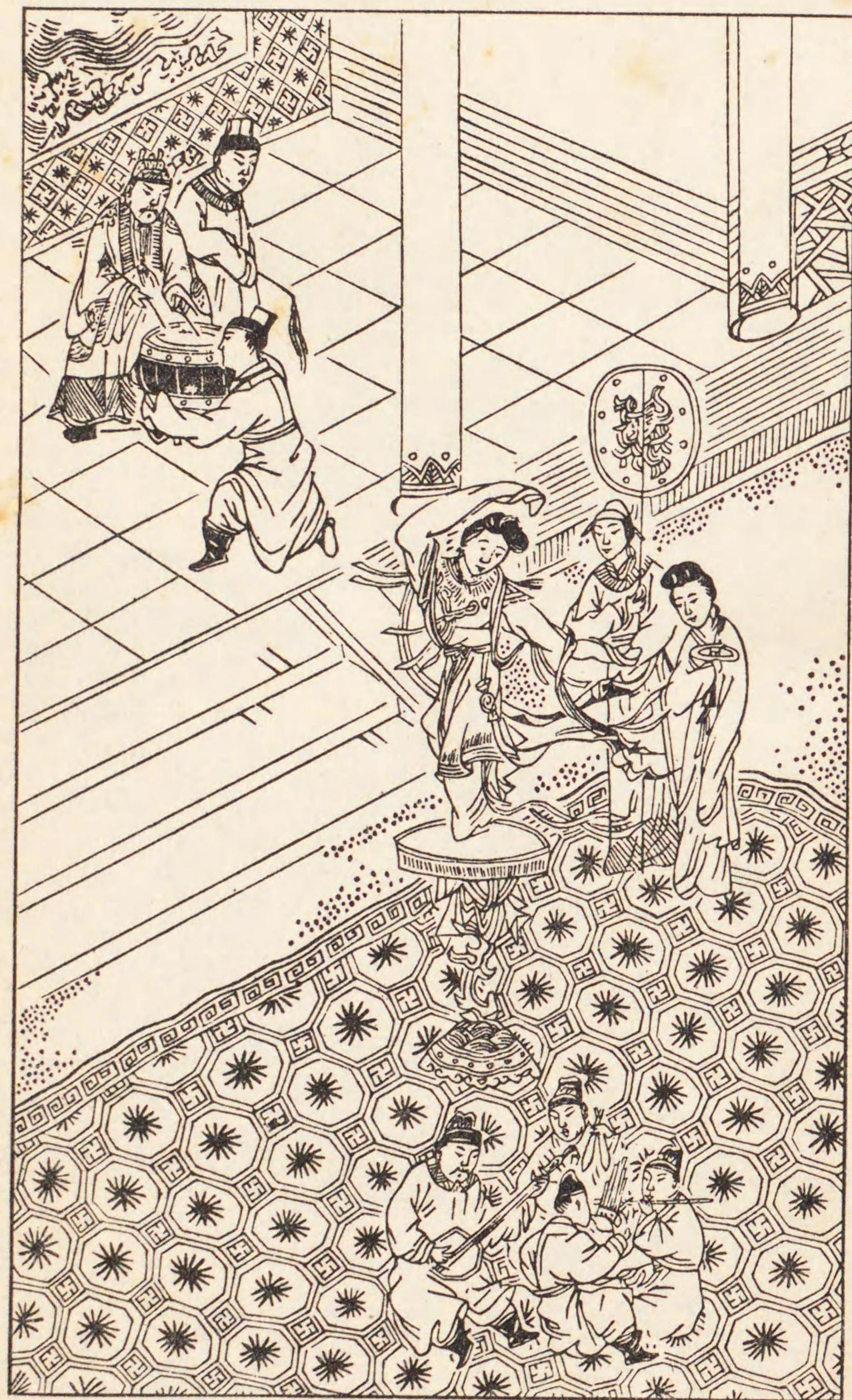
長生殿·燕子箋

國譯漢文大成



文學部
第十七卷

長生殿·燕子箋



0.82

Ko 548

K to



712571





例言

一支那戲曲の概要は、本叢書第九卷の首に載せ、清朝の戯曲に就ては、第十一卷に述べたれば、總べて省略し、宮調脚色等も、一一註を施さず。

一訓譯は直譯體に依り、一字一句を苟くもせず。但し白中の俗語は意譯を用ひ、又間に「了」「罷」等の助辭を略せるもあり。便宜に従ふなり。

一原書には、稗畦の自序の外に、徐麟及び吳人の二序あれども、茲には自序のみを譯載せり。

一又長恨歌及び長恨歌傳を附録すれども、長恨歌傳は本叢書第十二卷晉唐小説中に收めたれば、長恨歌のみを擧げたり。

一本傳奇は元來大正元年より二年に亙り、余が歸朝後第一年に於て、大學にて講義せしものに係る。後本叢書中に收めらるるに及んで、手塚文學士の手記を煩はして原稿を作り、昨年の夏暇に自ら筆を執りて嚴校を加へ、七月二十一日に起り、九月一日に了り、前後四十日、大學の研究室に籠居して、一氣に呵成せし所なり。その苦熱苦心の狀は、第十一卷の首に詳述せり。今にして當時を思へば、感慨に堪へず、一言茲に附記すと云ふ。



目次

長生殿傳奇解題

作者の略傳

本傳奇の梗概

概評

自序

長恨歌

目 國譯長生殿傳奇

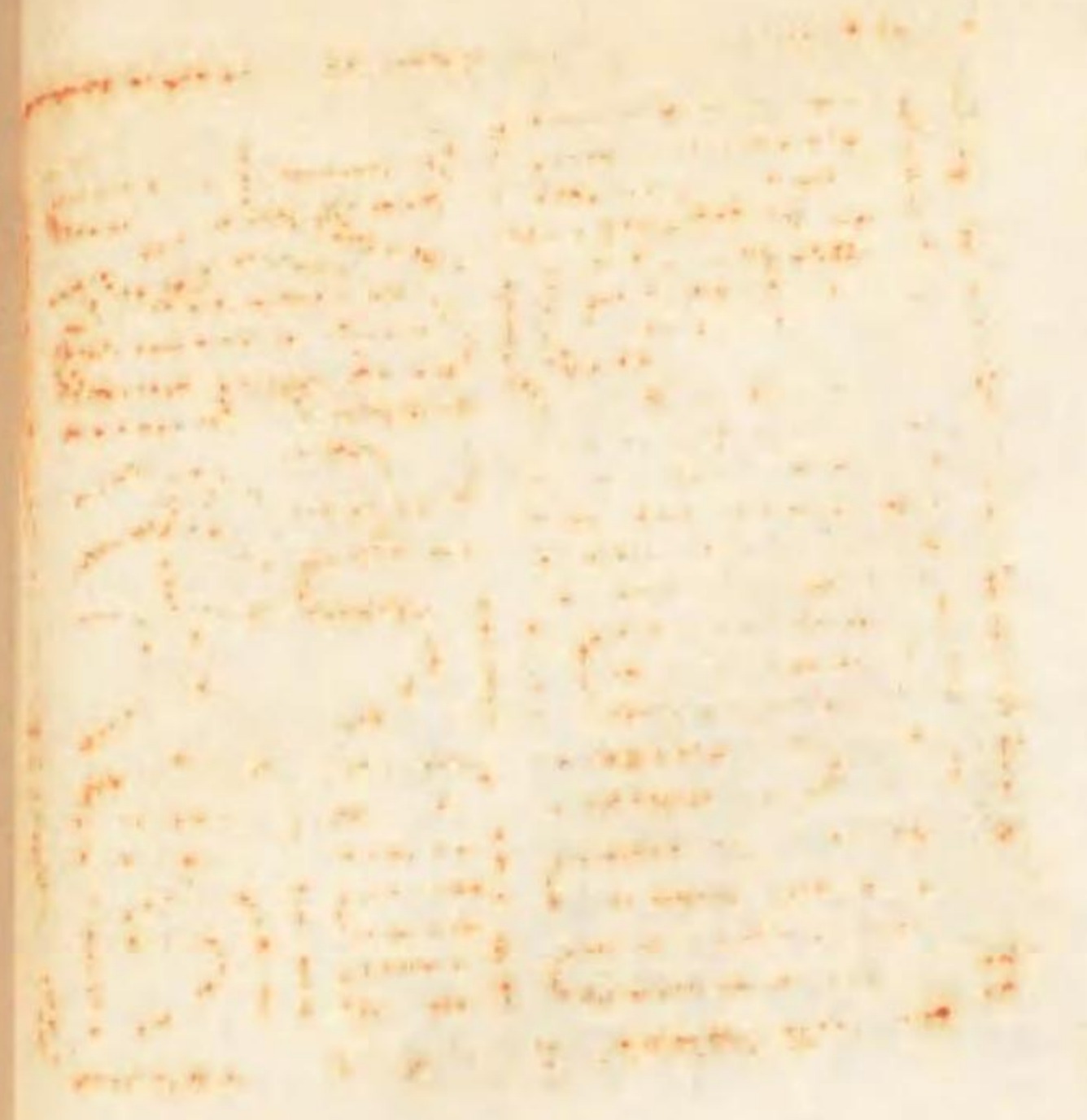
第一齣	傳	概	一
第二齣	定	情	五
第三齣	賄	權	一四
第四齣	春	睡	三

第二十五齣	埋	玉	三三
第二十六齣	獻	飯	三六
第二十七齣	冥	追	三五
第二十八齣	罵	賊	三五
第二十九齣	聞	鈴	三六
第三十齣	情	悔	三七
第三十一齣	勤	寇	三八
第三十二齣	哭	像	三三
第三十三齣	神	訴	三六
第三十四齣	刺	逆	三五
第三十五齣	收	京	三五
第三十六齣	看	襪	三三
第三十七齣	尸	解	三一
第三十八齣	彈	詞	三六
第三十九齣	私	祭	三三
第四十齣	仙	憶	三七
第四十一齣	見	月	三六
第四十二齣	驛	備	三六
第四十三齣	改	葬	三九
第四十四齣	懲	合	四〇

第五齣	禊	游	三
第六齣	傍	訝	四
第七齣	倖	恩	四
第八齣	獻	髮	五
第九齣	復	召	六
第十齣	疑	識	七
第十一齣	閉	樂	八
第十二齣	製	譜	九
第十三齣	權	闕	一〇
第十四齣	偷	曲	一〇
第十五齣	進	果	一一
第十六齣	舞	盤	一一
第十七齣	合	圍	一二
第十八齣	夜	怨	一三
第十九齣	架	聞	一四
第二十齣	偵	報	一五
第二十一齣	窺	浴	一六
第二十二齣	密	誓	一六
第二十三齣	陷	關	一八
第二十四齣	驚	變	二二

第四十五齣	雨	夢	四〇七
第四十六齣	覓	魂	四一七
第四十七齣	補	恨	四二〇
第四十八齣	寄	情	四二七
第四十九齣	得	信	四三四
第五十齣	重	圓	四三〇

長生殿傳奇原文 1-1011



長生殿傳奇解題



作者の略傳

長生殿傳奇と桃花扇傳奇とは、實に清朝戲曲界の雙璧なり。觀に就いては、既に本叢書第九卷及び第十一卷の首に述べたれば、再び茲には贅せざるべし。本傳奇の作者を洪昇となす。字は昉思、稗畦と號す。錢塘の人なり。少年にして才名あり、詩を王漁洋に學び、又趙秋谷と親善なり。著はす所稗村集あり。國朝詩別裁集に、其十數首を録し、沈德潛は評して、「流澹字を成す、漁洋の門中、吳天章の下、餘子の上に在り、應に可傳を以て之を許すべし」といへり。

石門

抑支那戲曲の沿革及び清朝戲曲の概

【一】王漁洋に學び。趙秋谷の談龍錄中に、稗畦に關する詩話數條あり、就中左の一條最も名高し、新城司寇とは漁洋のことなり。
 錢塘洪昉思、久に於新城之門一矣、與余友、一日並在司寇宅論詩、昉思嫉時俗之無一章也、曰詩如龍然、首尾爪角鱗鬣一不具、非龍也、司寇晒之曰、詩如神龍、見其首不見其尾、或雲中露一爪一鱗而已、安得全體、是雕塑畫者耳、余曰、神龍者屈伸變化、固無一定體、恍惚望見者、第指其一鱗一爪、而龍之首尾完好、故宛然在也、若拘於所見、以爲龍具在是、雕繪者反有辭矣、昉思乃服。

【二】石門。論語に出づ、隱君子路宿於石門、晨門曰、奚自、子路曰、自孔子、曰是知其不可而爲之者與。

先賢逝已久 予亦宿石門 天寒鳥自歸 林表斜陽昏
吏隱計難得 詎知憂世屯 棲棲終短褐 此意向誰言

釣臺

逃卻高名遠俗塵 披裘澤畔獨垂綸

千秋一箇 劉文叔

記得微時有故人

前者は晨門を憑弔し、併せて自ら懷抱を抒ぶるものにして、後者は光武を頌贊するのみに非ず、貴に在つて賤を忘るるもの多きを慨歎せるものなり。亦以てその志の在る所を窺ひ知るべし。稗畦又音律に曉通し、詞曲に工なり。作る所、雜劇に「四嬋娟」あり。傳奇に「回文錦」「迴龍院」「錦繡圖」「鬧高唐」「節孝坊」舞霓裳「沈香亭」「長生殿」あり。就中「長生殿」最も名あり。

〔三〕釣臺。嚴子陵の釣せし處なり。
〔四〕劉文叔。後漢の光武帝をいふ。

本傳奇は唐の明皇と楊貴妃との風流韻事を題材として仕込みしものにして、その題名は長恨歌の「七月七日長生殿」の語に取れり。正史の外、長恨歌傳を始め、開元天寶遺事、明皇雜錄、楊太真外傳、樂府雜錄等、唐人の隨筆、及び李白・杜甫・元稹・白居易等の詩篇を涉獵して、あらゆる明皇貴妃の逸事軼聞を網羅して、作製せられたる一大史劇なり。その題目の好きと、詞曲の妙とを以て、一時に流行し、洛陽の紙價を貴からしめたり。然れども滿は損を招き、福は禍の伏する所なり。曾て國忌日に上

演せられたりといふを以て、稗畦は坐して貶逐せられ、後零落して江南に到り、一夜大醉して、水に落ちて死せりと。才子の末路轉た憐むに堪へたり。

國喪演劇のことは、傳ふる所同じからず。柳南隨筆に據れば、康熙中京師の梨園は内聚班を第一とす。時に長生殿傳奇初めて成り、内聚班に授けて之を演せしめしに、大内之を覽て善と稱し、諸優人に白金二十兩を賞し、且つ諸親藩に向つて之を稱せられしかば、諸王府及び各部大臣、凡そ宴集あれば必ず此劇を演じ、而して纏頭の賞、悉く内賜の如く、獲る所頗る多し。因て内聚班の優人、昉思に謂て曰く、君の新製に頼りて多く賞賜を得たれば、宴を張りて君の壽をなし、是劇を演じて以て觴を侑めん。凡そ君の交游する所、當に之を邀へて俱に來るべしと。當日都下の名流悉く羅致せられたるに、獨り趙星瞻に及ばず。趙會、給諫王某の所に館しければ、乃ち王に言ひてその日恰も國忌日に係るを以て、宴を設け樂を張るは大不敬なるを劾奏せしめしかば、凡そ士大夫及び諸生の坐して名を除かれしもの五十人。趙秋谷、查初白その著しきものなりと。又秋雨庵隨筆に據れば、黃六鴻なるもの、康熙中知縣より給事中となりて京に入り、土物及び詩稿を以て徧く諸名士に送りしに、趙秋谷は、土物のみを受けて、その詩集を返せしかば、黃はいたく之を銜み、必ず報ゆる所あらんと欲せり。恰も好し、國喪に觀劇の事ありしかば、黃は之を彈劾したり。因て朝廷長生殿を取りて之を閱し、諷刺の意ありとして、大に怒り、遂に趙の職を罷め、昉思は爲に山西に編管せられたり。當時京師にその事

を詠じたる詩三首あり。

其一

國服雖除未滿喪 如何便入戲文場

自家原有些兒錯 莫把彈章怨老黃

其二

秋谷才華迴絕儔 少年科第儘風流

可憐一曲長生殿 斷送功名到白頭

然れば是獄成りて長生殿の曲、禁中に流傳し、やがて天下に布滿せり。故に朱竹垞叻思に詩を贈りて曰く、

海内詩篇 洪玉父 禁中樂府 柳屯田

梧桐夜雨聲淒絕 慧苴明珠誘偶然

右兩書の記する所同じからずと雖も、非時演劇のことによりて罪を獲たる

は明なり。趙秋谷より叻思に寄せし詩に云ふ、

垂堂高坐本難安 身外鴻毛擲一官

獨抱 焦桐俯流水 哀音還爲 董庭蘭

【五】洪玉父。宋の洪炎、字玉

父、元祐の進士、兄弟共に才

名あり、四洪と號す、炎の詩

酷だ黄山谷に似たり。

【六】柳屯田。宋の柳永、屯田

員外郎たり、詞を善くす。

【七】慧苴明珠。後漢の馬援、

伏波將軍を以て交趾を征す、

援陣に在り、常に慧苴を餌し

て病を避け、凱旋の際之を一

車に載せしに、後之を追語す

るものあり、以て明珠文暉な

りとなす。

【八】垂堂高坐。危に近づくこ

と、孟子に「千金之子、不垂

レ堂」とあり。

【九】焦桐。琴のこと。

【一〇】董庭蘭。唐の人、善く琴

を鼓す、房瑄の門客たり、こ

の詩叻思を以て董庭蘭に比す

るは、視て門下の士となすを

免れざるなり。

又秋谷の查初白に贈れる詩に、

與君南北 馬牛風 一笑同逃世網中

の句あり。初白之に答へて

欲逃世網無多語 莫遣詩名萬口傳

と。是によれば黃趙查共に奇禍に連坐せしを知るべし。古より讒邪の公正を害し、才人の薄倖なる

は歎するに餘あり。亦以て長生殿傳奇の盛に行はれし一反響と見るべし。

本傳奇の梗概

本傳奇は前述の如く、白樂天の長恨歌及び陳鴻の長恨歌傳を本として、

之に幾多の明皇貴妃に關する挿話を集めて大成せるものなり。長恨歌傳は本叢書第十二卷晉唐小説中

に收められたれば、唯白詩のみを附載して參考に資すべし。

本傳奇は分つて上下二本、計五十齣となす。而してその結構は第一齣傳槩の「沁園春」の曲に約述

せり。曰く、

天寶の明皇。玉環の妃子。宿緣正に當る。華清に浴を賜ひ。初めて恩澤を承けしより。長生に巧

を乞ひ。永く盟香を訂す。妙舞新に成り。清歌未だ了らざるに。鞞鼓喧闐、范陽より起り。馬嵬の

【一】馬牛風。風馬牛の意、左

傳に出づ、南北相關せざるこ

と。

驛。六軍發せず。紅妝を斷送す。
西川の巡幸、傷むに堪へたり。奈んぞ地下人間兩つながら渺茫たるや。幸に遊魂、罪を悔いて。已に仙籍に登る。變を廻らして、改め葬むれば。只香囊を剩す。證は天孫に合はされ。情は羽客に傳へ。鈿盒金釵、重ねて寄せ將ち。月宮の會。霓裳の遺事。詞場に流播す。
授唐の明皇位に即いて天下の太平を致せしが、晩年政事に倦みて情を聲色に寄せ、楊玉環を冊して貴妃となし、浴を華清池に賜ひ、永新・念奴に命じて伏侍し、高力士をして引見せしめ、旨を傳へて宴を排し、宴罷んで後、相携へて月に歩して西宮に到り、帝は金釵鈿盒を妃子に與へて定情の記念となし、同に唱ふらく、

惟願取くは情は堅金に似て。釵は單分せず。盒は永く完からんことを。(定情)

安祿山は本營州の雜胡にて智勇兼備の豪傑なり。初め張守珪の帳下に屬し、契丹を征せしに勇を恃んで輕進し、大に敗れて逃れ回りが守珪その才を愛して殺さず、京師に送りて朝旨を請はしむ。祿山厚く妃子の從兄楊國忠に賄を贈りて罪を赦されんことを求む。(賄權)。妃子の宮に入りしより寵遇並びなく、春は春遊に従ひ夜は夜を專にし、三姉は盡く夫人に封せられ、楊國忠は右相に拜せらる。國忠既に祿山の賂を納れ、爲に帝に奏して敗軍の罪を赦さんことを請ふ。(春遊)。三月三日明皇は妃子と曲江に游幸し、三國夫人駕に隨ふ。祿山之を追跡して、楊國忠の先驅に亂撞し、馬に鞭うつて去る。(複遊)

曲江の會に明皇は獨り虢國夫人を召し入れしかば、妃子は爲に恩寵を奪はれんことを恐れて嫌疑を生じ、帝も亦憚ばす。(旁訝)。妃子旨に忤ひて嚴譴を蒙り、高力士に送られて國忠の第に歸る。(倖恩)。力士帝の悔心あるを見、妃子をして過を謝せしむ。妃子頭髮を剪り、力士に由つて之を獻す。(獻髮)。妃子の宮を出でしより、帝は食を食つて甘からず、樂を聞いて樂からず、召し回さんと欲するも亦口より出し難く、頗る心を惱ませる處に、力士の來つて妃子の爲に謝し、その髪を獻するに及んで、且つ驚き且つ喜び、急に旨を傳へて妃子を宮に迎へしむ。(復召)。妃子宮に回りに益、寵あり。一日夢に月宮に遊んで天女の霓裳羽衣の曲を奏するを聞く。蓋し妃子の前身は蓬萊玉妃なるを以て、月主嫦娥はその魂を導いて月宮に到り、この秘曲を人間に傳へしめんと欲せしなり。(聞樂)。妃子夢覺めて後、夢中の記憶を辿り、永新念奴を召して譜を製し、帝を迎へて新曲を奏す。帝大に喜び、早速李龜年に傳へて梨園の子弟を教習せしむ。(製譜)。是に於て李龜年は馬仙期・雷海青・賀懷智・黃旛・綽等を朝元閣上に會して、霓裳曲を溫習せり。江南の人李暮音律に通じ、鐵笛を以て名あり。宮牆外に在りて竊に之を聞き、その秘譜を得たり。(偷曲)。帝又妃子が鮮荔枝を愛吃するを以て、西川道海南道に命じて荔枝を進貢せしめらる。天氣漸く熱く、途の遠きを以て、使臣等稍路を取り、馬を馳せて田禾を踐踐し、又老人を馬蹄にかけて顧みる所なく、驛官は免れて驛馬備らず、怨嗟の聲路に載つ。(進果)。やがて六月朔日妃子の誕辰に際し、帝は爲に宴を長生殿に設け、霓裳の新曲を奏せしむ。恰も好し、海南・涪州

(西川道に屬す)の使臣來りて鮮荔枝を獻じければ、妃子大に喜び、爲に盤中に舞ひ、帝亦羯鼓を以て之を節し、盛會を極む。(舞盤)。初め梅妃江采蘋明皇に寵ありしが、楊妃の宮に入るに及んで、之を害とし、上宮樓に遷置せしめられたり。然るに帝は舊情未斷えず、一夜疾に託して翠華西閣に宿し、小黃門をして密に梅妃を召さしむ。(夜怨)。忽ち楊妃の知る所となり、天の未明けざるに、妃子自ら西閣に赴きて帝の不意に出づ。帝狼狽爲す所を知らず、高力士をして閣後より梅妃を送り出さしむ。而して楊妃と歡情前の如し。此處妃子嬌嗔を發する狀宛として見るが如し。

(北水仙子)問ふ、問ふ、問ふ、華萼の嬌。怕る、怕る、怕る、樓東の花の更に好きに似ざるを。有り、有り、有り、梅枝兒の曾て先春を占むる有り。又、又、又、何ぞ綠楊の牽纜するを用ひん。

明皇は愈、妃子を寵愛し。(窺浴)。天寶十載七月七日、乞巧の會に、帝は妃子と、牛女二星に對して、比翼連理の盟を設けぬ。是れ後に天孫織女星が重圓の媒をなす伏筆なり。(密誓)。

是より先、安祿山は奸佞を以て帝に寵あり、東平郡王に封せらる。楊國忠之と權を争ひ、數、祿山の反相あるを讒す。帝因て祿山を出して范陽節度使となす。(權閥)。然るに祿山は却て樊籠を出でたるを喜び、鎮に到りて、盡く漢將を罷めて、蕃將を以て之に代へ、専ら較獵を催して、武事を演習し、反謀愈、形はる。(合圍)。十四載遂に兵を擧げて反し、楊國忠を誅するを以て名となす。その勢破竹の

如く、進んで東京を陥る。哥舒翰迎へ戦つて利あらず、潼關守を失ふ。(陷關)。明皇はかくとも知らず、妃子と御花園に在りて、日夜宴を張り樂をなせる最中に、祿山の反報を得て大に吃驚す。正に是れ「漁陽の鞞鼓地を動かして來る。驚破す霓裳羽衣の曲」なり。變倉卒に起りて、君臣計の出づる所を知らず、倉皇蜀に幸するに決す。(驚變)。右龍武將軍陳玄禮、禁軍を率ひ、駕を護して、行いて馬嵬驛に到る。軍士鼓噪して楊國忠を殺し、更に妃子の正法を逼る。帝いかでか恩愛の情を割くに忍びんや、猶豫して決する能はず。軍士驛を圍み、吶喊して止まず。妃子乃ち自ら進んで死を乞ひ、身を以て國難に殉せんと欲す。高力士亦傍より之を慫慂せしかば、帝は奈何ともする能はず、終に妃子に死を賜ふ。

(哭相思)百年の離別須臾に在り。一代の紅顏君の爲に盡く。實に是れ人生傷心の極。是を本傳奇の頂點となす。(埋玉)。

駕西行、進んで扶風の地を過ぐ。父老麥飯を獻するあり。(獻飯)。蜀道崎嶇、漸く棧道を過ぎ、劍閣に登り、鈴聲の雨聲に和するを聞き、愁に勝へず、爲に雨淋鈴の曲を製す。(製曲)。祿山の長安に在るや、大に逆黨を會して、太平宴を凝碧池頭に設け、梨園の舊部を集めて樂を奏せしむ。伶工雷海青悲憤に堪へず、琵琶を擲つて祿山を撃ち、その殺す所となる。(罵賊)。初め郭子儀未志を得ざりし時、曾て長安市上の酒樓に飲し、壁間に題せる詩句、

燕市人皆去り

函關馬歸らず

若山下の鬼に逢はば

環上羅衣を繋ぐ

を讀んでその意を解せず、偶安祿山の新に王爵を賜はりて樓下を過ぐるを見るに、面に反相あり、必ずその天下を亂さんとするを知る。(疑議) 既にして擢んでられて靈武の太守となり、朔方を鎮す。祿山の范陽に在り、反形の益、著はるるを偵ひ、竊に之が備をなす。(偵報) 後祿山果して反し、京師陥り、明皇蜀に幸し、太子靈武に即位せしかば、子儀兵を起して大に祿山の兵を破る。(勦寇) 祿山位を篡ひしより、酒色度を過ぎ、雙目明を失ひ、段夫人を寵してその子慶恩を立てて嗣となす。是に於て長子安慶緒、李猪兒をして祿山を刺し殺さしむ。(刺逆) 子儀兵を進めて賊を討じ、遂に京師を收復し唐室を再造するを得たり。(收京)。

貴妃の馬嵬に死に就きしより、鬼魂徬徨して定らず。馬嵬の土地神は、岳帝の敕旨を奉じて、暫く幽魂を驛中に保護し、冤結を解き、沈淪を免れしむ。(冥追) 鬼魂は千情萬恨やるせなく、竊に釵盒を墓中より取り出し、月下に之を把玩して、天に對して哀禱す。土地神之を憐み、路引一紙を給發して、千里の内、任意に魂遊するを得しむ。(情悔) 天孫織女星、馬嵬の上を過ぎ、一道の怨氣の天に沖するを見て、土地神を召して之を問ひしかば、地神乃ち妃子の冤結を訴ふ。天孫は天寶十載七夕渡河の時、妃子が明皇と長生殿に於て、世世夫婦とならんとの誓を設けたるを知り、大にその情を憐み、細にその魂に宣せしめて曰く、

爾は原來太真玉妃に係る。偶、微過に因つて人間に謫せられしに、今夙業已に消し、真情憫むべければ、大陰鍊形の術を授けて、仙班に復籍して、蓬萊仙院に居らしめん。天神乃ち土地神をして、鬼魂と與に墳前に到り、玉液金漿を取りて、その原身に沃ぎ、形を鍊つて、尸解上昇し、音樂幡幢を備へて、送つて蓬萊仙院に歸らしむ。玉妃釵盒を携へて去り、唯錦香囊を墳中に留めて驗となす。(尸解)。

馬嵬坡の酒舖、王媽媽なるもの、妃子の遺せし錦襪一隻を拾ひ得たるに、遠近傳へ聞きて、來り觀るもの多く、李暮も亦與る。(看襪) 既にして江南に歸り、偶、青溪驚峰寺の大會に赴きて、李龜年の流落して、此地に在り、曲を唱ひて口を糊せるに會ひ、大に喜び、爲に霓裳の全譜を學ばんと欲す。(彈詞) 是に於て龜年暫く李暮の家に留り、清明節に閒歩して、雨に遇ひ、一尼觀に避け、圖らずも永新念奴の女道士となりて此中に在り、折しも貴妃の靈位を設けて供養せるに會ひ、互に舊事を語りて、傷心に禁へず、二人は龜年より郭子儀の長安を復し、上皇のやがて回鑾せんことを聞きて、竊に喜べり。(私祭)。

是より先上皇の蜀中に在るや、朝朝暮暮、妃子を思ひて已む時なし。特に妃子の爲に成都に廟を

建て、名匠に命じて妃子の像を造らしめ、自ら之を送つて廟中に安置せり。(哭像)。既にして上皇郭子儀に迎へられて龍馭を回へし、扶風を過ぎて往年を思ひ、月に對して七夕の密誓を悲み、釵盒の舊盟を完成せんことを願ふ。(見月)。豫め高力士に命じて旨を馬嵬の地方官に傳へ、女工を徵募して改葬の準備をなさしむ。(備驛)。既に馬嵬に到り親しく臨んで妃子の墳を開掘せしに、只是れ空穴にして、中に一個の香囊あるのみなり。上皇悲慟して已まず。乃ち香囊を把りて厚く葬り、王媽媽をして墓を守らしむ。(改葬)。

上皇京に還りてより、退いて南内に居るに、見るもの聞くもの、追憶の種ならざるなく、夜雨の凄涼に對して妃子を夢み、思ひ遣方なし。(雨夢)。遂に道士楊通幽をして、法を修めて妃子の魂を覓めしむ。道士乃ち元神を運らし、天に上り地に入りて之を求むること遍しと雖も、兩處茫茫として皆見えす。會天孫の通過するに逢ひ、唐の天子の懇懃の意を致して教を乞ふ。(覓魂)。是より先、(三)上元二年七夕の會に、牛郎は往年の故事を憶ひ、上皇の爲に辯白する所あり、前誓を證完せしむ。(總合)。是に於て天孫道士の言を聽きて、上皇の情真なるを知り、遂に道士をして蓬山に赴かしめ、又玉妃を召して、親しく生前唐の天子との恩情を細叙せしめ、その誠意を確めたる上、唐帝の痛念措かず、特に道士をして芳魂を尋ねしむる由を告げ、乃ち天庭に上奏し、兩人をして天上に在つて永く夫婦とならしめんと欲す。(補恨)。是齣上卷の埋玉齣に應

(三) 上元。肅宗の年號。

じ、従前離別の恨を補ひ、情詞兼至り、卷中の精采たり。

道士蓬山に尋ね到りて、玉妃に見え、上皇の意を致し、且つ信物を請ひて證となす。玉妃釵の一股と盒の扇とを與へ、又長生殿上比翼連理の誓詞を傳へ、且つ八月十五日夜、月中の大會に、上皇を指引して來り會せしむ。(寄情)。然るに上皇は相思骨に透りて重く病に臥し、ひたすら道士の返信を待つ處に、道士回り來りて委細復命に及びければ、上皇信を得て病體忽ち癒えぬ。(得信)。當夜に至り、道士は法を修し、上皇を導きて月宮に來れば、玉妃先づ在り、相見て互に衷情を訴ふる處に、天孫、玉帝の救諭を奉じて到る。曰く、

唐皇李隆基と貴妃楊玉環、咨爾二人は本元始孔昇真人、蓬萊仙子に係る。偶小謹に因り、暫く人間に住せしが、今謫限已に満ちたり。天孫の奏する所を准し、爾の情の深きを鑒み、命じて忉利天宮に居りて、永く夫婦とならしむ。

月主嫦娥爲に桂宴を張り、群仙に命じて、霓裳の曲を奏せしめ、兩人の爲に酒を擧げて賀を稱し、人月の並びに圓なるを慶す。

(永團圓) 神仙本是れ多情の種。蓬山遠く情の通ずるあり。情根劫を歷て生死無し。看る到底、終に相共にするを。塵縁倥傯。忉利天より情更に永し。凡間の夢に比せず。悲歡和哄。恩と愛と總て空と成る。癡迷洞を跳り出で。相思の鞵を割斷し。玉鎖鬆ぶ。笑ふ雙飛の鳳に騎つて。瀟

灑として天宮に到るを。(重圓)。是を本傳奇の大結となす。

概評

抑、馬鬼の慘事は千古情場の遺恨にして、古來詩人文士の争つて筆を染めし所なり。戯曲としては、元人白仁甫の梧桐雨雜劇の外に、明人無名氏の驚鴻記、及び屠赤水の綵毫記あり。但し皆貴妃を以て安祿山と私ありとなせるが故に、馬鬼の一死も、多く同情を惹く能はず。然るに本劇は一切貴妃の穢跡を除き、死後猶釵盒の盟を忘れずとなし、明皇も亦貴妃を懷うて已む能はず、終に雙星媒を作して、月宮に重圓を慶するを以て局を了る。加ふるに絶妙巧詞を陳ね、文は錦繡の如く、調は金玉の如く、詞曲ありてより以來、無上の傑作となす。是より梧桐雨をして、詩壇の一隅に穩坐する能はざらしめ、一時朱門綺席酒社歌樓、此曲に非ざれば奏せず、纏頭も之が爲に價を増し、桃花扇と共に、内庭に入り、富豪凡氏の如きは、家伶に命じて長生殿を演せしむるに、衣服器用の費、四十餘萬兩に至れりといふ。何ぞその盛なるや。試に本傳奇の長所を列擧すれば、一、絶好の題目を擇びしこと。

明皇貴妃の風流韻事は人口に膾炙し、馬鬼の變は兒女の齊しく歎息痛恨する所なれば、本劇の出づ

るや、藝苑に大歡迎を受けしは當然の事なり。二、貴妃に同情し、且つ重圓に終りしこと。

貴妃を以て安祿山に私ありとなすは、梧桐雨以下の人心に満たざる所なるに、本劇に於ては盡くその穢媿を爰除せるは、よく溫柔敦厚の旨に叶ひ、死後猶釵盒の盟を忘れずとなせるは、頗る讀者の同情を獲たる所以なり。而してその仙縁を増益せしは、長恨歌の原詩に基くと雖も、廣寒聽曲の時を以て、游仙上升の日となし、天孫が媒をなして月宮に重圓を慶するは、全く防思の創意に出づ。神韻縹緲として、實に絶好の大結なり。

三、字句洗鍊、よく宮商に諧ふこと。

たとひ劇としてよく風化の主旨に合し、錦繡の巧詞を陳ぬと雖も、宮商に協はざれば、畢竟鐵綽板を叩いて大江東去を唱ふの譏を免れず。是れ琵琶・牡丹亭の樂家に議せらるる所以なり。然るに防思の本曲を撰するや、字句を洗鍊し、音律を精研し、一字として宮商に協はざるはなし。是を以て文を愛するものはその詞を喜び、音を知るものはその律を賞し、桃花扇と並び世に行はるるは、蓋し偶然に非ざるなり。

然れども之を反面より見れば、長は短の藏する所にして、本傳奇の人意に満たざるも、亦この點に在るなり。即ち題材があまりにありふれたる上に、しかも同じ様なることを反覆することの多きは、頗

〔一〕鐵綽板云云。蘇東坡の故事。

る繁冗に堪へず。馬鬼の一死を以て國難に殉するものとなすは、最員の引き倒しの感なくんばあらず。詩曲は妙と雖も、白の文少く、單調にして變化に乏しきは、桃花扇と頗る同じからず。要するに演劇として六ヶ敷に過ぎ、且間の抜けたるは、支那戯曲の通弊なれば、本傳奇の如きも、讀曲としては、黄絹幼婦といふべきなり。

自序

余白樂天の長恨歌、及び(一)元人の秋雨梧桐劇を覽れば、輒ち數日の惡を作す。南曲 驚鴻一記は未だ穢に涉るを免れず。從來の傳奇家は、情を言ふの文に非ざれば、場を擅にする能はず。而して近ごろは乃ち子虛烏有、動もすれば情詞を寫して贈答す。數、見えて鮮からず、兼ねて典則に乖る。因て章を斷ち義を取り、天寶の遺事を借りて、此の劇を綴り成す。凡そ史家の穢語は、概ね削つて書さず。瑕を匿すと曰ふに非ず、亦諸を詩人忠厚の旨に要すと爾云ふ。然り而して樂み極まれば哀み來る。戒を來世に垂れ、意は即ち寓す。且つ古今來、侈心を逞して、人欲を窮むれば、禍敗之に隨ひ、未だ悔いざるもの有らざるなり。(四)玉環は國を傾け、卒に身を隕すに至る。死して知る有らば、情悔何ぞ及ばん。苟くも艾を怨むの深さに非ずんば、尙何ぞ仙を證することか之れ與る有らん。孔子の書を削つて、秦誓を録せるは、その敗れて能く悔ゆるを嘉みす。殆ど是の若き歟。第だ、曲の終りに雅を奏するに難ければ、稍、月宮を借りて之を足成す。之を要するに廣寒聽曲の

- 【一】元人。元の白仁甫、唐明皇秋夜梧桐雨雜劇を撰せり。
- 【二】驚鴻記。明の無名氏の作。
- 【三】子虛烏有。假空の人物をいふ、司馬相如の子虛の賦に出づ。
- 【四】玉環。楊貴妃の小字。
- 【五】艾。美しきこと、孟子に「知れ好れ色、則慕少艾」とあり。
- 【六】秦誓。秦の繆公のこと。
- 【七】曲の終りに雅を奏す。規箴を以て終ること、揚雄の語に本づく、「靡麗之賦勸百諫一」猶下馳騁鄭衛之聲、曲終而奏雅。

時は、即ち游仙上 升の日なり。雙星合を作して、切利天に生まれ、情縁
總べて虚幻に歸す。清夜鐘を聞けば、夫れ亦以て遽然として夢覺むべし。

康熙己未仲秋の秋

稗畦洪昇孤嶼草堂に題す

【八】康熙己未。康熙十八年。

長恨歌

漢皇色を重んじて、傾國を思ふ
楊家女有り、初めて長成す
天生の麗質、自から棄て難し
頭を回らして一笑すれば、百媚生ず
春寒うして浴を賜ふ、華清の池
侍兒扶け起せば、嬌として力なし
春宵短きを苦しみ、日高うして起く
歡を承け宴に侍して、閒暇無し
後宮の佳麗、三千人
金屋妝成つて、嬌として夜に侍り
姉妹弟兄、皆土を列す
遂に天下父母の心をして
驪宮高き處、青雲に入る

白居易

御宇多年、求むれども得ず
養はれて深閨に在り、人未だ識らず
一朝選ばれて、君王の側に在り
六宮の粉黛、顔色無し
温泉水滑にして、凝脂を洗ふ
恰も是れ初めて恩澤を承くる時
此れ従り君王、早朝せず
春は春遊に従ひ、夜は夜を專にす
三千の寵愛、一身に在り
玉樓宴罷んで、酔うて春に和す
憐むべし光彩の、門戸に生ずるを
男を生むを重んぜず、女を生むを重んぜしむ
仙樂風飄へして、處處に聞ゆ

緩歌漫舞、絲竹を凝らす
 漁陽の鞀鼓、地を動かして來る
 九重の城闕、煙塵生じ
 翠華搖搖、行いて復止まる
 六軍發せず、奈何ともする無し
 花鈿地に委して、人の收むる無し
 君王面を掩うて、救ひ得ず
 黄埃散漫、風蕭索
 峨嵋の山下、人の行く少なり
 蜀江水碧にして、蜀山青し
 行宮月を見る、傷心の色
 天旋り地轉じて、龍馭を迴へす
 馬嵬の坡下、泥土の中
 君臣相顧みて、盡く衣を霑ほす
 歸り來れば池苑、皆舊に依る

盡日君王、看れども足らず
 驚破す、霓裳羽衣の曲
 千乘萬騎、西南に行く
 西のかた都門を出づること、百餘里
 宛轉たる蛾眉、馬前に死す
 翠翹金雀、玉搔頭
 回看すれば血涙、相和して流る
 雲棧縈紆、劍閣に登る
 旌旗光無く、日色薄し
 聖主朝朝暮暮の情
 夜雨鈴を聞く、腸斷の聲
 此に到り躊躇して、去る能はず
 玉顔を見ず、空しく死せし處
 東のかた都門を望み、馬に信せて歸る
 太液の芙蓉、未央の柳

芙蓉は面の如く、柳は眉の如し
 春風桃李、花開く日
 西宮南内、秋草多し
 梨園の弟子は、白髮新に
 夕殿螢飛んで、思悄然
 遅遅たる鐘鼓、初めて長き夜
 鴛鴦の瓦、冷にして、霜華重く
 悠悠たる生死、別れて年を経たり
 臨邛の道士、鴻都客
 君王が輾轉の思を感せんが爲に
 空を排し氣を馭して、奔ること電の如く
 上は碧落を窮め、下は黄泉
 忽ち聞く海上に、仙山有あり
 樓閣玲瓏、五雲起る
 中に一人有り、字太真

此に對して如何ぞ、涙垂れざらん
 秋雨梧桐葉落つる時
 落葉階に満ちて、紅掃はす
 椒房の阿監は、青娥老いたり
 孤燈挑げ盡して、未だ眼を成さず
 耿耿たる星河、曙けんと欲する天
 翡翠の衾寒うして、誰と共にかせん
 魂魄會て來つて夢に入らず
 能く精誠を以て魂魄を致す
 遂に方士をして、慇懃に覓めしむ
 天に升り地に入つて、之を求むること徧し
 兩處茫茫、皆見えす
 山は虛無縹緲の間に在り
 其の中綽約、仙子多し
 雪膚花貌、參差として是なりと

金闕の西廂、玉扇を叩き
 聞道らく漢家天子の使と
 衣を攪り枕を推して、起つて徘徊す
 雲髻半偏にして、新に睡り覺め
 風は仙袂を吹いて、飄飄として擧がる
 玉容寂寞、涙闌干
 情を含み睇を凝らして、君王に謝す
 昭陽殿裡、恩愛絶え
 頭を回らして、下人裳を望む處
 惟舊物を將て、深情を表す
 釵は一股を留め、盒は一扇
 但心をして金鈿の堅に似しめば
 別に臨んで慙懃、重ねて詞を寄す
 七月七日、長生殿
 天に在つては、願くは比翼の鳥と作らん
 天長地久、時有つて盡く

轉た小玉をして、雙成に報せしむ。
 九華帳裏に、夢魂驚く
 珠箔銀屏、迤邐として開く
 花冠整はず、堂を下りて來る
 猶霓裳羽衣の舞に似たり
 梨花一枝、春雨を帶ぶ
 一別音容、兩ながら渺茫
 蓬萊宮中、日月長し
 長安を見ずして、塵霧を見る
 鈿盒金釵、寄せ將ち去らしむ
 釵は黄金を擘き、盒は鈿を分つ
 天上人間、會ず相見ん
 詞中誓有り、兩心知る
 夜半人無く、私語の時
 地に在つては、願くは連理の枝と爲らん
 此の恨は綿綿、絶ゆる期なし

國 譯 長 生 殿

洪昇 昉思填詞
鹽谷 溫譯並註

卷の上

第一齣 傳 概

〔未上る〕

〔南呂引子〕〔滿江紅〕 今古の 情場。問ふ誰箇か眞心到底なる。但だ果して精誠の散せざるあれば。終に 連理を成す。萬里何ぞ愁へん、南と北と。兩心那ぞ論せん、生と死と。笑ふ、人間の兒女、縁の慳きを恨くは。情無きのみ。
 金石を感せしめ。天地を回らし。白日を昭らし。青史に垂る。臣は忠に子は孝なるを看るに、總て情の至れるに由る。先聖曾て 鄭衛を刪らず。

〔一〕傳概。開卷第一齣に於て、先づ本劇の梗概を述ぶること、傳奇の常なり。
 〔二〕情場。人情世界をいふ。
 〔三〕連理。夫婦のこと。長恨歌に「在地願爲連理枝」とあり、連理は漢書蔡邕傳に、「邕性篤孝、母卒、廬于家側、動靜以禮、有兔馴擾、其室傍、又木生連理、遠近奇之」

吾儕義を取りて、宮徴を翻し。太真外傳を借りて、新詞を譜するは。情のみ。
 「中呂慢詞」「沁園春」天寶の明皇。玉環の妃子。宿縁正に當る。華清に浴を賜ひ。初めて恩澤を承けしより。長生に巧を乞ひ。永く盟香を訂す。妙舞新に成り。清歌未だ了らざるに。鞀鼓喧闐。范陽より起り。馬嵬の驛。六軍發せず。紅妝を斷送す。
 西川の巡幸、傷むに堪へたり。奈んぞ地下人間、兩つながら渺茫たるや。幸に遊魂、罪を悔いて。已に仙籍に登る。變を廻らし、改め葬むれば。只香囊を剩す。證は天孫に合はされ。情は羽客に傳へ。鈿盒金釵、重ねて寄せ將ち。月宮の會。霓裳の遺事。詞場に流播す。

- 【四】先聖。孔夫子をいふ。
- 【五】鄭衛。詩經十五國風の中に、鄭風、衛風あり、史記によれば、古は詩三千有りしを孔子に至り、刪りて三百五篇となすと、抑も鄭衛の聲は淫と稱す、然れども男女相愛するは、人情の自然なれば、孔子も鄭衛の詩を刪り去らざりしといふ意。
- 【六】宮徴。樂の五聲をいふ、即ち音律を按ずること。
- 【七】太真外傳。樂史の撰せる小説、本叢書第十二編晉唐小説中に出づ。
- 【八】天寶の明皇。玄宗明皇帝、天寶は年號なり。
- 【九】玉環の妃子。楊貴妃のこと、玉環はその名なり。
- 【一〇】宿縁。夫婦の宿縁あること、玄宗は元來元始孔昇真人にして、妃子は蓬萊の仙子なりしが、偶々小過ありて、人界に逐はれたるものなれば、兩者の宿縁は正に當るをいふ。
- 【一一】華清。驪山宮の温泉をいふ。
- 【一二】長生。殿の名、驪山に在り、長恨歌に「七月七日長生殿、夜半無人私語時」とあるを指す。
- 【一三】巧を乞ふ。七夕の星祭のこと。
- 【一四】妙舞。霓裳羽衣の舞をいふ。
- 【一五】鞀鼓。軍鼓のこと、安祿山の亂をいふ。長恨歌に「瀟陽鞀鼓動、地來、驚破霓裳羽衣曲」とあるを指す。
- 【一六】范陽。安祿山は范陽の節度使たり。
- 【一七】馬嵬の驛。長安の西、百餘里に在り、玄宗蒙塵の時、馬嵬の驛にて、六軍發せず、

「滿江紅」の大意

古今の人情界に於て、誰か真心の徹底せるものがあらうか。若し果して誠心誠意を失はな
 いならば、終には夫婦の團圓に了るであらう。
 横に東西南北の區別もなく、縦に老幼生死の差別もない。人間の男女が、縁の拙く、薄伴を歎ずるのは、畢竟情愛が足りないからである。
 情の到る所は、金石も透り、天地をも動かし、日月と光を争ひ、歴史にも不朽の名を留めることが出来る。即ち忠臣孝子の大事業は盡く情の力でないものはない。孔夫子が詩經を刪られた際に、鄭衛の淫詩をも捨てられなかつたのも、男女の戀愛は、人情の自然に出づるからである。そこで自分もその意によりて、音律を調べ、楊太真外傳を種本として、新にこの戯曲を作つたのは、全く情を

- 【一八】西川。蜀の地をいふ。
- 【一九】遊魂。楊貴妃の幽霊。
- 【二〇】仙籍に登る。蓬萊の仙子となること。
- 【二一】變を廻らす。亂平きて玄宗の都に返ること。
- 【二二】天孫。織女星のこと、織女星が貴妃の意を憐み、玄宗と夫婦の情縁を證果することないふ。
- 【二三】羽客。臨邛の道士、楊通幽をいふ。
- 【二四】月宮の會。玄宗遂に貴妃と、月中に會すること、本傳奇の大團圓なり。
- 【二五】霓裳の遺事。霓裳羽衣、即ち貴妃の逸事をいふ。
- 【二六】漁陽の變。安祿山の亂をいふ。
- 【二七】鴻都の客。即ち楊通幽のこと、長恨歌に「臨邛道士鴻都客」とあり。
- 【二八】廣寒宮。月宮のこと。
- 【二九】織女星云云。織女星が長生殿の盟を證して、夫婦團圓に終はりしこと。

述ぶるのである。情の鍾る所は、以て生くべく、以て死すべく、全く生死を超越して居る。明皇と貴妃との、一旦は死しても、後天上にて、重ねて夫婦の團圓に終はりしは、畢竟情の力である。「沁園春」の大意は、解題中に敘説したれば、省略す。

第二齣 定情

〔生、唐の明皇に扮し、二内侍を引いて上る〕

〔大石引子〕〔東風第一枝〕 端冕 天に中し。衣を垂れて南面す。山河一統の皇唐。層霄の雨露、春を廻らし。深宮の草木、齊しく芳し。昇平、早く韶華を奏して好く。行樂するも何ぞ妨げん。願はくは此生、終に溫柔に老いんとを。 白雲の仙郷を羨まじ。韶華禁園に入り。宮樹春暉を發し。天喜び時相合し。人和して事違はず。九歌政要を揚げ。六舞朝衣を散す。別に陽臺の樂を賞し。前旬暮雨飛ぶ。朕は乃ち大唐の天寶皇帝是なり。潜邸より起りて、入つて

- 〔一〕 定情。夫婦の契をなす場。
- 〔二〕 内侍。宮女のこと。
- 〔三〕 端冕。帝冠を戴き、威儀端然たること。
- 〔四〕 天に中し。南面す。天子の位に即くこと。
- 〔五〕 韶華。春景のどかなること。太平の樂をいふ。
- 〔六〕 溫柔。婦人のこと。飛燕外傳に出づ。
- 〔七〕 白雲の仙郷。世外の樂みないふ。同書に成帝は、溫柔郷に老いんことを欲し、武帝の白雲郷を求めしを願はずといへり。
- 〔八〕 九歌。禹に九歌あり、その功を賛す。
- 〔九〕 六舞。舞樂の舞に六様あること。較舞羽舞聖舞旄舞干舞人舞をいふ。
- 〔一〇〕 陽臺の樂。婦人を愛すること。宋玉の高唐賦に出づ。
- 〔一一〕 暮雨。楚の襄王、高唐の觀に遊び、夢に巫山の神女と遇ふ。曰く、妾は巫山の陽に在り、且には行雲となり、暮に行雨となり、朝朝暮暮、陽臺の下と、ここにては楊貴妃を宮に召したることをいふ。
- 〔一二〕 天寶皇帝。即ち玄宗皇帝なり。諱は隆基、睿宗の第三

皇圖を續ぐ。人に任ずること二ならず、
 姚・宋に朝堂に委ね。諫に従ふこと流るるが
 如く、
 張・韓を省闈に列ぬ。且つ喜ぶ、塞外風清きこと萬里。民間粟賤きこと三錢。眞箇太平、治を致し、貞觀の年に庶幾く。
 刑措風を成し、漢文の世に減せず。近來機務の餘間、情を聲色に寄す。昨ふ宮女楊玉環を見しに、徳性溫和にして、丰姿秀麗なれば、茲の吉日を卜し、冊して貴妃と爲さんとす。已に旨を傳へ、華清池ありて浴を賜ひ。永新・念奴に命じて、伏侍して衣を更へしめ、即ち高力士をして、引き來りて朝見せしむ。想ふに必ず就に到るべきなり。

〔丑〕高力士に扮し、二宮女扇を執り、旦の子、初め臨淄王に封ぜらる、英武にして才略あり、兵を起して韋氏の亂を平げ、父睿宗を奉じて位に即け、旋がて禪を受く、姚崇・宋璟を以て相となし、開元の治、貞觀に比す、天寶の後、楊貴妃を寵し、李林甫・楊國忠を用ひて、安祿山の亂を致す、難を避けて、蜀に奔る、太子位に靈武に即き、帝を尊んで上皇天帝となす、在位四十四年、廟を玄宗と號す、改元するもの三、先天、開元、天寶。

〔三〕潛邸。藩王たりし時の宮をいふ。
 〔四〕姚宋。姚崇と宋璟、唐の名相をいふもの、前に房杜を推し、後に姚宋を擧ぐ。
 〔五〕張韓。張九齡と韓休、開元二十一年韓休同平章事となる、剛直にして善く諫む、左右はく、休相となつて、陛下

舊より瘦せたりと、帝曰く、朕は瘦せたりと雖も、天下は肥えたりと。
 〔六〕省闈。朝堂に同じ、役所のこと。
 〔七〕貞觀。太宗皇帝の年號。
 〔八〕刑措。刑を用ひざることを、太平をいふ。
 〔九〕漢文。西漢孝文帝のこと、時に天下太平なり。
 〔一〇〕貴妃。位皇后に次ぐ、玄宗早く后を亡ひ、寵する所の武惠妃亦死して、後宮の寂寞を嘆ぜり。
 〔一一〕永新念奴。宮女なり。
 〔一二〕高力士。宦官、玄宗の忠僕たり。
 〔一三〕恩波。天恩をいふ、波の字、溫泉に對して妙なり。
 〔一四〕彩仗。儀仗をいふ、儀仗に迎へられて宮に趨くこと。
 〔一五〕六宮。後宮のこと、始めて宮に入り、未だ六宮を知ら

楊貴妃に扮せるを引いて上る
 〔玉樓春〕 恩波自ら喜ぶ、天より降るを。浴罷み妝成つて、彩仗に趨く。

〔宮女〕 六宮未だ見ず、一時愁へ。齊しく金階に立つて眼偷み望む。

〔到る介〕

〔丑〕進んで生に見え、跪く介

〔三〕奴婢高力士見駕す。貴妃に冊封せられし楊氏、已に殿門に到りて、

旨を候てり。

〔生〕 進み來れと宣げよ。

〔丑〕出づる介

〔三〕萬歲爺より旨あり、貴妃楊娘娘に宣して、殿に上らしむ。

〔旦〕進んで拜する介

臣妾貴妃、楊玉環見駕す。願はくは我皇の萬歲ならんことを。

〔内侍〕 平身。

〔旦〕 臣妾は寒門の陋質なるに、掖庭に充選ばれ、忽ち寵命の加は

ざれば、一寸はにかむこと。
 〔三〕奴婢。宦官の天子に對する稱なり。
 〔七〕旨を候つ。天子の沙汰を待つ意。
 〔八〕萬歲爺。天子に對する敬稱、親王には千歲爺と稱す。
 〔九〕娘娘。后妃に對する敬稱。
 〔一〇〕萬歲。天子に對する慶賀の辭なり。
 〔一一〕平身。身をおこし、直立の姿勢に返へること。
 〔一二〕掖庭。後宮のこと。
 〔一三〕隕越。恐懼の意。
 〔一四〕世胄の名家。代代家柄のよきこと、後に詳なり。
 〔一五〕内職に供へ。内廷に供奉せしむること。
 〔一六〕寰區。天下をいふ。
 〔一七〕窈窕。佳麗に同じ、美人のこと。
 〔一八〕嬪嬙。後宮の夫人をい

るを聞いて、(三) 隕越の懼に勝へず。

〔生〕 妃子は (四) 世冑の名家にして、徳容兼備なれば、取つて (五) 内職に

供へ、深く朕が心に愜ふ。

〔旦〕 萬歳。

〔丑〕 平身。

〔旦、起つ介〕

〔生〕 旨を傳へて宴を排せよ。

〔丑、傳ふる介〕内にて樂を奏す、旦、生に酒を送り、宮女、旦に酒を

送り、生正坐し、旦傍に坐する介。

〔大石過曲〕念奴嬌序〔生〕 寰區萬里。徧ねく (七) 窈窕を徵求む。誰か

嬪嬙に (八) 領袖たるに堪へたる。佳麗を今朝天より付與へらる。端的絶

世無雙。思想ふに。寵を (九) 瑤宮に擅にし。 (一〇) 玉冊を褒封せられ。 (一一)

三千の粉黛も、總て甘んじて譲る。

〔合〕 惟願はくは (一二) 恩情の美滿にして、地久天長ならんことを。

〔前腔〕換頭〔旦〕 獎を蒙り。沈吟すること半晌。怕くは庸姿下體。 (一三) 椒

ふ。

〔三〕 領袖。かしの意。

〔四〕 瑤宮。後宮をいふ。

〔五〕 玉冊。貴妃に冊封せられ

しこと。

〔六〕 三千の粉黛。粉黛は美人

のこと、長恨歌に「後宮佳麗

三千人、三千寵愛在二身」

とあり。

〔七〕 恩情の美滿。夫婦の圓滿

なること。

〔八〕 地久天長。幾久しくかは

らぬ意。

〔九〕 椒房。皇后の宮をいふ。

〔一〇〕 玉冊。宮中に入つて、貴

妃となりしこと。

〔一一〕 馮嫵熊に當る。蒙求に出

づ、漢の元帝曾て虎園に幸し

て、獸を闘はせしに、熊逸し

て園を出で、檻を攀ちて、殿

に上らんと欲す、左右貴人皆

房に陪從するに堪へざらんことを。寵を受け恩

を承く、(一六) 一雲の裏。身は判る人間と (一七) 天上

と。須らく仿ふべし。 (一八) 馮嫵の熊に當り。

〔兎〕 班姬の輦を辭したるに。永く (一九) 形管を持ち

て君の傍に侍せん。

〔合〕 惟願はくは恩情の美滿にして。地久天長

ならんことを。

〔前腔〕換頭〔宮女〕 歡賞ぶ。借問す、此より

宮中。阿誰か第一にして。 (二〇) 趙家の飛燕の (二一)

昭陽に在るに似たる。寵愛の處。應さにはれ一

身承當くべし。譲るなかれ。 (二二) 金屋装成り。

玉樓歌徹り。千秋萬歳、 (二三) 霞觴を捧ぐ。

〔合〕 惟願はくは恩情の美滿にして。地久天長

ならんことを。

〔前腔〕換頭〔内侍〕 瞻仰れば。 (二四) 日は龍鱗を

驚き走る、馮婕好直に前みて

熊に當りて立つ、帝故を問ふ、

對へて曰く、猛獸は人を得て

止む、妾は熊の御坐に至らん

ことを恐れ、故に身を以て之

に當れりと。

〔兎〕 班姬輦を辭す。同じく蒙

求に出づ、班婕好、漢の成帝

に寵あり、帝秘庭に遊び、嘗

て輦を同じうして載らんと欲

す、婕好辭して曰く、古の圖

畫を觀るに、賢聖の君は、皆

名臣の側に在るあり、三代の

末主は嬖妾あり、今輦を同じ

うせんと欲するは、之に近き

ことなからんやと、帝その言

を善として止む。

〔五〇〕 形管。赤き軸の筆にて、

婦人の用ふるもの、ふえとな

すも通ず、詩經邶風靜女の篇

に「靜女其變、貽我形管」と

有り。

〔五一〕 趙家の飛燕。趙飛燕は漢

の成帝の后なり、晉唐小説中

に飛燕外傳あり。

〔五二〕 昭陽。殿の名、皇后の居

る所なり。

〔五三〕 金屋。漢武故事にいふ、

帝膠東王たり、纈に數歳、姑長

公主、抱き問うて曰く、兒婦を

得んと欲するや否やと、曰く

得んと欲すと、女阿嬌を指し

て曰く、好きや否と、笑つて曰

く、若し阿嬌を得ば、當に金

屋を作りて之に貯ふべしと、

後世金屋藏嬌の故事、之に基

く、装成るとはきれいに、お

つくりすること、長恨歌に「金

屋装成嬌侍夜、玉樓宴罷醉和

春」とあり。

〔五四〕 霞觴。うつくしき觴をい

ふ。

〔五五〕 龍鱗。天子の袞龍の衣を

いふ。日繞るは、きらきら光

ること。

〔五六〕 雉尾。又遮陽ともいふ、

〔五〕 雉尾に移る。天顔喜びあり、新妝に對し。頻りに酒を進む。合殿春風、香を飄へす。賞するに堪へたり。圓月、金を搖かし。餘霞、綺を散ず。五雲多き處、昏黄なり易し。

〔合〕 惟願はくは温情の美滿にして。地久天長ならんことを。

〔丑〕 月上れり、萬歲爺に啓して宴を撤めよ。

〔生〕 朕、妃子と共に階前に歩し、月を玩むること一回せん。

〔内〕 樂を作し、生、旦を携へて前に立ち、衆後に退りて、齊び立つ介。

〔中呂過曲〕〔古輪臺〕〔生〕 金堂より下り。燈を籠にし月に就いて、細端かに相れば。庭花も及ばず、嬌模樣。輕儂低傍。這の鬢影衣光。掩映し出す、丰姿千狀。

〔生〕 笑つて旦に向ふ介。

此夕の歡娛。風清く月朗かなり。笑ふ、他の雨高唐に暗きを夢むるを。

〔旦〕 宴賞に追遊ひ。幸に今より君王に侍するを得。瑤階に小立めば。

〔六〕 春は天語に生じ。香は仙仗を榮り。玉露は冷かに裳を沾す。還た凝望すれば。重重の金殿、鴛鴦を宿するを。

〔五〕 雉尾にて作れる宮扇なり。杜甫の詩に、「雲移雉尾開宮扇、日繞龍鱗識聖顏」とあり。雲移るとは、彩雲の動搖するが如く、雉尾扇の開く形容となし、又天の明くるとなす。

〔丑〕 天顔喜びあり。同じく杜甫の句、「晝漏稀聞高閣報、天顔有喜近臣知」を用ふ。

〔五〕 新妝。楊貴妃のこと。李白の清平調の詩に、「可憐飛燕倚新妝」の句あり。

〔五〕 金を搖かし。月光の水に映りて、金波の湧くこと。

〔六〕 綺を散ず。夕やけの景をいふ。

〔六〕 五雲。五色の祥雲をいふ。

〔三〕 燈を籠にし。ぼんぼりをつけること。

〔三〕 嬌模樣。花をあざむく、貴妃の姿をいふ。

〔六〕 輕儂低傍。そばをはなれ

〔生〕 燈を掌げて 西宮に往き去れ。

〔丑〕 應ずる介。〔内侍・宮女、各 燈を執り、生、旦を引いて行く介〕

〔前腔〕〔換頭〕〔合〕 輝煌簇擁し。銀燭の影は千行。迴に看る處、珠箔斜に開き。銀河微に亮かなり。複道廻廊。到る處に、香塵の飄颻へるあり。夜色如何。月は仙掌に高し。今霄は好風光を占斷し。紅遮り、翠障ぎ。錦雲の中、一對の鸞鳳。瓊花玉樹。春江夜月。聲聲齊しく唱ふ。月影は宮牆を過ぐ。羅幌を褰げ。好し殘醉を扶けて、蘭房に入らん。

〔丑〕 萬歲爺に啓す、西宮に到けり。

〔生〕 内侍、廻避よ。

〔丑〕 春風、紫殿を開き。

す、よりそふこと。

〔六〕 雨高唐に暗き。宋玉の高唐の賦の故事、前に出づ、彼は夢我は實なるをいふ。

〔六〕 春は天語に生じ。天子よりやさしき御詞を賜はるること。

〔六〕 仙仗。天子の儀仗をいふ。

〔六〕 鴛鴦か宿す。鴛鴦の瓦、翡翠の衾にかけていひ、睡情を引き起すこと。

〔六〕 西宮。妃嬪の居る所。

〔六〕 輝煌。燈光のかがやくこと。

〔七〕 珠箔。珠簾のこと。

〔七〕 複道。わたりらうかのこと。

〔七〕 香塵。香氣のこと。

〔七〕 仙掌。漢の武帝、神仙を好み、仙人掌を造る、仙人が手掌を以て、盤を撃げ、甘露を承くるに象る。

〔七〕 好風光。風流を占めつくす意。

〔七〕 紅遮り翠障ぎ。宮女の多きこと。

〔七〕 錦雲。帳をいふ。

〔七〕 鸞鳳。夫婦に喩ふ、明皇と貴妃をいふ。

〔七〕 瓊花玉樹。歌曲の名、即ち陳の後主の作る所、玉樹後庭花をいふ。

〔六〕 春江夜月。同上、隋の煬帝の作る所、春江花月夜をいふ。

〔八〕 月影云云。夜の更けしこと。

〔八〕 羅幌。入口のとばり。

〔八〕 蘭房。閨中のこと。

〔八〕 紫殿。紫宸殿、御所のこと。

〔八〕 天樂。天上の樂。

〔八〕 花燭に搖れ。洞房花燭をいふ。

〔八〕 良夜の歡情。れやのむつ

〔内侍〕 (八五) 天樂珠樓を下る。

〔同に下る〕

〔餘文〕〔生〕 (八六) 花燭に揺れ、月窓に映す。(八七) 良夜の歡情をば、細講せん。

〔合〕 問ふこと莫れ、他の別院離宮、玉漏の長きを。

〔宮女、生・旦の與めに衣を更へ、暗に下る〕〔生・旦、坐する介〕

〔生〕 銀燭廻光、綺羅に散じ。(八九)

〔旦〕 御香深き處、恩を奉ずること多し。(九〇)

〔生〕 (九一) 六宮此夜、顰を含んで望む。

〔合〕 明日争ひ傳へん (九二) 得寶の歌。

〔生〕 朕と妃子と、偕老の盟は、今夕伊に始まる。

〔袖より釵・盒を出す介〕

特に (九三) 金釵・(九四) 鈿盒を携得へて此に在り。卿と與に (九五) 情を定めん。

〔越調近詞〕〔綿搭絮〕〔生〕 (九六) この金釵鈿盒。(九七) 百寶翠花攢る。我緊く (九七) 懷中に護り。珍重奇擎、萬般あり。

今夜這釵を把つて。

ことをいふ。

〔八八〕 玉漏の長き。夜の長きを歎する意、冷宮の宮人が、孤眠永夜の歎きをいふ。

〔八九〕 散す。照らすこと。

〔九〇〕 六宮。後宮の妃嬪をいふ。

〔九一〕 顰を含む。顔をしかめ、憂愁の貌。

〔九二〕 得寶の歌。貴妃を得たるを喜ぶ歌。

〔九三〕 金釵。金のかんざし。

〔九四〕 鈿盒。青貝細工の香箱のこと。

〔九五〕 情を定む。夫婦の契を結ぶこと。

〔九六〕 百寶翠花攢る。花簪のこと。

〔九七〕 懷中に護り。香盒を大切に懷中すること。

〔九八〕 雲盤。まげのこと。

〔九九〕 雙鸞。一對の意。

〔一〇〇〕 香紉。はんげちの如し。

欄の與に (八九) 雲盤を助け。斜に (九〇) 雙鸞を挿む。

這盒は。

早晚深く錦袖に藏し。密に (一〇〇) 香紉に裏み。願はくは他の翅を並べて交飛し。牢く (一〇一) 同心を扣へ、(一〇二) 合歡を結ぶに似んことを。

〔旦に付す介〕〔旦、釵・盒を接けて謝する介〕

〔前腔〕〔換頭〕 謝す、金釵・鈿盒、賜はりて君の歡びを奉ずるを。只恐らくは、(一〇三) 寒姿。天家の (一〇四) 雨露の團かなるに消不得ざるを。

〔背いて看るを作す介〕

恰も偷觀れば。(一〇五) 鳳翥り、龍蟠る。愛殺す、この雙頭の (一〇六) 旖旎。(一〇七) 兩扇の團圓たるを。惟だ願取はくは、情の堅金に似。釵の (一〇八) 單分せず、盒の永く完からんことを。

〔生〕 朧明なる春月、花枝を照し (一〇九) (元稹)

〔旦〕 始めて是れ新に恩澤を承くるの時(白居易)

〔生〕 長く (一一〇) 玉人に倚つて、心自ら酔ひ(雍陶)

〔合〕 年年歲歲斯に樂まん(趙彦昭)

〔一〇一〕 同心。盒の上下(ふたとみ)同じものを、てふつがひにて、とめてあると、同心は易の繫辭傳に、「同心之交、其臭如蘭」とあり、夫婦の義に取る。

〔一〇二〕 合歡。夫婦合歡の意、盒のあひぶたなるを以ていふ。

〔一〇三〕 寒姿。いやしき身、謙稱なり。

〔一〇四〕 雨露の團。天恩の優渥なることに喩ふ。

〔一〇五〕 鳳翥り龍蟠る。花簪の美しき形容。

〔一〇六〕 旖旎。ふれること。

〔一〇七〕 兩扇。ふたとみ。

〔一〇八〕 單分せず。一對の意。

〔一〇九〕 元稹。この詩句の作者の名、以下同じ、盡く唐人の詩句を集めたるものなり、之を集唐といふ、牡丹亭還魂記も集唐の句を用ひて下場詩となせり。

〔一一〇〕 玉人。美人のこと。

第三齣 賄權

〔淨〕安祿山に扮し、〔三〕箭衣、〔四〕氈帽にて上る。

〔正宮引子〕〔破陣子〕失意空しく、頭角を悲しむ。傷心更に、羅置に陥る。

異志十分、屈伏し難く。悍氣千尋、怎ぞ蔽遮せん。權時寧ろ耐些へん。

腹は垂れて膝を過ぎ、力は千鈞。足智多謀、膽は絶倫。誰か道ふ、孽龍、

蛟屈を甘んずと。江を翻し海を攪せば、便ち人を驚かす。自家は

安祿山、〔二〕營州柳城の人なり。俺が母親は阿史德、子を軋摩山中に求

め、家に歸つて俺を生めり。因つて祿山と名づく。那の時、光帳房

に満ち、鳥獸盡多く鳴竄す。後母の改めて安延偃に嫁するに隨ひ、遂に

姓安氏を冒し、節度使張守珪の帳下に在りて軍に投ず。他道ふ、我生

れて、異相ありと。養うて義子と爲し、我に討撃使の職を授け、去いて

奚契丹を征討せしむ。一時勇を恃んで輕しく進み、殺得ひて大に敗

〔一〕賄權。權臣に賄ふ場。
〔二〕箭衣。戎服にして、袖の
小さきもの。

〔三〕氈帽。胡人の帽子。
〔四〕頭角。小兒の發達するも
のを稱して頭角崢嶸といふ、
角がはえるといふ如し、又崢
然頭角を露はすともいふ、頭
角を悲しむとは、その反對に
て、功名の遂げざるを悲しむ
意、失意の貌なり。

〔五〕羅置。刑罰のこと。
〔六〕異志。謀反の志。
〔七〕悍氣。豪氣に同じ。
〔八〕孽龍。安祿山自らいふ、
孽は庶子の意、雜胡なるを以

れて逃れ回る。幸に張節度の、寬恩にして殺さざるを得て、京に解りて
旨を請ふ。昨日京に到り、吉凶未だ保せず。且つ喜ぶ〔一〕個の義を
結べる。兄弟張千と喚び作すものあり。原是楊丞相府中の、幹辦な
り。昨已に解官を、買囑して、暫時鬆放され、他を尋ねて個の
〔三〕關節を通じたるに、禮物をば收去め、我をして今日彼に到つて覆を
候たしむ。不免前去走遭ん。

〔行く介〕

唉。俺安祿山も、也〔一〕個の好漢なるに、難道這般結果に了る麼。想
起ひ來れば好だ恨也し。

〔北宮過曲〕〔錦纏道〕莽龍蛇、本河を翻へし海を決せんと待せしに。

翻つて水を失ひたる。甕中の鼈と做了る。恨む、樊籠雲時、豪傑を困

しむるを。早く軍機を失へば、斧鉞に遭ふ要きを知道らば。倒て如か

ず、沙場に喪はれ。縲紲を受くるを免れんには。幕地里に、脚雙び

跌く。〔三〕全く金を暮夜に投ずるに憑仗て。一身をば、阱穴より離る。算

へば天吾を生かすに意あるなり。不爭でか半路にして、枉げて摧折せん。

ていふ。

〔九〕蛟屈。雌伏に同じ、小さ
くなつて、我慢すること。
〔一〇〕江を翻し海を攪す。謀反
のこと。

〔二〕營州。今直隸朝陽府の地。
〔三〕帳房。てんとのこと。
〔三〕節度使。鎮臺の司令官、
權勢頗る大、今の督軍の如し。

〔四〕異相。異人の相、反相な
り。
〔五〕奚契丹。蒙古族に屬す、
東部内蒙古の地に據れり。
〔六〕保せず。保證されぬ意。
〔七〕兄弟。弟の意。
〔八〕幹辦。小使のこと。
〔九〕解官。監獄の押丁、護送
の役人をいふ。

〔一〇〕買囑。買収に同じ。
〔一一〕鬆放。自由にすること。
〔一二〕關節を通じ。即ち今の語
にて、運動すること。
〔一三〕難道。あにといふ如し、

此に來れば、已是に相府の門首なり。且張兄弟の出來るを待たん。

〔丑〕張千に扮して上る

君王の舅子、三公の位。宰相の家人、七品の官。

〔見る介〕

安大哥來れるか。丞相爺は、已に禮物をば、全く收めて、爾をして府に進んで相見えしむ。

〔淨、揖する介〕

兄弟の周旋を多謝す。

〔丑〕丞相爺は尙未だ堂に出でざれば、且く班房に到つて少しく待て。

〔毛〕

全く内閣に元を調する手に憑つて。

〔淨〕邊關に利を失へる人を救取ふ。

〔同に下る〕〔副淨、楊國忠に扮し、祇從

反語に用ふる助辭。

〔二〕莽龍蛇。嶽山の奸雄に喩ふ。

〔三〕甕中の鼈。失脚せること。

〔六〕樊籠。鳥籠のこと、囚はれの身となるをいふ。

〔七〕斧鉞。死刑のこと。

〔八〕縲絏を受く。繩をかけらるること。

〔九〕脚雙び跌く。雙脚が蹉跌すること。

〔三〇〕金を暮夜に投ず。暮夜に金を送り、賄賂をつかふこと、漢の楊震の故事を反用す。

〔三〕阱穴より離る。刑罰を免るること。

〔三〕君王の舅子。楊國忠をいふ。

〔三〕三公。大臣のこと。

〔三〕宰相の家人。自分のこと。

〔三〕七品の官。高等官の末に列する意、賄賂の盛に行はるるをいふ。

るをいふ。

〔三〕揖。手を拱する對等の挨拶。

〔三〕班房。受付といふ如し、自分の室のこと。

〔三〕元を調ふ。宰相は陰陽を治め、元氣を調ふるものなるをいふ。

〔三〕邊關利を失ふ。敗軍の將、自らいふ。

〔四〕祇從。從者のこと。

〔四〕威晚。天子の外戚たること。

〔四〕中書。内閣のこと。

〔四〕手を炙ふ。威權の盛なること、杜甫の麗人行に「炙手可熱勢絶倫、慎莫近前丞相瞋」の句あり。

〔四〕三台八座。三台は三公、八座は左右僕射と六部尙書とをいふ。

〔五〕楊國忠。實は貴妃の從兄なり。

を引いて上る

〔仙呂引子〕〔鶴橋仙〕榮は帝里に誇り。恩は戚晚に連り。兄妹都て天眷を承け。中書獨り坐して、朝權を攪る。看よ手を炙ふ。威風赫

烜たるを。國政吾が掌握の中に歸し。三台八坐尊崇を極む。朝を退くの日晏く私第に歸れば。無數の官僚下風を拜す。下官は楊國忠、乃ち西宮

貴妃の兄なり。官は右相に居り、秩は司空に晉む。日月の光華を分かち、風雷の號令を掌る。

〔冷笑する介〕

奢を窮め慾を極め、行樂の時に及ぶに非ざる無く。賄を納め權を招き、眞個天を回らすに力あり。左右廻避けよ。

〔從、應じ下る〕

〔副淨〕適纒張千の稟説すに、一個の邊將、安祿山といふものあり、陣に臨んで機を失ひ、京に

解りて法を正さるるに因り、特に禮物を獻じて府に到れるが爲に、死を免じて發落めんことを要

求む。我想ふに勝敗は乃ち兵家の常事、陣に臨んで偶然利を失ふは、情に原す可きあり。

〔興〕西宮。皇后の意に用ふ。

〔四〕祿に同じ。

〔四〕司空。司徒・司馬と共に三公の一なり。

〔四〕日月の光華。天子の恩光をいふ。

〔五〕風雷の號令。權威あること。

〔五〕行樂の時に及ぶ。古詩に「爲樂當及時」の句あり。

〔五〕天を回らす。天は君の象、天を回らすとは、君の心を挽回すること、唐書張玄素の傳に「魏徵曰、張公論事有回天之力」と。

〔五〕發落。始末すること、處理すること。

〔副淨〕適纒張千の稟説すに、一個の邊將、安祿山といふものあり、陣に臨んで機を失ひ、京に解りて法を正さるるに因り、特に禮物を獻じて府に到れるが爲に、死を免じて發落めんことを要求む。我想ふに勝敗は乃ち兵家の常事、陣に臨んで偶然利を失ふは、情に原す可きあり。

〔笑ふ介〕

就ち他が死を免すも、也是朝廷の爲に人才を愛惜するなり。已曾に分付けて他を進見せしめ、再び道理を作さん。

〔丑、暗に上りて見ゆる介〕

張千稟事、安祿山外に在つて伺候す。

〔副淨〕 他を進來ましめよ。

〔丑〕 領鈞旨。

〔五〕 虚と下り、淨の 青衣小帽せるを引いて上る

〔丑〕 這裡に來れ。

〔淨、膝行し進んで見ゆる介〕

〔五〕 犯弁安祿山、丞相爺に叩見す。

〔副淨〕 起來よ。

〔淨〕 犯弁是は應に死すべき囚徒なれば、理として當さに跪いて稟すべし。

〔副淨〕 爾の來意は、張千より已に講過たり。且く犯罪の情由を細説一番よ。

〔淨〕 丞相爺聽稟。犯弁は軍令を遵奉し、去いて奚・契丹を征討す。

〔五〕 虚と下り。舞臺を下るふりすること。
〔五〕 青衣小帽。罪人の服装。
〔六〕 犯弁。弁は武官のこと、罪を犯せるを以て犯弁といふ。

〔副淨〕 起來て講へ。

〔淨、起つ介〕

〔仙呂過曲〕〔解三醒〕 勇銳を恃み。鋒を衝いて出で戦ふ。征途を指せば。

向ふ所前なし。〔五〕 隄防せざりき。番兵夜來りて圍合まんとは。轉た白刃に臨んで。〔五〕 空卷を刺す。

〔副淨〕 後來怎生、脱することを得たるや。

〔淨〕 那時犯弁は、〔一〕條の 血路を殺し、奔つて重圍を出で。

單鎗匹馬、身幸に免る。只微功を慶録めて、罪愆を 折せんことを指望み

しに。誰か想はんや今日、〔三〕 刑憲に當らんとは。

〔叩首する介〕

望むらくは、高く 貴手を擡げて。曲げて矜憐を賜はらんことを。

〔副淨、起つ介〕

〔前腔〕〔換頭〕 律を失ひ師を喪ふを論ずるは、〔五〕 鉅典に關る。我朝綱

を總ぶと雖も、敢て擅專にせんや。況んや〔六〕 刑書已に定まり、更に變へ難し。恐らくは力の 天を

回らす可き無し。

〔五七〕 隄防せず。思ひがけざる
こと、用心せざること。
〔六〕 番兵。番は蕃に同じ。
〔五八〕 空卷を刺す。卷は弩なり、矢の盡くるまで奮戦せしこと。
〔六〇〕 血路を殺し。奮闘して、路を開くこと。
〔六一〕 折。割引すること。
〔六二〕 刑憲。刑法に同じ。
〔六三〕 貴手を擡ぐ。救ふこと。
〔六四〕 律。軍律、命令のこと。
〔六五〕 鉅典。朝廷の大法をいふ。
〔六六〕 刑書。刑法の條文。
〔六七〕 天を回らす。前に出づ。

〔淨、跪いて哭する介〕

丞相爺、若し肯て救援らるれば、犯弁就ち生くるを得ん。

〔副淨、笑ふ介〕

便ち道ふ、我れ言従はれ計聽かれて、微しく權ありと。這就裏の機關は、言ひ易からず。

〔淨、叩頭する介〕

全く丞相爺の做主に仗る。

〔副淨〕也罷。我が明日朝に進むを待つて、機を相て便を行はん。

其便に乗じて。便ち好し、羅を開き網を撤し。汝が生全を保せん。

〔淨、叩頭する介〕

丞相爺の太恩を蒙る。犯弁が犬馬の報を圖るを容せ。就此告辭。

〔副淨〕張千、他を引いて出で去け。

〔丑、應じ、淨と同一出づる介〕

眼に捷旌旗を望み。耳に好消息を聽く。

〔同に下る〕〔副淨、想ふ介〕

〔六〕言従はれ。天子が自分の言ふことを聽いて下さること。

〔六九〕機關。心中の計略をいふ。

〔七〇〕言ひ易からず。天機洩らすべからざる意。

〔七一〕做主。主張する意。

〔七二〕便を行ふ。よろしくとりはからふこと。

〔七三〕羅を開き。罪を免すこと。

〔七四〕保。保證の意。

〔七五〕捷旌旗。好消息に同じ、よきしらせのこと、原來試験及第の報をいふ。

我想ふに、安祿山は、乃ち邊方の末弁にて、従未だ著しく勞績あらず、今日死罪を犯了せり。我若し特地に他を救はば、必ず聖上の疑を動かさん。

〔笑ふ介〕

哦、有了。前日張節度の疏内に、曾説く、他は六番の言語に通曉し、諸般の武藝に精熟すれば、邊將の任に當つ可しと。我就ち意を兵部に授け、此を以て辭と爲し、聖上に奏請して他を召し、御前にて試験せしめ、中に於て機に乗じ、旨を取らば、豈不是好。

專權意氣、本豪雄。(盧照鄰)

〔四〕萬態千端、一瞬の中。(吳融)

多く黄金を積んで、刑戮を買ふ。(李咸用)

妨げず私薦の、也公と成るを。(杜荀鶴)

〔六〕末弁。末は小の意。

〔七〕従。從來の略。

〔七六〕疏内。上奏の中に。

〔七五〕六番。番は蕃なり、外國の意。

〔八〇〕兵部。陸軍省のこと。

〔八一〕辭と爲し。申し出づること。

〔八二〕中に於て。その間に於ての意。

〔八三〕旨を取る。御沙汰を仰ぐ意。

〔八四〕萬態千端。どうにでも變はる意。

〔八五〕私薦の公となる。公私を混同すること。

第四齣 春睡

〔旦〕老旦の永新に扮し、貼旦の念奴に扮せるを引いて上る
〔越調引子〕祝英臺近 夢回るの初め。春
は人に透りて。梳裏に倦懶からしむ。粧
臺に傍はんと欲するも。粉脂に澆さるるを羞
づ。

〔老旦・貼旦〕他の 遅日房櫺。好風簾幕を
趁ひ。且つ香を熏じて間坐するを、消受せ
ん。

永新念奴叩頭す。

〔旦〕起來よ。

〔海棠春〕流鶯窓外、啼聲巧みに。睡未
だ足らざるに、人を驚覺す。

〔一〕春睡。楊貴妃朝寢の場。

〔二〕夢回る。夢のさめるこ
と。

〔三〕春は人に透りて。人も春
心になりて、ゆつたりとする
意。

〔四〕梳裏。梳洗に同じ、化粧
すること。

〔五〕粉脂に澆さるるを羞づ。
天然の麗質、却て脂粉に汚さ
るるを恐るる意。

〔六〕遅日房櫺。朝日がやはら
かく、窓にさしこむこと。

〔七〕好風簾幕。そよ風が簾に
吹きこむこと。

〔八〕趁ひ。及ぶ意。

〔九〕消受。つかふこと、する
こと。香をくゆらして、間坐
せんの意なり。

〔一〇〕海棠春。詞なり、歌はず、
宋の秦觀の春睡を詠める作、
詞意は、唐詩の「春眠不覺
曉、處處聽啼鳥、夜來風雨
聲、花落知多少」に基いて
作る。

〔一一〕翠被。翡翠の衾をいふ。

〔一二〕寶篆。よき香のこと。篆
とは香の烟りがたなびきて、
篆書の體の如くなるを以てい
ふ。

〔一三〕宿醒。宿醉に同じ。

〔一四〕宮娥。宮人に同じ。

〔老〕 翠被に曉寒輕く。

〔貼〕 寶篆は沈烟裊く。

〔旦〕 宿醒未だ醒めざるに、宮娥報す。

〔老貼〕 道ふ別院、笙歌の會早しと。

〔合〕 試みに問ふ海棠の花。

〔旦〕 昨夜開くこと多少。

〔旦〕 奴家は楊氏、弘農の人なり。父親は元琰といひ、官は蜀中の
司戸たり。早く 怙恃を失ひ、養はれて叔父の家在り。生れて

〔五〕 玉環の左臂に在る有り、上に太真の二字を隠せしかば、因つて玉
環と名づけ、小字は太真といふ。性格は溫柔にして、姿容は艶麗なり。

〔六〕 漫に羅袂を措へば、涙紅氷を滴らし。薄か霞綃を試むれば、汗香玉
を流す。聖眷を荷蒙り、宮嬪より抜きんでられて、位は貴妃に列せられ、
禮は皇后に同じ。兄の國忠あり、拜せられて右相となり、三姉も盡く夫人に封せられ、一門の
榮寵極れり。昨宵西宮に侍寝して、

〔低うする介〕

〔五〕 弘農。河南河南府に屬
す。

〔六〕 司戸。戸籍吏のこと。

〔七〕 怙恃。父母をいふ。

〔八〕 玉環。皮膚の痣紋をい
ふ。

〔九〕 漫に羅袂云云。以下姿容
の艶麗なるを形容するなり。

紅涙とは、涙が美人の紅粉を
呈したる頰を傳ふこと。香玉
とは、流汗をいふ。羅袂を措
ふとは、羅袂にて拭ふこと。

霞綃を試むとは、手巾にて汗
をふくことなり。

〔一〇〕 三姉。韓國魏國秦國の
三夫人に封せらる。後に詳な
り。

未だ (三) 雲嬌雨怯を免れず。今日晌午の時分、纔に起來るを得たり。

〔老・貼〕 (三) 鏡奩齊備せり。請ふ娘娘理妝せよ。

〔旦、行く介〕

(三) 綺疏曉日、珠簾映じ。紅粉春妝、寶鏡催す。

〔坐して鏡に對ふ介〕

〔越調過曲〕〔祝英臺〕 鬢をば軽く撩で。鬢を細に整ふ。鏡に臨んで、眼頻りに陵る。

〔老〕 請ふ娘娘、這の (二) 花鈿を貼上れ。

〔旦〕 翠鈿を貼了る。

〔貼〕 再た這の臙脂を點上せ。

〔旦〕 紅脂を注了す。

〔老〕 請ふ娘娘、眉を畫け。

〔旦、眉を畫く介〕

意を著て、再た (三) 雙娥を描く。

〔旦、立起つ介〕

〔三〕 雲嬌雨怯。嬌羞の態をいふ。

〔三〕 鏡奩。化粧道具をいふ。

〔三〕 綺疏。疏は窓のこと。

〔二〕 花鈿。額のあたりに貼る飾具なり、西廂記にも「宜レ貼」

翠花鈿この句あり。

〔五〕 雙娥。娥は蛾眉、詩經碩人の詩に「螭首蛾眉」とあり。

(三) 延俄。慢に支持す。楊柳の腰身。

〔貼〕 呀、娘娘。花兒也た戴くを忘れたり。

〔旦に代つて花を挿す介〕

好し櫻桃の花朶を添上ふ。

〔老・貼〕 旦を見るを作す介

這の粉容の嫩なるを看了れば。只風兒の (二) 彈破せんことを怕る。

〔老・貼〕 請娘娘、衣を更へよ。

〔旦の與に、衣を更ふる介〕

〔前腔〕〔換頭〕 麝蘭の (三) 香を飄墮へし。金繡の影 (三) 杏衫の羅に更了ふ。

〔旦、歩む介〕〔老・貼看る介〕

爾看、小しく (三) 步搖を顛はし。軽く (三) 湘裙を蕩かす。

〔旦、鞋を (三) 兜むる介〕

低く (三) 半彎の (三) 凌波を蹴て。停安なり。

〔旦、影を顧みる介〕

〔老・貼〕 鼻として風に臨む。百種の (三) 嬌嬈。

〔三〕 延俄。西廂記に「慢俄延」とあり、同意なり。

〔二〕 楊柳の腰身。なやかな腰をいふ。

〔二〕 花兒。はなかんざしのこと。

〔三〕 彈破。風に吹き破らるること、美人の膚のうすきをいふ。

〔三〕 香を飄墮す。衣を脱ぐ時に香の散ること。

〔三〕 杏衫の羅。友染のうす衣といふ如し。

〔三〕 步搖。簪のこと。

〔三〕 湘裙。水色の裳をいふ。

湘は湘水の意。

〔三〕 兜む。鞋をなほすこと。

〔三〕 半彎。鞋のそること、即ち弓鞋なり。

〔三〕 凌波。凌波磯の略、湘妃が水の上を歩む如く、身の輕き意、此にては輕き鞋をいふ。

〔三〕 嬌嬈。しなやかなこと。

〔旦〕身を回へして、鏡に臨む介。

〔老・貼〕還た鏡に對す、千般の婀娜。

〔旦〕倦態欠伸を作す介。〔老・貼〕扶くる介。

娘。恁。懨懨たらば。何ぞ重ねて。衾窩に就くを妨げん。

〔旦〕也罷、身子困倦れたれば、且自、略睡。片時、永新・念奴、我が

與めに。張兒を放下せ。正是。端無く春色、人を薰して困しま

しめ。纔に起きて頭を梳り、又眠らんと欲す。

〔睡る介〕〔老・貼〕帳を放す介。

〔老〕萬歳爺は、此時宮に進み來らず。敢是、梅娘の那邊に到り去るか。

〔貼〕姐姐、爾還知らずや。梅娘は、已に上陽樓東に遷置され

たるを。

〔老〕哦、這等の事あるか。

〔貼〕永新姐姐、この幾日は、萬歳爺は、専ら楊娘を愛して、不時

に西宮に來往し、内侍すらも、也た駕に隨はしめず。我は爾と須らく小

心て伺候するを要すべし。

〔三六〕婀娜。なまめかしき貌、

西廂記に「千般婀娜、萬般旖

旎」とあり。

〔三九〕懨懨。だるきこと。

〔四〇〕衾窩。牀をいふ、窩の字

は韻の爲に下せり。

〔四一〕片時。暫時の意。

〔四二〕帳兒。牀を蔽ふカーテン

のこと。

〔四三〕端無く。そぞろにの意。

〔四四〕人を薰す。人の心に沁み

込むこと、人をだるからしむ

る意。

〔四五〕姐姐。れいさんといふ如

し。

〔四六〕上陽樓。樓の名、冷宮な

り、龍を失ひし宮人の居る所。

白樂天の詩に「上陽白髮人」あ

り。

〔四七〕不時。不意に同じ。

〔生、行き上る〕

〔前腔〕〔換頭〕欣可ぶ。後宮新に嬌娃を得て。一日幾たびか 摩挲す。

〔生、進むを作し、老・貼見る介〕

萬歳爺の駕到なるに、娘は剛纔睡れり。

〔生〕不要驚他。

〔帳を掲ぐるを作す介〕

試みに 綃帳をば慢に開けば。龍腦微かに聞え。一片の美人香和す。

〔熊る科〕

愛す、他の 紅玉一團。鴛衾を壓著して側臥するを。

〔老・貼〕背く介。

この 温存。怎んぞ 風流の高座を占めざらん。

〔旦、驚き醒め、低く問ふを作す介〕

〔前腔〕〔換頭〕誰箇ぞや。慕然鴛幃を掲起ぐるは。星眼倦んで還た

接る。〔坐起して眼を摩り、鬢を掠むるを作す介〕

〔四八〕摩挲す。愛撫すること。

〔四九〕綃帳。一本には綃帳と

あり。

〔五〇〕龍腦。美人香。共に香の

名。

〔五一〕紅玉一團。貴妃の身體を

形容していふ。

〔五二〕鴛衾。鴛鴦の模様ある

衾。翡翠の衾に同じ。

〔五三〕背く介。見ぬふりするこ

と。

〔五四〕温存。溫柔に同じ、愛ら

しきこと。

〔五五〕風流の高座。風流第一の

意。

〔五六〕星眼。美しく光る意。

〔五七〕接。採なり。

〔生〕 早則(五) 淺淡の粉容、消褪たる唇朱、掠削れたる鬢兒(五) 敬坐つ。
〔老・貼〕 旦を扶け起すを作し、旦、眼を開いて復た閉ぢ、立起ちて又坐倒るるを(六) 作す介。
〔生〕 憐む他の侍兒扶け起すも。腰肢(六) 嬌怯怯として、(六) 存し難く坐し難きを。

〔老・貼〕 旦を扶けて坐せしむる介(七) 〔生、扶け住むる介〕

愆く(三) 朦朧。且つ索に(三) 消詳停和にすべし。

〔旦〕 萬歳。

〔生〕 春晝晴和、正に時に及んで游賞するに好し。何の爲に午に當つて睡眠するや。

〔旦、低うする介〕

夜來寵を承け、雨露の恩濃かにして、(六) 花枝の力弱きを覺えず。強ひて起きて頭を梳れば、却つて又朦朧として睡り去り、此に因りて聖駕を迎ふるを(六) 失せり。

〔生、笑ふ介〕

這等説はば、倒是つて寡人(六) 唐突せり。

〔五〕 淺淡。消褪。おつくりのはげしこと。寝みだれたる貌。
〔五九〕 敬坐。ゆがむこと。
〔六〇〕 嬌怯怯。怯怯は助辭。
〔六一〕 存し難く坐し難し。起きて居られぬこと。
〔六二〕 朦朧。目のさめぬこと。
〔六三〕 消詳停和。しづかに寝かして置く意。
〔六四〕 花枝。自ら喩ふ、褒語なれども更に韻あり。
〔六五〕 失す。手落の意、失禮な謝する意なり。
〔六六〕 唐突。だしぬけ、失禮の意。

〔旦、嬌羞、語らざる介〕

〔生〕 妃子、爾が神思の困倦せるを見るに、且らく前に前殿に到り去つて、消遣片時せん。

〔旦〕 領旨。

〔生・旦、同行し、老・貼、隨行する介〕

〔生〕 落日 王母を留め。

〔旦〕 微風(六) 少兒に倚る。

〔老・貼合〕 宮中行樂の秘。外人知る有ること少なり。

〔生・旦、轉じ坐する介〕〔丑、上る〕

(六) 晝漏聞くこと稀に、高閣より報じ。天顏喜びあり、近臣知る。萬歳爺に啓す、國舅楊丞相、旨に遵ひて、安祿山を試験し、宮門の外に在つて回奏せんとす。

〔生〕 (七) 宣して進み來らしめよ。

〔丑、宣する介〕

楊丞相 宣あり。

〔副淨、上る〕

〔七〇〕 王母。西王母のこと、貴妃に喩ふ。
〔六一〕 少兒。少年に同じ、明皇をいふか。
〔六二〕 晝漏云云。杜詩の句、定情の齣に出づ。晝漏は夜漏に對す、日長く聞くこと稀なれば、表の高閣より時を報ずる意。
〔七〇〕 宣す。旨を宣ぶること。

天下の表章は(七)院を経て過ぎ。宮中の笑語は牆を隔てて聞こゆ。

〔拜し見る介〕

臣楊國忠見駕す。願はくは吾が皇萬歲、娘娘千歲ならんことを。

〔丑〕平身よ。

〔副淨〕臣陛下に啓す、(七)委を蒙りて、安祿山を試験したるに、果して

人材の壯健、弓馬の(七)熟嫻に係る。特此(七)覆旨。

〔生〕朕昨張守珪の奏を見るに、祿山は六番の言語に通曉し、諸般の武

藝に精熟し、邊將の任に當つ可しと稱す。今(七)機を失して斬に當す。是

を以て卿に委ねて之を驗せしむ。既然奏する所、(七)誣ならずんば、卿は

旨を祿山に傳へて、其前罪を赦し、明日早朝引見し、職を授けて京に在

らしめ、以て(七)後効を觀る可し。

〔副淨〕領旨。

〔下る〕

〔丑〕萬歲爺に啓めぐ、(七)沈香亭の(七)牡丹盛んに開きたれば、請ふ萬歲爺、娘娘と同一賞玩せ

られよ。

〔七〕院。府に同じ、役所をいふ。

〔七〕委。委任の意。

〔七〕熟嫻。熟練に同じ、嫻はならふ意。

〔七〕覆旨。旨に答ふること。

〔七〕機。戰機のこと。

〔七〕誣。詐に同じ。

〔七〕後効。効は功に同じ、後日功を立てて前罪を贖はしむる意。

〔七〕沈香亭。南内興宮内に在り、沈香を以て造るといふ。

〔七〕牡丹。一に木芍薬と稱す、唐の時外國より傳はり、盛に流行す。

〔生〕今日妃子に對して、名花を賞するに、高力士は、(八)翰林李白に宣して、沈香亭の上に到り、

立ちに(八)新詞を草

して、供奉せしむ可

し。

〔丑〕領旨。

〔生〕妃子、爾と花

を賞で去來ん。

〔生〕檻に倚つて

繁花、露を帯びて

開く。(羅虬)

〔旦〕相將游戲

して、池臺を繞る。(孟浩然)

〔生〕新歌一曲、人をして豔ならしむ。(萬楚)

〔合〕只相如の詔を奉じて來るを待つ。(李商隱)

〔八〇〕翰林。翰林院、文事秘書

を司る役所、士林の榮選なり、李白時に詩を以て玄宗に寵あり、翰林學士たり。

〔八一〕新詞。即ち清平調三首なり、唐詩選に出づ。

一

雲想衣裳花想容。春風拂檻露華濃。若非群玉山頭見。會向瑤臺月下逢。

二

一枝濃艷露凝香。雲雨巫山枉斷腸。借問漢宮誰得似。可憐飛燕倚新粧。

三

名花傾國兩相歡。常得君王帶笑看。解釋春風無限恨。沈香亭北倚闌干。

大真外傳に云ふ、禁中木芍薬を重じ、上沈香亭前に移植せしむ、會花方に繁開す、上照夜白に乗り、妃步輦を以て從ふ、上曰く、名花を賞し、妃子に對するに、焉んぞ舊樂詞を用ひんと、遽に李龜年に命じて、金花箋を持ちて、宣し

て翰林學士李白に賜はり、立るに清平樂三詞三篇を進めしむ」と、此の事は藝林の佳話としてあまりに有名なれば、ここには略して詳に述べず、遙に第二十四齣、驚變に至り、補寫照應す、更に生色あるを覺ゆ。

〔八二〕相如。漢の司馬相如、賦に妙なり、今李白を以て是に喩ふ。

第五齣 禊游

〔丑、上る〕

〔雙調引子〕〔賀聖朝〕
出入殊恩を荷ふ。

崇班内殿に尊を稱し。天顔に親しく、朝昏に奉ず。

〔四〕金貂玉帶、蟒袍新

咱家は高力士とは是れなり。官は驃騎將軍に拜せられ、職は六宮の中を掌り、權は百僚の上を壓す。機を迎へ、款を導きて、聖情を摸揣り、曲意小心、天寵を荷承へり。今は乃ち三月三日、萬歲爺は、貴妃娘娘と與に、曲江に游幸し、咱に命じて、楊丞相并に秦、韓、虢三國夫人を召して、一同駕に隨はしむ。不免前去いて、旨を傳へて他に與へん。聲を傳へて戚里に報じ。今日長楊に幸す。

〔下る〕〔淨、冠帶、從を引いて上る〕

〔前腔〕一たび 權門に請託してより。天家の雨露重ねて新なり。〔三〕
累臣今親臣と作るを喜ぶ。壯懷會らず當に伸ぶべし。

- 〔一〕 禊游。三月三日みそぎ遊の場。
- 〔二〕 崇班。高官に拜せらるること。
- 〔三〕 朝昏。朝夕奉仕する意。
- 〔四〕 金貂。冠をいふ。
- 〔五〕 蟒袍。龍の模様の袍、三公の服なり。
- 〔六〕 機を迎へ款を導き。聖意のある所を洞察して、機嫌を取ることに、この四句近侍の心理を曲盡せり。
- 〔七〕 曲江。長安城南郊に在り、都人士遊行の處なり。

俺安祿山、聖恩を蒙り官を復せられてより後、十分に寵眷せらる。喜ぶ所は、俺生的一箇の大肚皮、直ちに垂れて膝を過ぐ。一日聖上見了ひ、笑つて問へらく、此中何か有ると。俺就ち對へて説ふ、惟だ一片の赤心有るのみと。天顔大に喜び、此より愈親信を加へ、俺に日ならずして王に封せんことを許さる。豈是非常の遇にあらずや。左右廻避けよ。

〔從、應じ下る〕

〔淨〕今は乃ち三月三日、皇上、貴妃と曲江に遊幸し、三國夫人駕に隨ふ。傾城の士女、往いて觀ざる無し。俺も不免便服に換了へて、單騎前

往いて遊玩一番せん。

〔衣を更へ、馬に上つて行くを作す介〕
門を出得で來れば、欄看、香塵路に満ち、車馬雲の如し。好だ熱鬧な

らすや。正是、路に當るの遊絲は、醉客に縈り。花を隔つるの啼鳥は、行人を喚ぶ。

〔下る〕〔副淨、外、王孫に扮し、末、小生、公子に扮し、各麗服にて同行き上る〕
〔仙呂入雙調〕〔夜行船序〕〔合〕春色 人を撩す。愛す、花風 扇の如く。〔七〕柳烟陣を成すを。行

- 〔八〕 長陽。離宮の名。
- 〔九〕 從。從者のこと。
- 〔一〇〕 權門。楊國忠をいふ、前に出づ。
- 〔一一〕 天家の雨露。天恩をいふ。
- 〔一二〕 累臣。罪を犯せる臣。
- 〔一三〕 香塵。婦女の多きをいふ。
- 〔一四〕 遊絲。いとゆふのこと。
- 〔一五〕 人を撩す。人を惱ます意。
- 〔一六〕 扇の如く。そよそよ吹くこと。
- 〔一七〕 柳烟。新柳の芽萌えて、烟の如くなるをいふ。

き過ぐる處(二八)紫陌を辨じ出さざる紅塵。

〔見る介〕

〔二九〕請了。

〔副淨・外〕今日(三〇)修禊の辰、我毎同に曲江に往いて遊玩せん。

〔末・小生〕便是。那の邊に簇擁る一隊の車兒は、敢是三國夫人の來了るならん。我每快些前去。

〔行く介〕

〔三〕紛紜たり。繡幕(三三)雕軒(三三)珠繞り翠圍み。妍を争ひ(三四)俊を奪ふ。

〔五〕氤氳たり。蘭麝風を逐うて來り。衣綵珮光、遙かに認む。

〔同上下る〕老旦、繡衣にて韓國に扮し、貼、白衣にて魏國に扮し、小旦、緋衣にて秦國に扮し、院子、梅香を引き、各車に乗りて行(三六)上る。

〔前腔〕換頭〔合〕安頓す。(三六)羅綺雲の如し。(三〇)妖嬈を聞はして。

各(三三)黛蛾(三三)蟬鬢を逞うし。天寵を蒙り。特に勅して共に江の春を探らしむ。

〔老旦〕奴家は韓國夫人。

〔貼〕奴家は魏國夫人。

〔小旦〕奴家は秦國夫人。

〔合〕旨を奉み、召されて曲江に遊ぶ。院子、車をば趨行前去。

〔院〕曉得。

〔行く介〕

朱輪芳隄を(三四)碾破し、(三五)遺珥墜簪。落花相襯す。榮は(三六)戚里を分ち。(三六)

宸遊に従ふ。幾隊の(三六)宮粧前進く。

〔同に下る〕淨、馬に策ちて上り、目に三國を視て下る介〕

妙啊。

〔黑蠅序〕換頭。瞬を回らせば。絶代の(三五)丰神。猛咆をして一見せしめ。

半响(四〇)魂を消す。恨むらくは、車中と馬上と。杳として親近き難(四一)きを。

俺安祿山、曲江に前往て、恰も好し三國夫人に遇ふ。一箇箇(四二)天姿國色

あり。唉、唐の天子、唐の天子。爾一位の貴妃あるに、又這の幾箇の阿姨を添上へたり。好た風流

〔二八〕紫陌。禁城の市街をいふ、塵埃で何處が街やら、はつきり見えざる意。

〔二九〕請了。挨拶の辭。

〔三〇〕修禊。みそぎをするこ

と。

〔三一〕紛紜。車馬雜遝の狀。

〔三二〕雕軒。彫刻したる車。

〔三三〕珠繞り翠圍む。珠玉をちりばめたること。

〔三四〕俊。いきなこと。

〔三五〕氤氳。氣のむれること。

〔三六〕院子。小使のこと。

〔三七〕梅香。下婢のこと。

〔三八〕安頓。安排に同じ、整列すること。

〔三九〕羅綺。美服をいふ。

〔四〇〕妖嬈。なまめがしきこと。

と。

〔四一〕黛蛾。畫きたる蛾眉。

〔四二〕蟬鬢。蟬の翼の如く、すき透りて美しき鬢をいふ。

〔三三〕碾破。知道に同じ。

〔三四〕遺珥墜簪。耳環や簪を墜して、落花にまみること、豪華を示す爲にわざと捨つるなり。

〔三五〕戚里を分ち。天子の外戚に當るをいふ。

〔三六〕宸遊。行幸のこと。

〔三七〕宮粧。宮人の盛粧をなせるもの。

〔三八〕丰神。容姿をいふ。

〔三九〕魂を消す。たまげる意。

〔四〇〕杳。はるかのこと。

〔四一〕天姿國色。天人の姿、國中にならびなき容姿をいふ。

ならずや。

評論すれば。〔四〕群花一人に歸す。方に天子の尊を知る。

且つ趕上前去みて、飽くまで看ること一回せん。

前塵を望めば。〔四〕饑眼迷笑す。策を揮ふこと頻頻たるを免れず。

〔馬に鞭ちて前み奔るを作し、雜、從人に扮して上り、攔る介〕

咄、丞相爺の、此に在るに、什麼人ぞ這等く。亂撞をなさんとは。

〔副淨、騎馬にて上る〕

何爲れぞ喧嚷しん。

〔淨、副淨、打照面を作し、淨、馬を回して急に下る〕

〔從〕小的は方纒、一人の馬に騎り、亂撞し過來るを見て、前に向つて攔阻せり。

〔副淨、笑ふ介〕

那の去的は、是れ安祿山なり。怎麼に下官を見了て、就ち疾忙いで躲避れしや。

〔兎〕沈吟を作す介〕

三位の夫人の車兒は、那裏に在りや。

〔從〕就ち前面に在り。

〔副淨〕呀、安祿山那厮、怎ぞ敢て這般く無禮なるや。

〔前腔〕〔換頭〕恨むに堪へたり。皇親を藐視し。香車の行く處に傍ひて。無禮にも厮混る。〔五〕陡衝衝怒起り。心下に忍び難し。

左右をして緊緊車兒に跟隨著ひて行走き、〔五〕間人をして打開かしめよ。

〔衆、應じ行く介〕

〔副淨〕忙しく奔り。〔五〕金鞭を把つて、路塵を辟け。雕鞍を將て畫輪を逐ふ。

〔合〕行人に語る。慎んで來り前む莫れ。怕らくは丞相の生嗔を惹か

ん。

〔同に下る〕〔淨、村婦に扮し、丑、醜女に扮し、老旦、賣花娘子に扮し、

小生、舍人に扮して、行き上る〕

〔錦衣香〕〔合〕妝扮新に。〔五〕淹潤を添ふ。身段は村なり。〔五〕喬の

丰韻。更に憐むに堪へたり、芳草は裾を沾し。野花は鬢に堆し。

〔見る介〕

- 〔三〕群花。三國夫人をいふ。
- 〔四〕饑眼。餓ゑたる眼をいふ。
- 〔五〕迷笑。まよふこと。
- 〔六〕亂撞。むやみにつきあたること。
- 〔七〕打照面。面とむかつて、見かはすこと。
- 〔八〕沈吟。考へこむこと。

- 〔兎〕皇親。外戚のこと。
- 〔五〕藐視。かろんすること。
- 〔五〕香車。婦人の車をいふ。
- 〔五〕陡衝衝。むらむらと急に怒る意。
- 〔五〕間人。無用のものをいふ。
- 〔五〕金鞭彫鞍。楊國忠自分の騎乗をいふ。
- 〔五〕畫輪。三國夫人の乗れる車をいふ。
- 〔五〕丞相の生嗔。前に引ける麗人行の「慎莫近前」丞相嗔の意なり。
- 〔五〕淹潤を添ふ。脂粉を傳けること。
- 〔五〕村。粗野の意、やばといふ如し。
- 〔五〕喬。假なり、にせの意。
- 〔六〕丰韻。風采に同じ。
- 〔六〕鬢に堆し。野花を簪の代りにすること。

〔浄〕 列位、都て去いて曲江に遊ぶのか。
〔衆〕 正是。今日は皇帝も娘も、都て那裏に在しませば、我毎も同に去いて看一看看。

〔丑〕 皇帝の娘を愛することは、(三) 寶貝も一般なりと、聞き得たるが、知らず、奴家の容貌に比しては如何ならん。

〔老旦、笑ふ介〕「小生、丑を見るを作す介」

〔丑〕 爾怎麼只管我看するや。

〔小生〕 我大姐の臉上を見るに、倒て幾件の寶貝あり。

〔浄〕 什麼寶貝ぞ。

〔小生〕 爾看よ、眼は(四) 猫睛石を嵌め、額は(五) 瑪瑙紋を彫り、(六) 蜜蠟齒牙を装ひ、(七) 珊瑚嘴唇に鑲む。

〔浄、笑ふ介〕「丑、扇を將つて小生を打つ介」

〔小油嘴、(六) 小油嘴。偏に偏には寶貝有る没らんや。

〔小生〕 爾説來へ。

〔丑〕 爾の(七) 後庭は銀鑲に像たり、掘過るもの幾多人ぞ。

〔六三〕 看一看看。看に同じ。

〔六四〕 寶貝。たからもの意。

〔六五〕 猫睛石。猫眼石のこと、俗に目の黄色を帯び、くりくりせるを猫眼といふ、醜の象徴なり。

〔六六〕 瑪瑙紋。赭顔の皺をいふ。

〔六七〕 蜜蠟。蜜蜂の巢より製したる蠟、色の黄ばみたるを以て、齒の汚れたるに比す。

〔六八〕 珊瑚。美しき意、反説なり。

〔六九〕 小油嘴。饒舌を罵る辭。

〔七〇〕 偏。だけ、ばかりの意、汝だつても寶貝があるといふこと。

〔七一〕 後庭。贅をいふ、男色を罵る意。

〔浄、笑ふ介〕

休得取笑、聞き得たり、三國夫人の車兒の過ぎ去れるを。一路の上、東西の遺下せるあらん。我毎赶上けて、尋ね看ん。

〔丑〕 此の如くんば快く走らん。

〔行く介〕「丑、嬌態を作し、小生と(七) 譚する介」

〔合〕 和風徐ろに起つて、晴雲を蕩かす。鈿車一たび過ぎて。(八) 草木皆春なり。

〔小生〕 且らく這草裏に在りて、尋一尋ぬれば、甚慶有る可し。

〔老旦〕 我先づ去了、

〔老旦、(七) 朱門。繡閣に向つて。賣花の聲。叫ぶこと般勤にせん。

〔賣花を叫んで下る〕「衆、尋ね各拾ふを作す介」〔丑、浄に問ふ介〕

爾の拾へるは甚麼。

〔浄〕 是一枝の簪子なり。

〔丑、看る介〕

是れ金なり。上面に一粒の緋紅の寶石あり。好(九) 造化なり。

〔七二〕 譚。じようだん、ふざけること。

〔七三〕 草木皆春。花の咲くこと、おとし物に喩ふ。

〔七四〕 朱門。富貴の家をいふ。

〔七五〕 繡閣。婦人の室をいふ。

〔七六〕 造化。幸福の意。

〔淨、丑に問ふ介〕
爾呢。

〔丑〕一隻の鳳鞋套兒。

〔淨〕好し好し。爾就ち穿たば何如。

〔丑、脚を伸して比するを作す介〕

啐、一個の脚の指頭すら、也た著不下。鞋尖上の、この一粒の眞珠を、摘下來罷。

〔珠を摘つて鞋を丟つるを作す介〕

〔小生〕我れ袖了去らん。

〔丑〕爾倒つて攪收拾を作すを會す。爾の拾ひし東西も、也拿り出來して、照照せよ。

〔小生〕一幅の絞絹帕兒に、一個の金の盒子を裹着めり。

〔淨、接けて、開き看るを作す介〕

咳、黒黒的、黃黃的、薄片兒なり。聞著ば又些の香あり。是れ耍樂ならざる莫きか。

〔小生、笑ふ介〕

〔六〕鳳鞋。婦人の穿く飾り鞋なり。套兒とは半長の如し。

〔七〕脚の指頭すら云云。高貴の婦人の足の小なるをいふ、纏足の起原は明ならざるも、明清に及んで益々盛なり、唐の時は、今日の如く甚しからざるべし、ここは清朝の當時の風に就ていふなり。

〔八〕我れ云云。原文は「待我袖了去」とあり、待の字、意の輕重あり、譯する時もあり、譯出せざる時もあり、以下、一一註せず。

〔九〕薄片兒。うすべらたきもの。

是れ香茶なり。

〔丑〕待我嘗一嘗。

〔淨、争つて吃し、各吐く介〕

呸、稀苦的。他を吃して怎麼せん。

〔小生、收むるを作す介〕

罷めよ、大家再た往前去かん。

〔行く介〕

〔合〕蜂蝶間に相趁ひ。柳迎へ花引く。龍樓の倒まに寫るを望む。

曲江將に近からんとす。

〔小生、淨、先づ下り、丑、場を吊ひて、叫ぶ介〕

爾們、等我一等。阿呀、尿急なり。且在這裏、沙窩兒を打り去らん。

〔下る〕老旦、貼、小旦、院子、梅香を引いて、行き上る

〔漿水令〕衣香を撲つて。花香亂熏。鶯聲に雜はつて。笑聲細に聞こゆ。看よ、楊花は雪と落ちて、白蘋を覆ひ。雙雙の青鳥は、紅巾を銜み墮す。春光好し。二分を過ぐ。遲遲たる麗日、車を催

〔八〇〕蜂蝶。男女の群に喩ふ。

〔八一〕龍樓。鳳闕に同じ、宮殿の意。

〔八二〕倒に寫る。離宮の影が曲江の水に倒寫する意。

〔八三〕場を吊ふ。後に一人居残りて見渡すこと。

〔八四〕沙窩兒云云。地上に放尿すること。

〔八五〕紅巾。落花の片をいふ。

〔八六〕麗日。うららかな春の日。遲遲はのどかなる意、遅日ともいふ。

して進む。

〔院〕 夫人に稟す、曲江に到れり。

〔老旦〕 丞相爺は、那裏に在りや。

〔院〕 萬歳爺は、望春宮に在せば、丞相爺も、先づ那邊に到り去了るならん。

〔老旦・貼・小旦〕 車を下るを作す介。

〔院〕 果然好き風景なり。

〔院〕 曲岸を環り。曲岸を環りて。紅は酩に縁は勻し。曲水に臨み。曲水に臨みて。柳は細く蒲は新なり。

〔丑〕 小内侍の馬を控へたるを引きて上る。

〔老旦・小旦〕 玉勒 桃花の馬。騎坐す金泥 蛺蝶の裙。

〔見る介〕

皇上は口づから勅して、韓・秦二國夫人には、宴を別殿に賜はり、虢國夫人は、即ち馬に乗つて宮に入り、楊娘娘に陪して飲宴せしめらる。

〔老旦・小旦〕 貼、跪く介。

〔七〕 望春宮。曲江に在る離宮の名。

〔八〕 柳は細く蒲は新なり。杜甫の哀江頭に「細柳新蒲爲誰緑」の句あり。

〔九〕 勅して傳ふ。勅旨にて迎へらるること。

〔一〇〕 玉勒。玉のくつわ。

〔一一〕 桃花の馬。馬の白毛に紅點あるものをいふ。杜審言の詩に「桃花馬上石榴裙」の句あり。

〔一二〕 蛺蝶の裙。あげはの蝶の模様ある裙。

〔一三〕 馬に乗つて。杜甫の詩に「虢國夫人承主恩、平明騎馬入宮門」とあり、或は張祜の作となす、唐代には婦人騎馬の風ありしを知るべし。

萬歳。

〔起つ介〕 丑、貼に向ふ介。

就ち請ふ、夫人馬に上れ。

〔尾聲〕 〔貼〕 内家の官。催すこと何ぞ 緊なる。姐姐妹妹、偏背了いて、春風獨り近し。

〔老旦・小旦〕 偏の淡く蛾眉を掃つて、至尊に朝するを 枉うせず。

〔貼〕 馬に乗り、丑、引いて下る。

〔小旦〕 偏看、裴家の姉妹は、竟に自ら鞭を揚げて去れり。

〔老旦〕 且らく他の自由にせよ。

〔梅香〕 請ふ夫人、別殿裏に 宴に上れ。

紅桃碧柳、禊堂の春。(沈佺期)

〔老旦〕 一種の佳遊、事也均し。(張諤)

〔小旦〕 願はくは聖情を奉じて、歡極らざらんことを。(武平一)

〔合〕 風に向ひて偏に笑ふ、(豔陽の人。(杜牧))

〔一四〕 内家の官。侍從職をいふ。

〔一五〕 緊。急に同じ。

〔一六〕 偏背了。失敬する意。

〔一七〕 春風獨り近し。獨り主上の恩命を蒙れること。

〔一八〕 淡く蛾眉を掃ふ。前の杜甫の詩の轉結に「御嫌脂粉汚顏色、淡掃蛾眉朝至尊」とあり。虢國夫人が、己れの美貌を頼んで、極めて薄化粧をなすをいふ。

〔一九〕 枉うせず。その甲斐ありとの意。

〔二〇〕 裴家姉妹。虢國夫人は、裴氏に嫁す、因みに韓國は崔氏に、秦國は柳氏に嫁せり。

〔二一〕 宴に上る。宴席に就くこと。

〔二二〕 豔陽の人。這處にては、虢國夫人を諷する意なり。

第六齣 傍訝

〔丑、上る〕

〔中呂過曲〕〔縷縷金〕 歡遊罷。 駕歸來。 西宮箇甚に因つて。 君の懷を惱ます。 敢て春筵の畔。 風流の 醜態の爲なり。 怎ぞ一場の樂事。 陡ち 乖と成るや。 人をして好だ疑怪ましむ。 人をして好だ疑怪ましむ。 前日萬歳爺は、楊娘娘と共に、曲江に遊幸して、 天に歡び地に喜びしに、 想はざりき、 昨日娘娘忽然先づ自ら宮に回り、 萬歳爺は、 今日纔回り、 聖情十分悦ばざらんとは。 未だ何の故なるを知らず。 遠遠く望見めば、 永新姐來れり。 咱試みに他に問はん。

〔老旦、上る〕

〔前腔〕 宮幃の事。 安排を費す。 雲翻と雨覆と。 幕地に 陽臺を關がす。

〔丑、見る介〕

永新姐、來り得て恰好し。 我爾に問はん、 萬歳爺は何すれぞ、 楊娘娘の宮中に到去らざるや。

〔老〕 唉、公公、爾還ほ知らざるか。

兩下 參商の後。 云を妝ひ態を作す。

〔丑〕 爲著甚來。

〔老〕 只だ 並頭の蓮。 傍に一枝の開く有るが爲めなり。

〔丑〕 是れ那の一枝呢。

〔老、笑ふ介〕

公公。

爾は聰明の人なれば、自ら 參解せん。 聰明の人なれば、自ら 參解せん。

〔丑、笑ふ介〕

咱那裏知るを得ん。 永新姐、爾我が與めに説つて、聽かしむ可し。

〔老〕 若し此事を説へば、原是は我が娘娘の、自己惹き下せる的なり。

〔丑〕 何の爲めぞ。

〔老〕 只だ娘娘が、那の虢國夫人をば、

- 〔一〕 傍訝。 はたで噂をする場。
- 〔二〕 駕。 天子のこと。
- 〔三〕 西宮。 楊貴妃をいふ。
- 〔四〕 醜態。 説文に云ふ、行いて正しからざるなり、即ち興が横にそれたこと、虢國夫人の爲に、妨碍されたるを、貴妃が怒りしをいふ。
- 〔五〕 乖と成る。 反對の結果に了ること、だめになつたといふ意。
- 〔六〕 天に歡び地に喜ぶ。 有頂天の喜びをいふ。
- 〔七〕 宮幃。 宮中の意。
- 〔八〕 安排。 整頓すること、骨

- の折れる意。
- 〔九〕 雲翻雨覆。 男女の歡愛と、人情の翻覆とを兼ねていふ。
- 〔一〇〕 陽臺。 西宮をいふ。
- 〔一一〕 參商。 參辰と同じ、參は星の名、西方大夏の地に當り、商は東方商邱の地に當り、其の君辰星を主る、參辰と云はずして、參商と云ふは、一は星の名をあげ、一は地の名を取りて、文を互にしたるなり、參辰の二星は常に相背きて出で、永く相見ず、故に二人隔離して合はざるをいふ。
- 〔一二〕 云を妝ひ態を作す。 しらばくれて、わざとらしき態をなすこと。
- 〔一三〕 並頭の蓮。 夫婦の義に取る、明皇貴妃をいふ。
- 〔一四〕 傍に一枝。 虢國夫人をいふ。
- 〔一五〕 參解。 理解の意。

〔剔銀燈〕 常則君前に向つて、妝梳淡にして、(二〇)天然賽無しと、(二七)喝采せしが爲に。那の日、望春宮に在りて、萬歳爺をして他を召して宴に侍せしめ、三杯の後、便ち暗中に(一)座の連環寨を築き、哄いて(二)同心の羅帶を結上ばしむ。

〔丑〕 手を拍つて笑ふ介。

呵呀、咱も也此有らんと疑心ふ。却つて何の爲に煩惱するや。

〔老〕 後來娘は恩寵を奪はれんことを恐れて、因此上。嫌猜し。恩情頓に乖き。(一)對の(三〇)鴛鴦を(三)熱打して、散開せしむ。

〔丑〕 原來、鏡國夫人は、望春宮に在りて、(三)言語ありて、纔に回去たるか。

〔老〕 便是。那の鏡國夫人の去る時、我が娘曾て留得めざりしかば、萬歳爺は好生快からず。今日竟に西宮に進み去かず。娘は那裏に在りて、只是哭けり。

〔丑〕 咱想ふに楊娘娘は。

〔前腔〕 嬌癡の性、天生忒だ利害し。

前時(一)箇の梅娘娘に逼得りて。

- 〔一六〕 天然。自然に同じ。
- 〔一七〕 喝采。ほめそやすこと。
- 〔一八〕 連環寨。寨を連れて、相應する意、即ち貴妃と、鏡國夫人と、兩人にて明皇を擒にせしこと。
- 〔一九〕 同心の羅帶を結ぶ。夫婦の縁を結ぶこと。
- 〔三〇〕 鴛鴦。明皇と鏡國夫人に喩ふ。
- 〔三一〕 熱打。ひどくたたきこ。
- 〔三二〕 言語。天子の御聲がかり、後齣、鏡國夫人の語に應ず。

直に樓東に遷置して、奈んともするなし。

如今この鏡國夫人は、是れ自家の妹子なれば、

須らく知道べし、(三三)連枝同氣の情、外に非ざるを。怎ぞ這の(三二)點兒も、

也(二六)分愛ひ難きにや。

〔老〕 這は且らく休提。只是往常、萬歳爺は、娘娘と行坐にも離れざる

に、如今は兩下ながら相見面す。怎生にせば好からん。

〔丑〕 吾儕、如何ぞ(三七)擺佈はん。且らく爾と旁より看來さん。

〔内〕 旨あり、高公公に宣す。

〔丑〕 來了。

(二九)臨春に狎宴して、日正に遅し。(韓偓)

〔老〕 寵の深くして還て恐る、寵の先づ衰ふるを。(羅虬)

〔丑〕 外頭は笑話し、中は猜忌す。(陸龜蒙)

〔老〕 若し傍人に問ふも、那ぞ知るを得ん。(崔顥)

- 〔三二〕 連枝同氣。兄弟のこと。
- 〔三三〕 外に非ず。他人でない意。
- 〔三二〕 點兒。一點兒に同じ。
- 〔三三〕 分愛。割愛に同じ。
- 〔三三〕 擺佈。安排に同じ。
- 〔三三〕 來了。きます、ゆきますの意。
- 〔二九〕 臨春。閨の名、陳の後主の日夜遊宴せし所。
- 〔三〇〕 外頭は笑話し。外面には笑へども、心中には猜む意。

第七齣 倖恩

〔貼、上る〕

〔商調引子〕〔遠池遊〕 瑤池に陪從して。何ぞ意はん新寵を承けんとは。怪む、青鸞、人をば和世せしを。尋思すること 萬種。這其の間、端無く 歆動す。奈ぞ 謠詠。蛾眉未だ容さず。

〔一〕 玉燕 輕盈、雪輝を弄し。杏梁に偷み宿して、影雙び依る。〔二〕 趙家の姉妹は、相妬むこと多し。〔三〕 昭陽殿裏に向つて飛ぶこと莫れ。奴家は楊氏、幼にして 裴門に適く。〔四〕 琴は朱絃を斷ちて、不幸にして 文君早く寡なり。香は 青瑣に含まれて、肯て

〔一〕 倖恩。倖は僥倖の意。虢國夫人が誤つて君恩を受けしことの場。
〔二〕 瑤池。西王母の居る處、天子の幸に喩ふ。
〔三〕 青鸞。青鳥に同じ、王母の側に三青鳥あり、常に使をなすといふ、ここにては貴妃に喩ふ。
〔四〕 萬種。色色に考ふること。
〔五〕 歆動。もめること。
〔六〕 謠詠。譏言のこと。
〔七〕 蛾眉。貴妃をいふ。
〔八〕 玉燕。虢國夫人自ら喩

〔九〕 輕盈。やせぎすの意。
〔一〇〕 雪輝。膚の白きこと。
〔一一〕 趙家の姉妹。趙飛燕が、その妹合徳と寵を争ひしこと、飛燕外傳に詳なり。
〔一二〕 昭陽殿。漢宮の名、合徳寵せられて昭儀となり、昭陽舎に居る、貴妃の宮に喩ふ。
〔一三〕 裴門。裴氏に嫁ぐ。
〔一四〕 琴は朱絃を絶つ。夫を亡ひしこと。
〔一五〕 文君。卓文君の寡となりしに喩ふ。
〔一六〕 青瑣。閑閑をいふ。

〔一七〕 韓掾の輕しく偷むを容さんや。妹玉環の寵を以て、叨に虢國の封を膺く。富貴に居ると雖も、鉛華を愛せず。敢て絶世の佳人と誇り、自ら天に朝する。素面を許す。想はざりき、前日駕曲江に幸し、勅して遊賞に陪せしめられ、諸姉妹は俱に宴を外に賜はりしに、獨り奴家を召して、望春宮に到りて、宴に侍せしめられ、遂に天眷を蒙り、勉爾恩を承けんとは。聖意は濃かなりと雖も、人言は畏る可し。昨日奴を要して、同に内に進まんとせられしも、再四辭して歸れり。仔細に想來へば、好だ僥倖の人なり。

〔商調過曲〕〔字字錦〕 恩は天上より濃かに。縁は生前に向つて種う。金籠は花下に開き。巧に 娟娟の鳳を賺す。燭花は紅なり。只見る、盞を弄び杯を傳ふるを。杯を傳ふる處。慕自裏、語兒唧噥。匆匆宛轉を容さず。人をば央めて帳中に入らしむ。思量へば帳中。帳中の歡は夢の如し。網繆の處。兩心同じ。網繆の處。兩心暗に同じ。奈んせん、朝來背地に。人有り、那裏に在り。人は那裏に在りて、模を妝ひ様を作し。言言語語。譏諷諷。咱這裏は。羞羞澀澀。驚驚恐恐。直

〔一七〕 韓掾。晉の韓壽姿容美なり、賈充召して司空掾となす、充資客を宴する毎に、その女青瑣中に在りて之を窺ふ、壽を見て大に悦び慙慙を通ず、壽垣を踰えて夜入り、家中知るものなし、時に西域より奇香を進む、一たび人に著けば月を經て消えず、武帝甚之を貴び、充に賜ふ、女密に偷んで壽に遺る、察屬その芬馥を聞いて之を充に告ぐ、充女の壽と通するを知り、即ち之に妻はす。
〔一八〕 鉛華。脂粉のこと、前に引ける杜詩参照。
〔一九〕 素面。脂粉をつけぬこと。
〔二〇〕 人言。貴妃の嫉妬をいふ。
〔二一〕 恩は天上より。天恩の濃なること。

恁ばかり、他に(三〇) 搏弄ばれんとは。

〔末、院子に扮し、副淨、梅香に扮して、暗に上る〕〔老旦、外の院子に扮し、丑の梅香に扮せるを引いて上る〕

〔不是路〕春風吹き透り。(三一) 威腕の花開いて、別様に穢かなり。

前日、裴家の妹子、獨り恩幸を承けたれば、我は柳家の妹子に約して、同に去いて打觀ふこと一番せんせしに、料らざりき、他は(三二) 氣して病

まんとは。此に因つて獨自前去くなり。

〔外〕夫人に稟さく、(三三) 虢府に到れり。

〔老旦〕通報せ去れ。

〔外、報する介〕〔末、(三四) 傳ふる介〕

〔貼〕有請と道へ。

〔副淨、請する介〕〔外、末、(三五) 暗に下る〕〔貼、出で老旦を迎へて進ましむる介〕

〔貼〕姉姊、請。

〔三〕 縁は生前に。前生より縁の定まる意。

〔三三〕 媚媚の風。虢國夫人自ら喩ふ。

〔三四〕 語兒唧噥。内所語をいふ。

〔三五〕 宛轉。うまく辭すること。容さずとは、匆卒の際無理に口説き落されたること。

〔三六〕 網繆。情緒纏綿の意。

〔三七〕 兩心。明皇と虢國夫人。

〔三八〕 人あり。貴妃をいふ。

〔三九〕 模を妝ひ様を作す。知らぬ風をなすこと。

〔四〇〕 搏弄。翻弄の意。

〔四一〕 威腕の花。虢國夫人をいふ。

〔四二〕 氣して。腹を立てること。やきもちの意。

〔四三〕 虢府。府は邸に同じ。

〔四四〕 傳ふ。取り次ぐこと。

〔四五〕 暗に下る。そつと、知れぬ様、下ること。

〔副淨、丑、譚つつ下る〕

〔老旦〕 妹妹、喜也。

〔貼〕 何の喜の來るあらん。

〔老旦〕 殊寵を邀へ。一枝已に(三六) 日邊に傍うて紅なり。

〔貼、羞を作す介〕

姉姊、說那裏話。

我は離宮に進むも。也た杯酒相陪奉せるに過ぎず。君恩に(三七) 湛露せるは、

内外同じ。

〔老旦、笑ふ介〕

則ち(三八) 一般の賜宴と雖も、外邊は怎んぞ裏邊に及ばむ。

調哄するを休めよ。九重の春色、(三九) 偏に重きを知る。誰か能く共に

する有らん。

〔貼〕 何の共にし難きあらん。

〔老旦〕 我且つ爾に問ふ、玉環妹妹の宮に在るを見るに、光景如何。

〔滿園春〕〔貼〕 春江の上。(四〇) 景融融たり。催されて宴に侍べる。望春宮。

〔三六〕 日邊。日を天子に喩ふ、虢國夫人の天寵を荷ひしことをいふ。

〔三七〕 湛露。うるほへること。

〔三八〕 内外同じ。韓國夫人は宴を外に賜ひ、虢國夫人は内に召されしが、兩者共に區別なき意。

〔三九〕 一般。一樣に同じ。

〔四〇〕 調哄。しらばくれること。

〔四一〕 偏に重きを知る。虢國夫人が一人で寵を承けしこと。

〔四二〕 春江。曲江をいふ。

〔四三〕 景融融。春の日光ののどかなること。

那の玉環妹妹こそは。
新來貴に倚り、尊重を添ふ。
〔老旦〕 知らず、皇上他と怎生なる恩愛ぞ。
〔貼〕 春宵の裏、春宵の裏。比目兒（四）和同す。誰か（四）雨雲の蹤を知り得んや。

〔老旦〕 難道一些覺らざるか。

〔貼〕 只見る、玉環妹妹の性兒、越（五）驕縦を發するを。

細かに他が箇中を窺ひ。漫に他が意中を（四）參すれば。嬌憨に慣れしめ。慣れて嬌憨ならしむ。（五）癥を尋ね、綻を索め。（五）一謎兒、自ら（五）心胸を逞しうす。

〔老旦〕 他は小より、性兒は這般的なり。妹妹よ、備還た（五）該に他に勸むべくば纔に是し。

〔貼〕 那箇他を勸むるに耐煩へんや。

〔前腔〕〔換頭〕〔老旦〕 他が性情は驕縦多し。天生（五）百様の玲瓏を恃む。

〔五〕 姊妹行すら、且つ（五）傍より誦を作すを休む。

況んや近日は。

昭陽の内。昭陽の内。一人獨り（五）三千の寵を占む。問ふ、誰か能く與に雌雄を競はん。

〔貼〕 誰か他と争はん。只是他が此の如き性兒にては、恐怕らくは（五）君心の測られざらんことを。

〔老旦〕 起ち背く介

細かに表家の妹子の言を聽けば、必ず縁故あらん。

細かに他が箇中を窺ひ。漫に他が意中を參すれば。恚も（五）驕嗔ならしめ。恚て驕嗔たらしむ。（五）頭を藏して尾を露はす。敢て別に一段の心胸あらん。

〔末、上る〕

意外にも嚴旨を聞き。堂前に貴人に報す。

〔見る介〕

夫人に稟さく、不好了。貴妃娘娘は、旨に忤ひしかば、聖上大に怒り、高公公に命じて、丞相の府中に送り歸さしめられたり。

〔四〕 比目兒。比目の魚、かれひの類、夫婦に喩ふ、爾雅に云ふ「東方有比目魚等、不比不行、其名謂之蝶」こと。
〔五〕 和同す。比目の魚の如く、むつまじきこと。
〔四〕 雨雲の蹤。歡會の状をいふ。
〔五〕 驕縦。我儘なること。
〔四〕 參。想像する意。
〔四〕 嬌憨。さままの意。
〔五〕 癥を尋ね云云。人のあらしをさがしをすること。
〔五〕 一謎兒。一圖に同じ。
〔五〕 心胸を逞しうす。思ふままにふるまふこと。
〔五〕 該に云云。忠告したらよからうの意。
〔五〕 百様の玲瓏。天生の麗質をいふ。
〔五〕 姊妹行。行の字、前の意あり。

〔五〕 傍より誦を作す。わきから口を出すこと。
〔五〕 三千の寵を占む。長恨歌の「三千寵愛在一身」の意。
〔五〕 君心の測られず。あまり我儘が過ぎると、何時君の心が變りて、寵を失ふに至るやも測られざる意。
〔五〕 驕嗔。怒を含む意、貴妃には驕怒といひ、虢國夫人には驕嗔といふ、兩人の面目躍如たり。
〔六〕 頭を藏して尾を露はす。所謂頭かくして尻かくさす。

〔老旦、驚く介〕

這等な事有るか。

〔貼〕 我說へらく、這般の心性にては、定然事を惹下來さんと。

〔老〕 雖然如此、我と爾とは、姉妹の情にして、且つ大家の榮辱に關係すれば、

〔貼〕 正是、就ち請ふ同行せん。

〔尾聲〕〔老旦〕 忽嚴譴と聞いて、心驚恐く。

〔貼〕 香車を整へて、同じ 吉凶を探る。

姉姊、那の玉環妹妹は、梅妃に笑殺はれざるべきや。

〔合〕 倒て如かず、冷淡なる 梅花の、仍ほ紫禁の中に開くに。

〔貼〕 傳聞す闕下、絲綸を降すと。〔劉長卿〕

〔老〕 朱門を出で得て、戟門に入る。〔賈島〕

〔貼〕 何ぞ必ずしも君恩の、能く獨り久しからんや。〔喬知之〕

〔老〕 憐む可し榮落の、朝昏に在るを。〔李商隱〕

第八齣 獻髮

〔副淨、急ぎ上る〕

天に不測の風雲あり。人に旦夕の禍福あり。下官楊國忠は、妹子の貴妃

に冊立せられてより、權勢日に盛んなりしが、想はざりき、今早、忽ち

傳ふるに、貴妃の旨に忤ひ、謫せられて宮を出で、高内監に命じて、單

車門に送到り來らんとは。未だ何故なるを知らず。好生驚駭く。且らく

門前に到つて迎接去へん。

〔暫らく下る〕〔丑、旦の車に乗れるを引いて上る〕

〔仙呂過曲〕〔望吾郷〕 定め無き君の心。恩光那處にか尋ねん。蛾眉忽地

顛窵に遭ふ。思量へば就裏ち 知他恁。棄擲てらるること何ぞ偏に甚

しむや。長門は隔り。永巷は深し。首を回らす處、愁禁へ難し。

〔副淨、上り跪き接ふる介〕

臣楊國忠、娘娘を迎接す。

- 〔六〕 須索く云云。貴妃を見まはすばなるまいの意。
- 〔六二〕 吉凶を探る。見舞ふ意。
- 〔六三〕 梅妃。江采蘋のこと。初明皇に寵ありしが、楊貴妃の宮に入るに従つて、寵を失へり。後齣、第十八夜怨、第九九紫閣に詳なり。
- 〔六四〕 梅花。即ち梅妃のこと。
- 〔六五〕 絲綸。勅旨のこと。
- 〔六六〕 戟門。儀仗を門に列したること。大官の邸、又官署等には、儀仗の武器を門に列れたり。

- 〔一〕 獻髮。貴妃が髮を剪りて明皇に獻する場。
- 〔二〕 丑。高力士なり。
- 〔三〕 蛾眉。貴妃をいふ。
- 〔四〕 顛窵。摧挫、蹉跎に同じ、しくじること。
- 〔五〕 知他恁。どうしたのであらうかの意、他の字意輕し。
- 〔六〕 長門。宮の名、漢の陳皇后、寵を失ひて長門宮に在り、司馬相如をして、長門賦を作らしむ、武帝憐んで又寵せり。
- 〔七〕 永巷。冷宮なり。深しとは、永巷を後にして、宮を出づる意。

〔丑〕 丞相 快く娘娘を請じて府に進めよ。咱家は還た話説有り。
〔副〕 院子、丫鬟毎に分付けて、娘娘を迎接へて、後堂に到去れ。
〔丫鬟上り〕 且を扶けて車を下らしめ、擁して下る。〔副淨、丑に揖する介〕
老公公、請坐、知らず、此事は何に因つて起りしや。

〔丑〕 娘娘こそは、

〔二封書〕 君王の寵最も深きこと。椒房に冠たり。専ら寝に侍せり。

昨日は、

端無く聖心に忤ひ。驟然の間。商と參とたり。

丞相、咱家の多口を怪むこと不要。娘娘は、

生性嬌癡にして、習慣多し。未だ嫌疑の抱衾に生ずるを免れず。

〔副淨〕 如今謫遣せられて出で来るは、怎生にせば好からん。

〔丑〕 丞相、且つ朝門に到りて罪を謝し、機を相て行へ。

〔副淨〕 老公公、全く爾の、

〔三〕 規箴を進めて。當今を悟すに仗る。

〔丑〕 這箇自然。

〔八〕 丫鬟。侍女のこと。
〔九〕 椒房。前に出づ、後宮をいふ。
〔一〇〕 商參。前に出づ、相合はるること。
〔一一〕 抱衾。閨門の間のこと、詩經に「肅肅宵征、抱衾與」
レ襦」とあり。
〔一二〕 規箴。諫言のこと。
〔一三〕 當今。今上に同じ。

〔合〕 管ず重ねて 宮花を取りて 上林に入らしめん。

〔丑〕 就此告別。

〔副淨〕 下官も同行せん。

〔内〕 内に向ふ介。

丫鬟に分付く、好く娘娘に伺候せよ。

〔内〕 内にて應ずる介。

〔副淨〕 烏鴉と 喜鵲と同行し、吉凶の事は全然未だ 分れず。

〔丑〕 丑と下に下る。〔旦〕 梅香を引いて上る。

〔中呂引子〕 〔行春子〕 乍ち宮門を出で、驚魂未だ定まらず。 漬愁の妝。

滿面の 啼痕。其の間の心事。多少論じ難し。但だ芳容を惜しみ。薄命を

憐み。深恩を憶ふ。

〔三〕 君恩は水の如く、東流に付す。寵を得ては移るを憂へ、寵を失ひては

愁ふ。 樽前に向つて、花落を奏すること莫れ。 涼風は只 殿

の西頭に在り。我れ楊玉環は、宮闈に入りてより、過つて寵眷を蒙り。

只道へらく、君心託す可く、百歲歡を爲さんと。誰か想はんや、妾が命

〔四〕 管。管取に同じ、うけあふ意。
〔五〕 宮花。貴妃をいふ。
〔六〕 上林。上林苑、御苑のこと、宮中に再び貴妃を入らしめんとの意。
〔七〕 烏鴉。凶兆を報ずるもの。
〔八〕 喜鵲。吉兆を報ずるもの。
〔九〕 分。一に保に作る。
〔一〇〕 漬愁。愁に沈むこと。
〔一一〕 啼痕。涙痕に同じ。
〔一二〕 君恩は水の如く。君の恵は、恰も水の東流の如く、一度去りて、又返らざる意。
〔一三〕 樽前。酒席に同じ。
〔一四〕 花落。笛曲に梅花落あり、ここは失寵を恨む意を寓す。
〔一五〕 涼風。秋風に同じ、失寵の意あり。
〔一六〕 殿の西頭。西宮をいふ。

猶（三）からず、一朝怒りに逢ひ、遂に促されて宮車に駕し、放たれて私第に歸るを致す。（二）金門一たび出づれば、九天を隔つるが如し。

〔涙ぐむ介〕

天なるかな。（二）禁中の明月、永く影を照らすの期無く、（三）苑外の飛花、已に枝に上るの望を絶つ。躬を撫して自ら悼み、袂を掩うて徒らに嗟く。好た人をして傷感ましむ。

〔中呂過曲〕〔榴花泣〕〔石榴花〕 羅衣拂拭へば。猶是れ御香熏し。何處に向つてか前恩を謝せん。想へば （三）春は春に遊び。曉より昏に和す。

〔泣顔回〕 豈に知らんや、（三）斷雨殘雲の有らんことを。我れは （三）嬌を含み嗔を帯ぶるも。往常間、他は （三）百様相依順へり。（三）隄防らざりき、（三）横枝の爲めに。陡然 （三）連理をば軽く分たれんとは。

丫鬟よ、此間に那裏か宮中を望見むところ有る可（三）。

〔梅〕 前面の 御書樓の上より、西北に望去めば、便是ち宮牆なり。

〔旦〕 爾、我れに隨ひて、樓上に去來れ。

〔梅〕 曉 得

〔三〕 猶。人と同じ意。命の猶しからずとは、運の拙き意。

〔二〕 金門。御所の門をいふ。九天を隔つとは、再び宮に入ることの難きをいふ。

〔三〕 禁中の明月云云。君恩の中斷せることをいふ。

〔三〕 苑外の飛花。我が身の舊に復する望なきをいふ。

〔三〕 春は春に遊び。長恨歌の「春從春遊「夜半」夜」の意。

〔三〕 斷雨殘雲。恩愛の中絶すること。

〔三〕 嬌を含み嗔を帯ぶ。君にあまへる態度をいふ。

〔三〕 百様依順。貴妃のいふなりになること。

〔三〕 隄防。用心すること。

〔三〕 横枝。虢國夫人をいふ。

〔三〕 連理。夫婦に喩ふ、明皇と貴妃との間をいふ。

〔三〕 御書樓。恩賜の書籍を藏する所。

〔旦〕 樓に上る介

西宮渺として見えす。腸は斷つ、一たび樓に登れば。

〔梅、指す介〕

娘、這一帶の （三）黄設設たる琉璃瓦は、是れ九重の宮殿ならずや。

〔旦〕 涙ぐむを作す介

〔前腔〕 （四）高きに凭つて涙を灑ぎ。遙に九重の閣を望めば。咫尺の裏、紅雲を隔つ。嘆ず、昨宵は還ほ是れ （四）風幃の人。冀くは （四）心を回へし。重ねて温存を與へられんことを。天なるか、太だ忍ぶ。未だ白頭ならざるに。先づ君恩をして盡さしめんとは。

〔梅、指す介〕

呀、遠遠く一箇の公公の馬に騎りて來るを望見む。敢是娘を召すならん。

〔旦〕 歎する介

料るに、他の （三）丹鳳の書を銜むにはあらず。多く又恐らくは、（四）烏鴉の信を傳ふるならんことを。

〔三〕 黄設設。黄瓦は宮殿に用ふ、設設は助辭。

〔四〕 高きに凭る。樓に登ること。

〔四〕 風幃の人。宮闈に在りしをいふ。

〔四〕 心を回へし。君の一度悟る意。

〔四〕 丹鳳の書を銜む。天子の詔をいふ、後趙の石虎、戯馬觀を置き、上に詔書を安じ、五色の紙を用ひて、木鳳の口に啣まして、之を頒行せりといふ。

〔四〕 烏鴉の信。前に出づ、凶信をいふ。

〔旦〕樓を下る介〔丑〕上る

暗に〔丑〕舊を懷ふ意を將て、〔四〕歡を失ふ人に報與ず。

〔見る介〕

高力士、娘娘に叩見す。

〔旦〕高力士、爾の來れるは怎麼。

〔丑〕奴婢は恰纔覆旨せしに、萬歲爺は、細かに娘娘の府に回れる光景を問はれ、悔心有るに似たり。現今獨り宮中に坐して、長く吁し短く歎じたまふは、一定是、娘娘を思想すならん。此に因つて特に來報知す。

〔旦〕唉、那裏また我れを想著さん。

〔丑〕奴婢は、〔四〕愚、賢を諫めざるも、娘娘未だ太だ〔四〕執意なる可からず。倘し有甚麼東西、奴婢に付與して、間に乘じて進上せしめば、或は聖心を感じせしめんも、也た未だ知る可からず。

〔旦〕高力士、爾は我に什麼東西を進め去るが好きやを教へよ。

〔想ふ介〕

〔喜漁燈犯〕〔喜漁燈〕思ふに、何物を將つて情悃を傳へ。君を感じせしむ可きや。

我れ想ふに、一身の外は、皆君の賜ふ所。

算ふれば只だ愁涙の千行あり。〔四〕珍珠と作つて亂滾するも。又穿ちて金縷と成し。雕盤を把つて進め難し。

難し。

哦有了。

〔剔銀燈〕這の一縷の〔四〕青絲香潤なるは。曾て君と共に、枕上に頭を並べて相偎視ひ。曾て君に對して、鏡裏に〔五〕雲を撩む。

丫鬟、鏡臺・金翦を取りて過來れ。

〔梅〕應じ取つて上る介〔旦〕髪を解く介

哎、頭髮、頭髮。

〔漁家傲〕惜む可し、爾我が芳年に伴ふ。剪り去るは、心兒に未だ忍びず。

只我が衷腸を表さんと欲するが爲めに。

〔髪を剪るを作す介〕

剪り去つて、心兒に自ら憫む。

〔髪を執り、起ちて哭するを作す介〕

頭髮、頭髮。

〔四〕舊を懷ふ意。明皇の情をいふ。

〔四〕歡を失ふ人。貴妃をいふ。

〔四〕愚賢を諫めず。愚は力士自らいひ、賢は貴妃にかかると、わるいことは申しませぬがの意。

〔四〕執意。剛情を張ること。

〔四〕珍珠と作つて云云。涙が珠となつてこぼるるも、之を金糸にとほして、盤に載せて差上ぐることは出来ないとの意。

〔五〕青絲香潤。つやつやしたる黒髪をいふ。

〔五〕雲を撩む。髪をかきあげること。

〔喜漁燈〕 全く備に仗りて、我が殷勤を寄す。

〔拜する介〕

我が那の聖上呵。

奴が身は止た〔五〕髪髮たる髮數根のみ。這は便是ち我が〔五〕殘絲斷魂なり。

〔起つ介〕

高力士、備將ち去りて、我が與めに聖上に轉奏せよ。

〔哭する介〕

妾が罪は萬死に該る、此生此世、再び天顔を視る能はざれば、謹んで此髮を獻じ、以て依戀を表すと説へ。

〔丑、跪いて髪を接け、肩上に搭ぐ介〕

娘、請ぞ愁煩ふるを免めよ。奴婢は就此去了。好し縷縷青絲の髮に憑りて、重ねて雙雙〔五〕白首の縁を結ばん。

〔下る〕〔旦、坐して哭する介〕〔老旦、貼、上る〕

〔榴花燈犯〕〔剔銀燈〕 聽説是、貴妃妹の君に忤ふと。

〔石榴花〕 聽説是、家門に返ると。

〔五〕 鬢髮。ばらばらの意。
〔五〕 殘絲斷魂。殘命といふ如し。
〔五〕 白首の縁。共に白髮のはえるまでの意。

〔普天樂〕 聽説是、勢を失へる兄の憂懼ふと。聽説是、〔五〕中官至ると。未だ何云を審にせず。

〔進む介〕

貴妃娘娘は、那裏ぞ。

〔梅〕 韓、號二國夫人到れり。

〔旦、哭して語らざるを作す介〕〔老旦、貼、見る介〕

〔老旦〕 貴妃、請ぞ愁煩ふるを免めよ。

〔同に哭する介〕

〔貼〕 前日望春宮に在りて、皇上は十分に歡喜せるに、何の爲めに忽ち此變あるや。

〔漁家傲〕 我は只道ふ、萬歲千秋、歡盡くる無しと。

〔尾犯序〕 我は只道ふ、伊行の笑擧に任すと。

〔石榴花〕 我は只道ふ、縦ひ〔五〕差池あるも誰か爾と〔五〕評論せん。

〔老旦〕 裴家の妹子よ。

〔錦纏道〕 只管〔五〕間言絮陳するを休めよ。

貴妃よ。

〔五〕 中官。宦官のこと、高力士をいふ。
〔五〕 差池。行き違ひの意。
〔五〕 評論。いひあふこと、誰も汝には、かなはないの意。
〔五〕 間言絮陳。しつこく言ふこと。

儂が薄の怒に逢へるは、其中甚の根因かある。

〔旦、理はざるを作す介〕

〔貼〕 貴妃よ。儂我が説ふを怪む莫れ。

〔剔銀燈〕 自來寵多ければ、嫌覺を生ず。知道る可し、秋葉の君恩。

〔六〕 恁く人と爲りては、怎ぞ趨つて至尊に趨承せん。

〔老旦〕 〔合〕 雁過聲。姊妹毎、情切にして來りて相問ふ。甚麼爲めにか、

耳畔の 嘸嘸。總て聞かざるに似たり。

〔尾聲〕 〔旦〕 秋風團扇は原吾が分。多謝す連枝の特に 過存するを。

〔六〕 總て萬語千言有るも。只心上に在りて付る。

〔竟に下る〕

〔貼〕 姉姊、儂看、這箇様子にては、如何ぞ 使得らん。

〔老旦〕 正是、我毎特に來つて他を看しに、他の 心上に事有り、竟自

房に進み去れり。妹子よ、儂も、再び望春宮に到る時、他を學ぶを

要すること休れ。

〔貼、羞づる介〕

〔五九〕 嫌覺、すきまのこと、あまり寵が過ぎると、我儘に流れて感情の衝突が起る意。

〔六〇〕 秋葉の君恩。秋葉は落葉なり、寵衰ふれば捨てらるる意。

〔六一〕 恁く人と爲り云云。そんな風では、とても君の御機嫌を取ることは出来ないの意。

〔六二〕 嘸嘸。耳のそばで、かまひすしきこと。

〔六三〕 秋風團扇。班婕妤の怨歌行に基く、秋になれば扇の棄てらるる意。

〔六四〕 過存。存問に同じ。

〔六五〕 總べて云云。自分も言ひ度いことは澤山あれど、口に出しては言ひ兼ねる意、魏國夫人に對して言ふなり。

〔六六〕 使得。宜しの意。あんな風ではだめだといふこと。

〔六七〕 心上に事あり。別に思ふ

啐。

今朝忽ち見る、天門を下るを。(張籍)

〔老〕 相對して那ぞ能く、神を愴ましめざらん。(廖匡圖)

〔貼〕 冷眼靜看すれば、眞に笑ふに好し。(徐夔)

〔老〕 中に芒刺を含みて、人を傷けんと欲す。(陸龜蒙)

ことがありての意。

〔六八〕 他を學ぶ云云。貴妃のまねをして、すれてはいけないと、からかふ意。

〔六九〕 天門。宮門に喩ふ。

〔七〇〕 冷眼靜看。冷静に考ふる意。

〔七一〕 中に芒刺を含む。言中に毒ある意。

第九齣 復 召

〔生、上る〕

〔南呂引子〕〔虞美人〕 端無く惹き起す、間煩惱。話有るも、誰にか告げん。此情已に自ら、支持するを費す。怪殺む、鸚哥の。不住人に向つて提するを。

〔四〕 輦路春草を生じ。上林花枝に満つ。高きに

凭れば、何ぞ限らん意を。復た侍臣の知る無

し。寡人は昨楊妃の嫡姪なるに因つて、心中

不 忿、一時計を失ひ、他を遣はし出せり。

誰か想はん、佳人は得難し。他去りしより後、

目に觸るるものは、總是て 憎を生じ、景に

對すれば、恨を惹くに非ざるは無し。那の楊

國忠入朝して罪を謝す。寡人也、顔の他を見る無し。

〔嘆する介〕

〔一〕 復召。貴妃の再び宮中に召さるる場。

〔二〕 支持。ささふること、自分でがまんしなければならぬ意。

〔三〕 鸚哥。鸚鵡はよくならされて、人を見れば「來了」「いらつしやいませ」などと言ふ、今は貴妃が歎を失したるも知らず、たえず「來了」を繰り返す。

へすを開きて、明皇も益々煩悶に堪へざるをいふなり。

〔四〕 輦路。御成り道のこと、春草生ずとは、往來のなき意。

〔五〕 何ぞ限らん。限りなき意。

〔六〕 不忿。不の字意なし。

〔七〕 憎を生じ。癢の種の意。

〔八〕 顔の云云。面目なしの意。

咳、召し取りて宮に回さんと欲待するも、却つて又口に出し難し。若し是れ他を召し來らずんば、朕をして怎生に消遣めしめん。好だ割割不下也。

〔南呂過曲〕〔十樣錦〕〔繡帶兒〕 春風靜に、宮簾半ば啓く。消し難し 日影

の遅遅たるを。好鳥を聽けば猶ほ歡聲を作し。新花を靨れば、容輝を鬪は

すに似たり。追悔す。

〔宜春令〕 悔殺す。咱が 一刻兒の粗疏。他が十分の 嬌嬖を解せず。

枉しく 憐香惜玉に負了く。 那些の情致ぞ。

〔副淨、内監に扮して上る〕

〔四〕 膾は玉盤に下りて紅縷細く、酒は金甕に開いて 緑醅濃かなり。

〔跪いて見ゆる介〕

請ふ萬歲爺、膳に上かれよ。

〔生、應せざる介〕〔副淨、又請ふ介〕〔生、惱む介〕

哇、誰が儻をして請じ來らしめしや。

〔副淨〕 萬歲爺は、清晨より曾て進膳らす。後宮は 傳催し、排膳して伺候せしむ。

〔生〕 哇、甚麼の後宮ぞ。内侍を叫べ。

〔九〕 日影の遅遅。日足の長きこと。

〔一〇〕 一刻兒の粗疏。ちよつとのしくじりの意。

〔一一〕 嬌嬖。だたなこれること。

〔一二〕 憐香惜玉。香玉は女子に喩ふ、婦女を愛すること、全く婦女を愛する術を知らぬといはれてもしかたなしとの意。

〔一三〕 那些の情致ぞ。實に野暮の骨頂の意。

〔一四〕 膾。日本料理の刺身の如し。

〔一五〕 緑醅。綠酒に同じ。

〔一六〕 傳催。催促すること。

〔二内侍、應じて上る。〕

〔生〕 這所を掃去りて、(二七) 打つこと一百發、(二八) 淨軍所に入れ去れ。

〔内侍〕 領 旨。

〔同に副淨を掃へて下る〕

〔生〕 哎、朕此に在りて妃子を想念へるに、却つて這所に来て(二九) 攪亂一番せられたり。好だ煩惱也。

〔降黄龍換頭〕 伊を思へば、縦ひ天上の瓊漿。海外の珍饈あるも。他が

甚般なる滋味なるを知らんや。(三〇) 除非可意が、立つて跟前に向つてのみ、

方に調餓を慰めん。

〔淨、内監に扮して上る〕

(三一) 尊前の綺席に、歌舞を陳ね。花外の紅樓に、管絃を列ぬ。

〔見えて跪く介〕

請ふ萬歲爺、沈香亭上に飲宴して、(三二) 梨園の新樂を聽賞まさんことを。

〔生〕 哇、甚の沈香亭と説ふぞ。好打。

〔淨、叩頭する介〕

〔二七〕 打。鞭にて打つこと。
〔二八〕 淨軍所。宦官を監禁する所。
〔二九〕 攪亂一番。心をかきみだすこと。
〔三〇〕 除非。ただこれのみの意、貴妃ならでは何を食べても味がなく、貴妃がわが前にありてこそ、何かたべる氣になるとの意。

奴婢の事に干るに非ず。是れ太子諸王の説はるるに、萬歲爺は心緒快からざれば、特に消遣みた

〔生〕 哇、我が心緒に何の不快かあらん。内侍を叫べ。

〔内侍、應じて上る〕

這所を掃へ去つて、打つこと一百發、(三三) 措薪司に入れ、火者に當て去れ。

〔内侍〕 領 旨。

〔同に淨を掃へて下る〕

〔生〕 内侍過來れ。

〔内侍應じて上る〕

〔生〕 備二人をして、宮門を看守せしめ、一人の擅に入るを許さず。

違ふ者は重く打たしむ。

〔内侍〕 領 旨。

〔前場に立つを作す介〕

〔生〕 唉、朕此時 甚の心情有つて、還た去つて歌を聴き酒を飲まんや。

〔醉太平〕 想ふ、亭際闌に憑りしを。仍ほ是玉闌干なるも。問ふ (三四) 新妝誰有つてか同じく倚らん。

〔三三〕 措薪司。火夫部屋といふ如し。
〔三四〕 甚の心情ありて云云。歌を聴き酒を飲む氣になれぬこと。
〔三五〕 想ふ亭際闌に憑りしを。沈香亭の欄干に倚りて、貴妃と共に牡丹をながめしこと、第四齣春睡の末に應ず。
〔三六〕 新妝。宮人をいふ、清平調の「可憐飛燕倚新妝」の句を用ひたり。

就たどひ新しん妝さう有ある呵あ。

〔三〕知音ちいんの人は逝ゆけり。他かれは 鷓鴣こんげん、響ひびを絶たち。我われは 玉笛ぎよくてきふ、吹ふくを羞はづ。

〔丑〕肩かたに髪かみを搭かたげて上のる

〔洗溪紗〕離別りべつの悲かなしみ。相思さうしの意い。兩下裏りやうはうの 抹媚まろび、誰たれか知しらん。我われは旁かたはよ

〔三〕箇中こちゆうの機きに參透さんとうし。〔三〕鸞鳳らんほうを打合うあせて、一處しよに在ありて飛とばしめんと

要ほつす。

〔内侍を見る介〕

萬歲爺まんさいやは那裏いづこに在あすや。

〔内侍〕獨自坐ひとりざして宮中きゆうちゆうに在あり。

〔丑〕入いらんよ欲ほつし、内侍ないじ欄とどむる介しぐさ。

〔丑〕爾なんぢ怎麼いかんぞ咱家われを欄阻とどむるや。

〔内侍〕萬歲爺まんさいやは、十分じふぶん著惱ちやくにやう、進膳しんぜんのものをば、連つづけて兩箇ふたりまで連打つづけうちして、特とくに我毎われらをして宮門きゆうもんを看守まもらしめ、一人ひとりも擅ほしに入いるを許ゆるさず。

〔丑〕原來もとより此この如ごとくんば、咱家われは且しく候また著たん。

〔生〕朕委われまことに〔三〕無聊つれづれ頼たなれば、且しく宮門きゆうもん外ぐわいに至いたつて、閒步かんほすること片しは

時しせん。

看みよ、一帯たいの瑤階やうかい。〔三〕依然いぜんとして芳草はうさう齊ひとし。〔三〕裙裾くんきよを蹴けり。〔三〕珠履しゆりの追つ

隨ずするを見みず。

〔丑〕望のぞむ介しぐさ。

萬歲爺まんさいやは、出いで來きたれり。咱且われしく門外もんぐわいに 閃ひび在ありて、箇この機き會をを觀みん。

〔虚下して、即ち上り聽く介〕

〔生〕寡人くわじん此こに在ありて、妃子ひしを思おも念もへるに、知しらず、妃子ひし又また怎いかん生かぞ、寡人くわじんを思おも念もはんや。早間さきま高力かうりき

士しに問とひしに、他かれは説いふ、妃子ひし出いで去さりて、涙眼なみだめ乾かわかずと。朕われをして 寸心すんしん割きくが如ごとくならしむ。

這この半日はんじちの間あひだ、再またび消息せうそくを知るしるに從よ無なし。高力士かうりきし這厮こつも、也また竟つひに朕われが跟前まへに到いたらず。好生はなはだ惡にくむ可べ

し。

〔丑〕見まみ、見みゆる介しぐさ。

奴婢わたくし、這裏こゝに在あり。

〔生〕丑ちゆうを看みるを作なす介しぐさ。

高力士かうりきし。爾なんぢの肩かた上じやうに搭かつぐは、甚い麼かなる東西もぞ。

〔丑〕是これは楊娘やうぢやうの頭かみ髪のけなり。

〔三七〕知音の人。音樂に通曉せる人、貴妃をいふ。

〔三八〕鷓鴣響を絶ち、斷弦の意、夫婦の別れしことに喩ふ。

〔三九〕玉笛。明皇音樂に精通し、沈香亭の會に、李龜年をして清平調の譜を按べしめ、帝は自ら玉笛を吹いて、之に和せしといふ。

〔四〇〕抹媚。喬棟の意、しらばくれてすまざる意。

〔四一〕箇中の機に參透す。心中がよくわかつて居る意。

〔四二〕鸞鳳。夫婦に喩ふ、明皇貴妃を、舊の通り夫婦にして見せる意。

〔四三〕無聊頼。しよさなきこと。

〔四四〕依然。齣首の「鞞路春草生す」に應ず。

〔四五〕裙裾を蹴り。貴妃の階を上り來ること。

〔三六〕珠履の追隨。侍女の之に従ふこと。

〔三七〕閃在。ひらりと身をかはすこと。

〔三八〕寸心割くが如し。斷腸の意。

〔生〕 笑ふ介。

什麼頭髮ぞ。

〔丑〕 娘の說道に、自ら恨む愚味にして、上聖心に忤ひ、罪は萬死に應る。今生今世、再び天顔を觀る能勾す。特に這の頭髮を翦下つて、奴婢をして萬歲爺に献上し、以て依戀の意を表せしむと。

〔髮を獻する介〕 生、髮を執り、見て哭する介。

哎喲、我が那の妃子呵。

〔啄木兒〕 記す、前宵枕邊に香氣を聞き、今朝に到り、翦却てて、愁に和して寄す。青絲を覩れば、腸斷え魂迷ふ。

想ふに、寡人と妃子と、恩情の中斷せるは、又這の頭髮に似たり。

一雲の裏に、金刀落ちて。長く雲髻を辭す。

〔丑〕 萬歲爺。

〔鮑老催〕 請ふ、悽悽を休めよ。

奴婢想ふに、楊娘娘は既に恩幸を蒙れるに、萬歲爺は、何ぞ宮中片席の地を惜みて、乃ち外邊に淪浴せしめんや。

〔四〕 春風、肯て天上より回らしめ。〔三〕 名花便ち苑外より移せ。

〔三九〕 愁に和して寄す。愁と共に寄する意。

〔四〇〕 悽悽。打ちしほるること。

〔四一〕 片席。わづかの場所。

〔四二〕 春風云云。明皇の機嫌を取り直すこと。

〔四三〕 名花云云。貴妃を再び宮中に召し返す意。

〔生〕 想ふを作す介。

只是れ寡人已經に放ち出せるに、怎んぞ召し還すに好からん。

〔丑〕 罪あれば放ち出し、過を悔ゆれば召し還すは、正に是れ聖主天の如きの度なり。

〔生〕 點頭く介。

〔丑〕 況んや、今早く單車送り出せるは、纔是黎明にして、此時天色已に暮れたれば、安慶坊を開き、太華宅より入らしめば、外人誰か之を知るを得ん。

〔叩頭する介〕

驛原を乞ふ。迎歸を賜はり。〔四七〕 淹滯する無れ。〔四八〕 穩情取、一笑すれば、明皇の機嫌が忽ちなほること。

〔生〕 高力士、就ち爾をして貴妃を迎取へて、宮に回らしむること便了。

〔丑〕 領旨。

〔下る〕

〔生〕 咳、妃子來る時は、寡人をして、怎生にして相見えしめん。

〔四四〕 天の如きの度。度量の宏大なること。

〔四五〕 安慶坊。街の名、安慶坊にそへる御所の裏門のこと。

〔四六〕 太華宅。太華門の傍にある、御所の入口なるべし。

〔四七〕 淹滯。猶豫すること。

〔四八〕 穩情取。管取に同じ、たしかにうけあふ意。

〔四九〕 一笑すれば云云。貴妃が一笑すれば、明皇の機嫌が忽ちなほること。

〔五〇〕 怎生にして。どんな風に挨拶したらよからうかの意。

〔下小樓〕 喜び得たり、玉人の歸るを。又愁ふ、他が嬌嗔に慣るるを。〔五〕 面を背けて嘸啼かば。那

の時は何の言語を將て、前非を飾らん。

〔丑〕 拵し、百般の親媚を把つて、他が半日の分離に酬いん。

〔丑〕 内侍・宮女と共に、紗燈もて旦を引いて上る

〔雙聲子〕 香車曳く。香車曳く。宮槐の翠を穿ち過了ぎ。紗籠對す。

紗籠對す。宮花の麗なるに掩映著ふ。

〔内侍・宮女、下る〕〔丑〕 進んで報ずる介

楊娘娘到れり。

〔生〕 快く宣して、進み來らしめよ。

〔丑〕 領旨。楊娘娘宣あり。

〔旦〕 進んで見ゆる介

臣妾楊氏見駕す。死罪、死罪。

〔俯伏する介〕

〔生〕 平身よ。

〔五〕 面を背けて啼く。嬌嗔の態。
〔三〕 拵し。ままよ、まかす意、遮英に同じ。
〔三〕 百般の親媚。いろいろとだましますかす意。
〔四〕 紗燈。燈籠のこと。
〔五〕 香車。婦女の乗る車。
〔六〕 對。一對二對の對すること。
〔七〕 宮花の麗。貴妃をいふ。
〔八〕 宣。旨を傳へること。
〔九〕 死罪。罪を乞ふこと、陳謝の辭。

〔丑〕 暗に下る〔旦〕 跪いて泣く介
臣妾無狀にして、上は天譴を干せるに、今は重ねて聖顔を視るを得たり。死すとも亦 瞑目すべし。

〔生、共に泣く介〕

妃子、何ぞ此言を出すや。

〔玉漏遅序〕〔旦〕 念ふに臣妾、山の如きの罪累。皇恩の天の如く容庇

するを荷ふ。今自ら艾めて。願はくは魚貫を承け。敢て蛾眉を

妬まんや。

〔生、旦を扶け起す介〕

寡人一時錯見る。従前の話は、不必再提了。

〔旦〕 泣いて起つ介

萬歲。

〔生、旦の手を携へ、旦の與めに涙を拭ふ介〕

〔尾聲〕 今より愁滋味を識破る。這の恩情更に十倍を添ふ。

妃子、我れ且らく。

〔六〕 天譴。天子より譴責を賜はる意。
〔六〕 瞑目。安心の意。
〔三〕 天の如く容庇す。天恩の非常に寛大なること。
〔六〕 自ら艾む。後悔すること。
〔四〕 魚貫。魚の前後にならぶこと、即ち順番に君寵を受けらる意。
〔五〕 蛾眉。宮人をいふ。
〔六〕 愁滋味を識破る。充分につらい思ひをしたとの意。

この一日の相思を伊に訴與らん。

〔宮娥上る〕

西宮の宴備はれり。請ふ萬歳爺、娘娘宴に上られよ。

〔生〕眞情を陶出して、酒尊に満ち。〔李中〕

〔旦〕此心此より、更に何をか言はん。〔羅隱〕

〔生〕別離慣れず、無窮の憶。〔蘇頲〕

〔旦〕重ねて椒房に入りて、涙痕を拭ふ。〔柳公權〕

- 〔六七〕陶出す。眞情を吐露すること。
- 〔六八〕尊。樽に同じ。
- 〔六九〕無窮の憶。離別に慣れぬ故に、いろいろとふさぎ込む意。
- 〔七〇〕椒房。前に出づ、皇后宮のこと。

第十齣 疑 識

〔外〕郭子儀に扮し、將巾佩劍して上る

壯懷磊落、誰か知る有らん。一劍身を防ぎ、且自ら隨ふ。乾坤を整頓

して、時を濟ひ了り。那回方に表はす、是れ男兒。自家は姓は郭、名は

子儀、本貫は華州鄭縣の人民なり。〔四〕韜略を學び成して、腹は經綸に満

つ。要は一箇の天を頂き地に立つ男兒と做りて、一樁の國を定め

邦を安んずるの事業を幹さんと思量ふ。今は武舉の出身を以て、京に到

つて選に調するに、正に楊國忠の竊に威權を弄し、安祿山の濫りに寵

眷を膺くるに値ひ、一個の朝綱をば、看看弄得んで不成模樣了。俺郭

子儀の似きは、未だ一官半職を得ず。知らず何時か、纔に朝廷の替に、

力を出すを得ん也則。

〔商調〕集賢賓 男兒を論せば。壯懷須らく自ら吐くべし。肯て空しく

杞天に向つて呼ばんや。笑ふ他毎は 堂間に處る燕に似たり。誰有つ

- 〔一〕疑懼。疑はしきつちうらの場。
- 〔二〕將巾佩劍。武人の裝束をいふ。
- 〔三〕乾坤を整頓し云云。反亂を鎮定して、國家を再造すること、暗に安祿山の亂を指していふ。
- 〔四〕韜略。六韜。略、兵書をいふ。
- 〔五〕天を頂き地に立つ。俯仰天地に耻ぢざる意。
- 〔六〕一樁。一件に同じ。
- 〔七〕選に調す。漢拔にあづからんとして上京せしこと。
- 〔八〕不成模樣了。混亂の狀をいふ。

て曾て (三) 屋上に鳥を瞻ん。 (四) 柙虎樊熊を隄防せず。 (五) 社鼠城狐の縦横するに任す。 幾回家か (六) 雞鳴を聴き。 身を起して獨り夜舞ふ。 想ふ古來多少の (七) 乗除。 (八) 箇の動名を顯し得て宇宙に垂れん。 不爭か便ち (九) 姓字樵漁に老いんや。

且らく長安市上に到つて、酔を買ふこと一回せん。

〔行く科〕

〔逍遙樂〕 (一) 天街に向つて徐歩し。 暫く (二) 牢騷を遣り。 聊か (三) 逆旅に寛ろぐ。 俺は則ち (四) 來往の紛如たるを見る。 (五) 闇昏昏として、 (六) 醉漢の扶け難きに似たり。 那裏ぞ獨り醒めて行吟する (七) 楚の大夫有らんや。 俺郭子儀阿。

【九】集賢賓の大意。男兒として、火に氣焔を吐くべし、空しく杞憂を抱いた處でしかたがない、世人は一時の安を食りて、從ふべき所を知らず、不用意に豹虎を山野に縦ち、狐鼠の縦横に任す、國家の亂れんとするを知り、荒雞を聽いて半夜に舞ひ、竊に功を立つる時に遇へるを喜ぶ、古來盛衰のあるは免れない、願くは風雲に乗じて大名を天下に顯はさん、いかでか名もなく樵漁となつて一生を送らうぞと、豪傑の滿腔の感慨を述ぶる處、眞に快人の快語なり。

知らず、遠き慮なきに喩ふ。 【二】屋上に鳥を瞻ん。詩經の小雅正月の篇に「瞻鳥爰止、于誰之屋」とあり、註に民は當に明君を求めて之に歸すべしといふ、誰に從ふべきかを知らざる意に用ふ。 【三】柙虎樊熊。樊も柙に同じ、虎や熊を檻に入れることに用心せず、即ち安祿山を放ち歸へすことに喩ふ。 【四】社鼠城狐。小人の跋扈に喩ふ、楊國忠等をいふ。 【五】雞鳴を聴き。雞の半夜に鳴くは、天下の亂るる象となす、晉の祖逖慷慨にして大志あり、曾て劉琨と同じく寢れ、半夜に雞鳴を聴き、琨を蹴て曰く是れ惡聲に非るなりと、起つて舞へり。 【六】乗除。盛衰興亡をいふ。 【七】姓字樵漁に老い。一生漁樵となつて、無名に了ること。

(一) 箇の同心の伴侶を究めんとするに。 悵む (二) 釣魚の人は去り、 (三) 射虎の人は遙に、 (四) 屠狗の人は無きを。

〔下る科〕

我家の酒舗は十分に高く。 罰誓つて (一) 賒なく、 (二) 酒標に留む。 只要するに、錢有れば、爾の飲に憑せ。 錢無ければ滴水も也 (三) 消ひ難し。 小子是這の長安市上、新豐館の大酒樓の、一箇の小二哥とは便ち是なり。 俺が這の酒樓は、東西兩市の間に在りて、往來は十分に熱鬧なり。 凡是て京城内外の王孫公子、官員、市戶、軍民百姓、一個として俺樓上に到りて三杯を吃せざるもの有ることなし。 也た (四) 寡酒を吃する、 (五) 案酒を吃する、 (六) 酒を買つて去る、 (七) 酒を包んで來る、 (八) 酒を飲む、 (九) 打發き了す。 道ふこと猶未だ了らざるに、又一箇の酒を吃む的來れり。

〔外、行き上る科〕

〔上京馬〕 遙に望見すれば、綠楊斜に畫樓の隅に寄り。 (一) 滴滴溜たる一片の (二) 青帘、風外に舞ふ。 怎得個、 (三) 燕市の酒人の來りて共に沽はんことぞ。

【八】科。介に同じ。 【九】天街。都大路をいふ。 【一〇】牢騷。不平の意。 【一一】逆旅。宿屋のこと。 【一二】來往。往來の人。 【一三】闇昏昏。衆愚のより合ひをいふ。 【一四】醉漢の扶け難き。所謂「衆人皆醉」の意。 【一五】楚の大夫。楚の三閭大夫屈原のこと、その漁父辭に云ふ、「屈原既放、行吟澤畔、且云ふ、「舉世皆濁、我獨清、衆人皆醉、我獨醒」と。 【一六】釣魚の人。太公望のこと。 【一七】射虎の人。李廣のこと。 【一八】屠狗の人。樊噲のこと。 皆一世の豪傑なれども、末世に出でざる時は、魚を釣り狗を屠りて渡世せり、この處無名の英雄もがたと、同心の友を求むるに、一人もなき意。 【一九】酒保。酒店のボーイをい

〔喚ぶ介〕

酒家有麼。

〔丑、應ずる科〕

客官請樓上坐。

〔外、樓に上るをす科〕

是れ好き一座の酒樓なり。

軒窗を敞けば。日朗らかに風疏る。四週遭の粉壁上を見れば、都て醉仙の圖を畫けり。

〔丑〕客官自飲むや、還是れ客を待つや。

〔外〕獨り三杯を飲む、好き酒あらば取り來れ。

〔丑〕好き酒あり。

〔酒を取つて上る科〕

酒は此に在り。

〔内にて叫ぶ科〕

小二哥這裏に來れ。

ふ。

〔三〕除。かけうりのこと。

〔三〕酒標に留む。看板に出すこと、「罰誓無除」といふ四字を看板にすること。

〔三〕消ひ難し。飲ませないの意。

〔三〕市戸。商人のこと。

〔三〕寡酒。酒ばかり飲む人。

〔三〕案酒。卓に就て、菜を食べる人。

〔三〕酒を包む。包は月定のこと。

〔三〕打發。遣はすこと。

〔三〕滴溜溜。風に飜る貌、ひらひらといふ如し。

〔三〕青帘。青旗に同じ、酒店は青旗を掲ぐ。

〔四〕燕市の酒人。燕趙には感慨悲歌の士多しと稱す、酒人は酒徒に同じ。

〔四〕醉仙。酒仙に同じ。

〔丑、應じて忙しく下る〕〔外、酒を飲む科〕

〔梧葉兒〕俺は是れ酒を愛するの。開陶令に非らず。也た酒を使ふの

莽灌夫を學ばず。一謎價、痛飲して、興豪靡なり。這の醒眼兒

を撐著げて、誰か倣倣はん。問ふ醉郷深く吾を容れ得べきや。街市の

の恁く、嗑呼するを聴く。偏に冷落す。高陽の酒徒。

〔起つて見るをす科〕〔老旦、内監に扮し、副淨・末・淨、官に扮し、

各吉服し、雜、金幣を捧げ、羊を牽き酒を擔ひ、隨行して上り、場

を繞りて下る〕〔丑、酒を捧げて上る〕

客官熱酒此に在り。

〔外〕酒保、我れ欄に問ねん。咱が這の樓の前、那の些の官員は是れ何

處へ往き去來るぞ。

〔丑〕客官、爾一面に酒吃せよ。我一面に爾に告訴ん。只國舅楊

丞相、竝に韓國・魏國・秦國三位の夫人の爲めに、萬歲爺は、各新第を賜

造りて、這の官陽里中に在り。四家の府門相連り、俱に大内に照

らして、一般の造法なり。這の一家が造り來れば、那の一家に勝似らん

〔四〕開陶令。晉の陶淵明のこと、開はひまの意。

〔四〕酒を使ふ。醉に乗じて亂暴すること。

〔四〕莽灌夫。漢の武帝に仕ふ、剛直にして酒を使ひ、喜んで豪傑と交はり、貴戚に面諛するを好まず、莽は野蠻の意。

〔四〕豪靡。豪快の意。

〔四〕醒眼兒を撐著げて。獨り醒むる意、撐者は開くこと。

〔四〕倣倣。とりあふ意、我獨り醒めたるに、誰もあひてにならぬこと。

〔四〕醉郷云云。充分酒に酔つて、安心して居らるるや否やの意。

〔四〕嗑呼。熱鬧の意。

〔五〕高陽の酒徒。酈其食初めて沛公に見え、長揖して、高陽の酒徒といへり、郭子儀日

と要し、那の一家が造り來れば、又這の一家に賽過らんと要す。若し那の家の造り得て華麗なるを見れば、這の家は便ち折毀了して、重ねて新に再び造り、定ず那の家と一樣ならんことを要して、方纒に手を住む。一座の廳堂も、千萬貫の錢鈔を費上すに足る。今日工を完る。此に因つて合朝の大小官員、都て羊酒禮物を備へ、各家に前往きて賀を稱べ、這裏より過ぎ去る。

【外、驚く科】

哦、這等の事あるか。

【丑】我が再び去つて熱酒を看來るを待ちたまへ。

【下る】【外、嘆ずる科】

呀、外戚の寵盛なること、這箇地位に到る、如何にせば是きや。

【醋葫蘆】怪むらくは私家の恁ばかり、僭竊し。豪奢を競ひ。土木を誇るを。一班兒の公卿は甘んじて腰を折つて趨るを作し。争うて權門に向ふこと、

【再】再た一個人の、輿情を把つて、市附の如し。

【九】九重に向つて分訴するものあるなし。知る可し、他の朱甍碧瓦は。總て是れ血膏を塗れるを。

ら擬するない。

【五二】面。かたはらの意。

【五三】宣陽里。街の名。

【五四】照らして。御所と同じ造り方の意。

【五五】賽過、勝似に同じ。

【五六】方纒に手を住む。やつとやめること。

【五七】羊酒禮物。祝儀の品。

【五八】這箇地位。こゝまでの意。

【五九】僭竊。天子に僭擬すると。

【六〇】市附の如し。市に赴くが如しの意。

【六一】九重に向つて。天子に向つて、民意を訴ふるものなき意。

【六二】血膏を塗る。民の膏血を塗る意。

【起つ科】

心中一時に憤懣して、酒の湧上し來るを覺えず。且らく四壁の間に向つて、看一回めん。

【看るを作す科】

這の壁廂の細字數行は、人の題したる詩句あり。我れ試みに戯ん。

【看て念むを作す科】

【三】燕市人皆去り。函關馬歸らず。若し山下の鬼に逢はば。環上羅衣を繫く。呀、這の詩は是れ好た

奇怪なり。

【五篇】我れ這の裏、睛を停めて一直看。頭兒より句を逐うて讀む。細端

詳すれば。詩意は禎符少なし。

且つ、是れ什麼なる人の題せるかを看ん。

【又看て念む料】

李遐周題す。

【想ふを作す科】

李遐周、這の名字は、好生識熟る。哦、是了。我聞き得たるに、(一)個の術士李遐周有りて、能く過去未來を知ると。必定就是ち他ならん。多則是、

【三】燕市云云。この詩句の解は、後に詳なり。

【六三】禎符。吉兆をいふ。

就裏言ひ難く(六) 識語を藏す。(五) 詩謎を猜するの杜家は何處ぞ。早難道、酔ひ來りて牆上に。筆に信せて(六) 亂鴉を塗るや。

〔内〕にて喧鬧を作す科(外) 喚ぶ科

酒保は那裏ぞ。

〔丑〕 上る

客官、做甚麼。

〔外〕 樓下は何の爲に、又這般に喧鬧しきや。

〔丑〕 客官、這の廳兒に靠著て、往下看去就是。

〔外〕 看る科(淨) 王服馬に騎り、頭踏の職事、前導して引いて上り、場を繞りて行き下る科

〔外〕 那是何人ぞ。

〔丑〕 笑つて指す科

客官、爾他の那個の大肚皮を見ずや。這の人、姓は安、名は祿山、萬歲爺は十分に他を寵愛して、御座の(七) 金鶏の步帳をば、都て他に賜與はりて坐過せ、今日又他を封じて東平郡王と做せしかば、方纔恩を謝して朝を出で、(八) 東華門外の新第に歸るを賜はりて、這裏より經過す。

〔六四〕 識語。豫言に同じ。
〔六五〕 詩謎を猜する杜家。一に社家に作る、この語は西廂記に出づ、輟耕錄の院本名目中に杜大伯猜詩謎の一本あり、何人なるを知らず。
〔六六〕 亂鴉を塗る。まつ黒く墨を塗ること。
〔六七〕 金鶏の步帳。金雞の羽にて造りし、ついたての類。
〔六八〕 東華門。宮城の門の名。

〔外〕 驚き怒る科

呀、這這就是、安祿山なるか。何の功勞有つて遽に王爵に封せられしや。我れ這廝の面を看るに、(九) 反相あり。天下を亂すものは、必ず此人ならん。

〔金菊香〕 這の野心の(七) 雜種。(七) 牧羊の奴を見了るに。料るに(七) 蜂目豺

聲。定めて是れ狡徒。怎んぞ箇の野狼をば、引き來りて屋裏に居くや。怕くは題壁の詩に符するならずや。更に那の(七) 私門の貴戚と、一例に(七) 妖狐を逞(七) うせんことを。

〔丑〕 客官爲甚事、這般著惱來

〔柳葉兒〕〔外〕 哎(七) 不由人、冷鸚鵡として、冠を衝いて髮豎つ。熱烘烘として、氣(七) 胸脯を夯く。(七) 咕嚕嚕として、腰間の寶劍を頻頻に觀る。

〔丑〕 客官、請ふ怒りを息めて、再び我が與に一壺を消ひよ。

〔外〕 呀、便ち俺をして千盞を傾け。百壺を飲み盡了さしむるも。怎んぞ這の重沈沈たる、一箇の(七) 愁擔兒をば消除せんや。

〔丑〕 身を起すを作す介

〔九〕 反相。謀反の相をいふ。
〔七〕 雜種。安祿山は雜胡なり。
〔七〕 牧羊の奴。安祿山を罵る辭。
〔七〕 蜂目豺聲。惡人の相をいふ、左傳に出づ、僖公二十三年に「楚子將以下商臣爲太子、令尹子上曰、是人也、讒目而豺聲、忍人也、不可立也」と。
〔七〕 私門の貴戚。楊國忠等をいふ。
〔七〕 妖狐を逞うす。狐媚を呈すること。
〔七〕 不由人。おのづから、まかならぬ等の意。
〔七〕 胸脯を夯く。腹が立ちて胸がさける意。
〔七〕 咕嚕嚕。劍の鳴る音。
〔七〕 愁擔兒。愁悶のこと。
〔七〕 身を起す。出立のこと。

酒を吃まず、この酒錢を收め去れ。

〔丑〕收むるを作す科

別人來ば、三杯萬事を和らぐるに、この客官は一氣千愁を惹く。

〔下〕外、樓を下つて、轉じ行くを作す科

我且らく寓中に回到り去らん。

〔浪來襲〕那の一椿椿の傷心の時事を見著。還た那の一句句の時に感ずる

詩識伏を、湊著む。怕らくは天心人意兩つながら摸り難し。好だ俺を

して、沈吟を費さしめ。跼踏地、眉對をば蹙む。看よ滿地の斜陽、暮

れんと欲す。蕭條たる客館に到るも、兀自意、躊躇す。

〔寓に到り、進んで坐するを作す科〕〔副〕淨、家將に扮して上る、見る

科

稟、爺、朝報下來る。

〔外〕看る科

兵部一本、官員を除授する。事の爲め、聖旨を奉じ、郭子儀は、授

けて、天德軍使と爲す。此を欽めり。原來旨意已に下る。早く索に

〔八〇〕一氣。立腹すること。

〔八一〕轉じ。まがること。

〔八二〕詩識伏。詩のなぞ、伏は押韻の爲に用ふ。

〔八三〕湊著む。一句一事を藏する意。

〔八四〕沈吟。考へ込む意。

〔八五〕跼踏地。忽地の意。

〔八六〕眉對。雙眉をいふ。

〔八七〕躊躇。憂に沈む意。

〔八八〕朝報。官報の如し。

〔八九〕兵部一本。陸軍省よりの上奏文一巻のこと。

〔九〇〕事の爲め。辭令の形式、陸軍の申出なり、以下は任命の辭。

〔九一〕天德軍使。天德軍節度使のこと、鎮臺の司令官なり。

〔九二〕此を欽めり。欽此の二字は勅令の結尾に用ふ、内閣大臣の加ふる所、當時通行の敕任の形式なり。

行李を收拾し、即日任に上り去るべし。

〔副〕淨、應ずる科

〔外〕俺郭子儀、則ち官は卑く職は小なりと雖も、便ち此より朝廷に報

効すべきなり。

〔高過隨調煞〕赤緊、尺水の中に、鬚鱗を展べ。枳棘の中に、毛羽

を拂ふに似たり。且つ喜ぶ、雲霄に奮ひ。天衢に上るに、分有るを。直に

乾坤をば、重ねて整頓するを待的て。百千秋第一等の勳業をば圖る。縦ひ

妖氛孽蠱有りと。少不得、肩に日月を擔ひ。手に大唐をば扶けん。

馬啼いて、空しく踏む、幾年の塵。(胡宿)

長く是れ豪家、要津に據る。(司空圖)

卑散自ら應に、霄漢の隔り。(王建)

知らず國を憂ふるは、是れ何人ぞ。(呂溫)

〔九三〕赤緊。吃緊に同じ、相逼る甚しき意。

〔九四〕尺水の中に云云。深さ一尺の水をいふ、官職が卑くして、大手腕を振ふことが出来ぬ意。

〔九五〕枳棘。いばらなをいふ、後漢書に「枳棘非鸞鳳所棲、百里豈大賢之路」とあり。

〔九六〕分あり。福分のこと、運が開ける意。

〔九七〕妖氛孽蠱。安祿山をいふ。

〔九八〕肩に日月を擔ひ。唐の天下を負うて起つ意。

〔九九〕空しく踏む。多年出世の出来ぬ意。

〔一〇〇〕霄漢。大空のこと、天に上ることは出来ぬ意。

第十一齣 聞樂

〔老旦〕 嫦娥に扮し、仙女を引いて上る

〔南呂引子〕 步蟾宮 清光獨り良霄を占め。

萬古を経て、纖塵も染めず。瑤空に散ずる風露、

銀蟾に灑ぎ。一派の仙音微かに颯々。

薬は長生を搗きて、劫塵を離れ。清妍の面目、

本來真なり。雲中細かに看る、(三) 天香の落つ

るを。仍ほ 蒼蒼に倚る、(四) 桂一輪、(五) 舌は乃

ち嫦娥とは是なり。本太陰の主に屬し、浪に

后羿の妻と傳ふ。(六) 七寶の團圓、三萬六千

年の内に、(七) 周く、一輪皎潔、一千二百里の

中に、(八) 滿つ。(九) 玉兔金蟾、長明の至寶を産

結し、(一〇) 白榆丹桂、萬古の (一一) 奇葩を種成す。

【一】 聞樂。揚貴妃が夢に天樂を聞く場。

【二】 嫦娥。姮娥に同じ、月仙をいふ、原來羿の妻なり、羿不死の薬を西王母より得たるに、嫦娥之を竊みて、月に奔り、蟾蜍となるといふ。

【三】 清光。月光のこと。

【四】 銀蟾。月のこと、月宮の清涼をいふ、月は太陰の精なればなり。

【五】 天香。桂花の香をいふ。

【六】 蒼蒼。天のこと、莊子に「天之蒼蒼其正色耶」の語あり。

【七】 桂一輪。月のこと、月中に仙人の桂樹ありといふ。

【八】 后羿。羿は有窮の后なり。

【九】 七寶の團圓。光明通照、鏡の如きをいふ。

【一〇】 周く。むかし月宮を修むる説あり、三萬六千年かかりて始めて能く修理すといふ。

【一一】 滿つ。直径の意。

【一二】 玉兔金蟾。楚辭に「願菟在腹」といひ、晉の傅玄の撰天問には「月中何有、白兔搗薬」とあり、金蟾は即ち蟾蜍、金玉は形容の語なり。

【一三】 白榆丹桂。月中に生ずといふ。

【一四】 奇葩。ふしぎな花のこと。

〔老旦〕 霓裳羽衣の仙樂一部あり、久しく月宮に秘して、未だ人世に傳へず。今下界の唐の天子は、音を知り樂を好む。他が妃子楊玉環は、前身は原是、蓬萊の玉妃にて、曾經て此に到る。不免他の夢魂を召して、重ねて此曲を聴かしめ、其をして醒來めて記憶し、譜して管絃に入れしめ、竟に天上の仙音をば、留めて人間の佳話と作さば、却つて是れ好からずや。(一五) 寒簧過來れ。

〔貼〕 有。

〔老旦〕 爾ち唐宮の内に到り、楊玉環の夢魂を引いて、此に到りて曲を聴かしめ、曲終つて後、舊に仍つて送り回す可し。

〔貼〕 領 旨。

〔老旦〕 好し (一七) 一枕遊仙の夢に憑つて、暗に千秋 法曲の音を授く。

〔從を引いて下る〕

〔貼〕 娘娘の命を奉著じて、不免月宮を出で、唐の宮中に到り、走くと一遭せん。

〔行く介〕

【一五】 霓裳羽衣。舞曲の名、後に詳なり、相傳ふ、明皇夢に月宮に遊び、仙樂を聞いて喜ぶこと甚し、覺めて後之を譜すといふ、こは之を翻して、貴妃のこととなせるなり。

【一六】 寒簧。仙童の名。

【一七】 一枕遊仙。むかし遊仙枕あり、枕上に一臥すれば仙境に遊ぶといふ。

【一八】 法曲。法曲は唐に起る、霓裳羽衣も法曲なり、白居易の傳に曰く、「法曲雖似失雅音、蓋諸夏之聲也」と、今道觀にて奏する所はその遺聲なりといふ。

〔行く介〕

〔南呂過曲〕〔梁州序犯〕本調 〔一九〕明河斜に映じ。繁星微かに閃く。俛して塵世をば遙かに覗へば。只空濛たる香霧を見る。早くも 〔二〇〕玉府の清殿を離却れ。一に珮は風影に搖き。衣は霞光に動くに任す。小歩すれば、香雲 〔二一〕墊む。天上の樂をば、 〔二二〕宮檐に授けんとす。密かに芳魂を召して 〔二三〕彩蟾に入らしめん。

此に來れば、已に是れ唐宮の内なり。

〔賀新郎〕 爾看、 〔二四〕魚鑰閉ぢ。 〔二五〕龍帷掩ふ。

那の楊妃呵、

海棠の睡り足るに似て、嬌豔を増す。

〔本序尾〕 軽く喚び起して。 〔二六〕冰簟を擁す。

〔喚ぶ介〕

楊娘娘起來よ。

〔旦、夢中の魂に扮して上る〕

〔漁燈兒〕 恰纔的、涼を追ふ後。 〔二七〕雨困しみ雲淹ふ。暢好是酣眠の處。 〔二八〕粉は膩し黄は黏す。

〔貼〕 娘娘、有請。
〔旦〕 呀、深宮の内、簷下何人か叫喚するや。
〔二九〕 悄として 〔一〕箇の宮娥の報するも没箇。軽く畫簷に來る。
〔貼〕 娘娘、快請。
〔旦、倦態欠身を作す介〕
我れ 〔三〇〕嬌怯怯、 〔三一〕朦朧として身欠し。 〔三二〕慢騰騰、自ら起つて簾を開かんとす。
〔出でて貼を見るを作す介〕

呀、原來是れ一箇の宮人。

〔前腔〕〔貼〕 俺は是れ 〔三三〕長門に隸して。 〔三四〕帝奉會て嫌ふ 〔もの〕ならず。

〔旦〕 是れ宮人ならずんば、敢是 〔三五〕別院の美人ならん。

〔貼〕 俺は是れ 〔三六〕昭容に列して。御座會て瞻る 〔もの〕ならず。

〔旦〕 這等くならば、爾は是れ何人ぞ。

〔貼〕 兒家は月中の侍兒にて、名を寒簧と喚ぶ。

則ち俺の名は瑤宮月殿の 〔三七〕僉にあり。

〔一九〕 明河。銀河に同じ、あまの河のこと。
〔二〇〕 玉府。月中のこと。
〔二一〕 墊む。雲が下に敷くこと。
〔二二〕 宮檐。宮人に同じ、貴妃をいふ。
〔二三〕 彩蟾。金蟾に同じ、月をいふ。
〔二四〕 魚鑰。魚の形をなしたる錠のこと。
〔二五〕 龍帷。龍を結びたる間のとばり。
〔二六〕 冰簟。さつぱりしたる臥床をいふ。
〔二七〕 雨困しみ雲淹ふ。疲れること。
〔二八〕 粉は膩し黄は黏す。おしるいの汗ににじみ、きたなくなること。

〔二九〕 悄として云云。靜にして取次もなく、そつと簷下に來る意、畫簷は簾に繪を畫きたるなり。
〔三〇〕 嬌怯怯。嬌羞の態をいふ。
〔三一〕 朦朧。よく目のさめぬ意。
〔三二〕 慢騰騰。慢慢の意。
〔三三〕 長門。宮の名、前に出づ、冷宮なり。
〔三四〕 帝奉。帝を取りて掃除をすること、意は常に掃除を嫌がる様な宮人ではないとのこと。
〔三五〕 別院の美人。妃嬪をいふ。
〔三六〕 昭容。殿の名、意は天子の御側に侍する妃嬪でもないといふこと。
〔三七〕 僉。簾に同じ、月宮の名簾に載せてある意。

〔旦〕驚く介

原來是、月中の仙子、何に因つて此に到るや。

〔貼〕恰纔姮娥の口敷を奉じて、親しく、點を傳へ。娘娘に請うて、桂宮中に到り。花下に、炎を消せしめん。

〔旦〕哦、這等事あるか。

〔貼〕娘娘、必ずしも、遲疑せざれ。兒家が引導せんに、就ち請ふ同行せられよ。

〔旦を引いて行く介〕

〔錦漁燈〕〔合〕碧落を指せば、足下に雲生じて、冉冉たり。青霄を

歩めば、耳中に風の、織織を弄するを聴く。乍ち眸を凝せば、星斗垂垂として、拈る可きに似たり。早く望見すれば、爛輝輝たる宮殿の影は、鏡中に在つて潜む。

〔旦〕呀、時は仲夏に當るに、何の爲に、這般に寒冷なるや。

〔貼〕此は即ち太陰の月府にて、人間に傳ふる所の、廣寒宮とは、是なり。就ち請ふ進去まれよ。

〔三六〕點。點呼、呼びだしのこと。

〔三九〕桂宮。月宮のこと。

〔四〇〕炎を消す。避暑すること。

〔四一〕遲疑。躊躇する意。

〔四二〕碧落。青霄に同じ、天宮をいふ。

〔四三〕冉冉。雲の往來する貌。

〔四四〕織織。風の音をいふ。

〔四五〕拈る。手に取ること。

〔四六〕鏡中。月をいふ。
〔四七〕廣寒宮。月のこと、明皇夢に、道士と八月望夜月中に遊び、勝を見れば、廣寒清虛の府とありと、唐人小説に出づ、この事は本傳奇の末齣重圓の基づく所なり、廣寒とは太陰に屬するを以て云ふ。

〔旦〕喜ぶ介

想へば我れは、濁質凡姿なるに、今夕月府に到るを得たるは、好だ僥倖なるかな。

〔進んで看るを作す介〕

〔錦上花〕清遊勝り。滿意欣ぶ。

〔想ふ介〕

這の些くの景物は、都て曾て見過來れるに似たり。

玉砌を環り。碧簷を繞り。依稀たる風景、漫に猜嫌つ。

那壁に桂花の開けるは、恁ばかり早し。

〔貼〕此は乃ち月中の丹桂とて、四時常に茂り、花葉俱に香ばし。

〔旦〕看る介

果然好き花なり。

看れども足らず。喜び更に添ふ。金英綴り。翠葉兼ね。氤氳たる芳

氣、衣縑に透る。人は桂陰に在りて潜む。

〔内にて、樂を作す介〕

〔旦〕備看、一群の仙女、素衣紅裳にして、桂樹の下より、樂を奏して來る。好だ美聽ならず

〔四八〕濁質凡姿。人間の肉體をいふ。

〔四九〕曾て見過來る。前の「原景蓬萊の玉妃にて曾經て此に到る」に應ず。

〔五〇〕依稀。彷彿に同じ、昔ながらの景色をいふ。

〔五一〕猜嫌。嫌は韻字にて意なし。

〔五二〕金英。桂華のこと。

〔五三〕氤氳。紛紛に同じ。

〔五四〕素衣紅裳。白衣紅裙の姿をいふ。

〔五五〕美聽。好聽に同じ、耳に好感を與ふる意。

や。

〔貼〕此は乃ち、霓裳羽衣の曲なり。

〔雜、仙女に扮し、四人、六人、或は八人、白衣紅裙、〔五〕錦雲肩、〔七〕櫻絡帯に飄り、各樂を奏し唱ひながら、場を繞りて行き上る介〕〔旦、貼、旁に立ちて看る介〕

〔錦中拍〕〔衆〕天樂を攜へて。〔六〕花叢に鬪拈す。〔五〕霓裳を拂つて、露沾

ひ。迴に〔六〕紅塵を隔斷して、〔六〕荏苒たり。直ちに〔六〕瑤臺を寫し出して、

清豔なり。吹彈を縦にして、舌尖〔六〕玉纖韻を添ふ。人間の夢魔を驚不醒。

〔六〕天宮の漏籤を停不駐。〔五〕一枕の遊仙。曲は〔六〕聞鹽に終はる。〔六〕知音

に付して。重ねて〔六〕翻檢せしむ。

〔同に下る〕

〔旦〕妙なるかな、此樂は、清高宛轉にして、我が心魂を感せしむ。眞に人間の有る所にあらざるなり。

〔錦後拍〕縹緲の中。仙姿簇り。〔六〕宛がら曾て覘る。清音を聽き徹して。

〔七〕意厭厭たり。〔七〕琳瑯琬琰を數ふ。琳瑯琬琰を數ふ。一字字、儉かに〔七〕

鳳鞋を將つて、軽く點じ。〔七〕宮商を按じて、指記す指兒の尖。羞臉を暈む。枉げて自ら舞は嬌に、歌は豔なりと許すも。この〔七〕鈞天の雅奏に比すれば。多くは是れ歎づ。

仙子に請ひ問ふ、願はくは月主に一見せんことを求む。

〔貼〕月主を見んと要するは、〔七〕還ほ早し。天色漸く明けたり。請ふ娘、娘宮に回り去

れ。

〔尾聲〕爾ち〔七〕蟾を攀づるに、路有り、應に相念ふべし。

〔旦〕好し新聲を記し取つて欠くること無けん。

〔貼〕只爾を誤りたり。

〔七〕枕上の君王をば。半夜兒閃せり。

〔旦、下る〕

〔六〕宛がら曾て覘る。前に見たことのある意。又前に應ず。〔七〕意厭厭。うつらうつらと、よき心地になること。〔七〕琳瑯琬琰。美玉の名、以て音樂の宮商角徵羽に喩ふ、即ち音律を按ずる意。〔七〕鳳鞋。婦人のくつ、足を踏みて調子を取ること。〔七〕宮商。即ち宮商角徵羽の五音をいふ、今の音階の如し。〔七〕指記す。指尖にて叩いて調子を取ること。〔七〕鈞天の雅奏。天上の音樂

〔六〕錦雲肩。美しき肩掛をいふ。〔五〕櫻絡。環珞に同じ、肩や腰にさげたる珠玉布片の飾。〔六〕花叢に鬪拈す。花下に音樂會を聞く意、鬪拈は競技のこと。〔五〕霓裳。美しきもすそのこと。〔六〕紅塵。俗世界をいふ。〔六〕荏苒。漸く遠きこと。〔六〕瑤臺。玉樓に同じ、月宮をいふ。〔六〕玉纖。美人の指をいふ。〔六〕天宮の漏籤云云。時刻の移ること。〔五〕一枕の遊仙。遊仙枕のこと、前に出づ。〔六〕聞鹽。曲牌の名。〔六〕知音。音樂に精通したる人、貴妃をいふ。〔六〕翻檢。しらべなほすこと。

をいふ、史記趙世家に、「趙簡子五日不知人、大夫皆懼、居二日半、簡子寤曰、我之天帝所甚樂、與百神遊鈞天、廣樂九奏萬舞、不類三代之樂、こと、平生自分では歌舞を自慢すれども、この天上の音樂に比べては、自ら恥づる意。〔七〕還ほ早し。後にその機會あるをいふ、後齣に應ず。〔七〕蟾を攀づるに路あり。他日月中に來るべき意を伏す。〔七〕枕上の君王。眠れる君王を、置き去りにして、月宮に引き入れしことをいふ。

〔貼〕楊妃已に唐宮に回れり。我れは索に月主娘娘に向つて、覆旨す
べき。則個。

〔八〇〕碧瓦桐軒、月殿開く。(曹唐)

還明月を將て、君の回るを送る。(丁仙芝)

〔八一〕鈞天、人間の聴くを許すと雖も。(李商隱)

却つて人間の更漏に催さる。(黃滔)

〔先〕則個。便了、就是了に同じ、それでよしの意。
〔八〇〕碧瓦桐軒。美しき宮殿をいふ。
〔八一〕鈞天。鈞天の樂をいふ。
〔八二〕更漏。時計のこと、永く留まることを許されぬ意。

第十二齣 製譜

〔老旦、上る〕

〔仙呂過曲〕〔醉羅歌〕〔醉扶歸〕西宮纔に、傳呼を奉じ罷む。水榭を安

排して、清佳なるを要す。慢に晶簾を捲けば。朝霞散じ。玉鈞却つて

映す、初陽の挂かるに。

奴家は、永新とは是れなり。念奴妹子と、同に西宮に在つて、貴妃楊娘娘

に承應く。我が娘娘は、再び宮闈に入りてより、萬歲爺は、更に恩幸

を加へらる。真に乃ち三千の寵愛一身に在り、六宮の粉黛顔色無し。

今早く娘娘は分付けて、荷亭を收拾けしめ、曲譜を製せんと要す。念

奴妹子は那裏に在りて、曉妝に伏侍すれば、奴家は先づ此間に到る。

不免文房の四寶をば、擺設べ起來らん。

〔卓羅袍〕 爾看、筆牀初めて拂ひ。光は素笥を分つ。硯池新に注

ぎ。香は墨華に浮ぶ。綠陰深き處幽雅多し。

〔一〕製譜。霓裳羽衣の曲の譜を製する場。
〔二〕傳呼。御用のこと。
〔三〕水榭。水亭に同じ。
〔四〕晶簾。水晶の簾をいふ、簾を捲けば、朝やけが美しく、朝日がさしこむ意。
〔五〕玉鈞。簾を捲いて、かけるかきむいふ。
〔六〕再び宮闈に入る。第九齣復召に應ず。
〔七〕三千の寵愛。この二句は長恨歌を斥ふ。
〔八〕荷亭。即ち水榭なり、荷池に臨めり。
〔九〕文房の四寶。筆墨紙硯をいふ。

「排歌尾」竹風引き。(四) 荷露灑ぐ。波紋に對し、

簾影(五) 參差を弄す。

呀、蘭麝の香飄り、(六) 珮環の風定まる。娘

娘、早則も到れり。

「旦、貼を引いて上る」

「正宮引子」「新荷葉」 幽夢清宵、(七) 月華に度

り。霓裳羽衣の歌を聴き罷む。醒め來つて、音

節記して差ふ無く。新譜を(八) 翻して、長夏を消

せんと擬す。

長眉を(九) 鬪畫して、翠淡濃。(一〇) 遠山移し入

る、鏡の當中。曉臆日は射る、臙脂の頬。(一一)

一朶の(一二) 紅酥、旋て融けんと欲す。我れ楊玉

環、自ら髪を截つて君を感せしめてより後、寵を荷ふこと彌深し。只梅妃の(一三) 驚鴻の一舞ありて、

聖上時常に誇獎せり。另に一曲を製して、其上に掩ひ出でんと思欲し、正に(一四) 推敲に在りしに、昨

夜忽然夢に月宮に入りて、桂樹の下に、仙女數人あり、素衣紅裳にして、樂を奏すること甚だ美な

【一〇】 擺設。取り揃へること。

【一一】 拂ひ。塵を拂ふこと。

【一二】 素削。白紙のこと、紙が

白く光ることをいふ。

【一三】 香は墨華に浮ぶ。墨を磨

ると、香氣の紛然たる意。

【一四】 荷露灑ぐ。荷の葉が風に

揺れて、露のこぼれること。

【一五】 參差。不齊の貌、簾影が

波にゆられて、長くなつたり、

短くなつたりすること。

【一六】 珮環。帶にさげたる珠

玉。風定まるとは、止まりし

こと。

【一七】 月華。月宮をいふ。

【一八】 翻す。翻譯の意、うつす

こと。

【一九】 鬪畫。幾度か書きなほす

【二〇】 遠山。黛をいふ、西京雜

記に「卓文君姣好、眉色如望

遠山」といひ、又飛燕外傳に

「爲薄眉、號遠山黛」とあり

【二一】 一朶。一枝に同じ。

【二二】 紅酥。臙脂のこと。支那

の婦人は頬にも臙脂を塗るな

り。西京雜記に「臉際常若芙

蓉」とは、紅色を呈するをい

ふ。飛燕外傳にも「施小朱、

號慵來粧」といへり。

【二三】 驚鴻。舞の名。梅妃之を

善くす。驚鴻は元來、美人の

體態の輕盈なるに喩ふ。曹植

の洛神賦に「翩若驚鴻、宛若

游龍」とあり。

【二四】 推敲。考案すること。

るを見、醒め來つて追憶すれば、(一五) 音節宛然たり。此に因つて永新に分

付けて、荷亭を收拾けしめ、只細かに宮商を配して、新曲を譜し成さん

と待す。

「老旦」 娘娘に啓しあぐ、紙墨筆硯、已に安排して齊備了せり。

「旦」 爾念奴と、一同に此に在りて伺候せよ。

「老旦・貼、應じて、(一六) 扇を打ち、香を添ふるを作す介」旦、譜を製す

るを作す介」

「正宮過曲」「刷子帶芙蓉」「刷子序」 荷氣は窗紗に滿ち。(一七) 鸞牋漫に伸べ。

「(一八) 犀管軽く拏り。他の月裏の清音を譜して。細かに我が心上の(一九) 靈芽を

吐かんとす。

この聲調は月宮より出づと雖も、其の間(二〇) 轉移過度、(二一) 細微曲折の處

は、須索らく自ら細審を加へて、

「(二二) 安插すべし。一字字、(二三) 調停して法の如くなるを要し。一段段、須ら

く(二四) 融和して化に入るべし。

この幾聲は尙ほ(二五) 調勻を欠く。

【一五】 音節宛然。音節をありの

ままに記憶せること。

【一六】 扇を打ち。あぶぐこと。

【一七】 鸞牋。美しき紙をいふ。

【一八】 犀管。犀の軸の筆のこ

と。

【一九】 靈芽。芽の字、韻なり、靈

なる心を寫し出さんとの意。

【二〇】 轉移過度。うつりかはる

點。

【二一】 細微曲折。細かきふしま

はしの處。

【二二】 安插。おだやかに、譜に

入れること。

【二三】 調停。安插に同じ。

【二四】 融和して化に入る。少し

も無理がなく、神化と一致す

る意。

【二五】 調勻。調子のよく整ふこ

と。

〔三六〕 拍傘はくさん 怎いかんぞ下くださん。

〔内うちにて、鶯うぐいすの啼なくを作なし、旦たん、筆ふでを執とりて聽きく介しやま〕

呀やあ、妙めう呵なるか

〔改あらたむるを作なす介しやま〕

〔玉芙蓉ぎよくふよう〕 宮鶯きやうあうの數聲すうせいを聽きけば。恰あたも好よし 〔三七〕 紅牙こうがに應かうず。

〔筆ふでを擱おく介しやま〕

譜ふ已すてに製つくり完をる。永新えいしん是これ什麼いかな時なる候ときぞ。

〔老旦らうたん〕 晌午ひるなり。

〔旦たん〕 萬歲爺まんさいやは曾朝そうてうより退しりぞきたまふ可べきや。

〔老旦らうたん〕 尙なほ未いまだし。

〔旦たん〕 永新えいしん、且しからく我われに隨したがつて、衣ころもを更かへに去ゆ來かん。念奴ねんとは此こに在あり

て候し候し、萬歲爺まんさいやの到いたる時ときは、即いそいで忙い通報せせよ。

〔貼でか〕 領かしこ 旨まり。

〔旦たん〕 好よし晚鏡ばんきやうに憑よりて、〔三六〕 蛾翠がすゐを増まし。漫そぞろに香紗かうさを試こころみて、〔三七〕 蝶衣てふいに換かふ。

〔老旦らうたん〕 引ひき、隨したがへて下くだる〔生せい、行ゆき上のる〕

〔漁燈映芙蓉ぎよくとうえいふよう〕〔山漁燈さんぎよくとう〕 千官散せんくわんさんして。〔四〇〕 朝初てうはじめて罷やむ。〔四一〕 玉人ぎよくじんに對たいして。

長畫閑話ちやうちやんわせんと擬なす。

寡人方纔宮くわじんましかたきやうに回かへれば、聽き説くならく、妃子ひしは荷亭かていの上うへに在ありと。此これに因よつ

て一徑ひとすぢに前すすみ來きたる。

流水りうすいに依よりて。〔四二〕 胡麻こまを覓もとめんと待ほし。〔四三〕 銀塘ぎんだうの路みちをば踏ふむ。

〔到いたるを作なす介しやま〕〔貼でか〕 見みゆる介しやま〕

呀やあ、萬歲爺まんさいや到いたれり。

〔生せい〕 念奴ねんと、爾なんぢの娘ぢやうぢやう娘ぢやうぢやうは何處いづこに在ありて閒かんに歡たの要しめる。怎いかんぞ香几かうきに〔四四〕

堆うたかく、筆硯ひつげんの交加かうかする有あるや。

〔貼でか〕 娘ぢやうぢやう娘ぢやうぢやうは此こに在ありて譜ふを製せいし、方纔いましがた衣ころもを更かへに去ゆけり。

〔生せい〕 妃子ひし呵あ、美人びじんの〔四五〕 韻事ゐんじは、都すて爾なんぢに占しめ盡つくされたり。但ただ知しらず

甚なんの曲譜きまぐふを製せいするや。待まつ、寡人くわじん看み來きたらん。

〔坐ざして翻ひらし看みる介しやま〕

消詳しょうじやうに。頭はじめより觀みれば。妙めうなるかな、只ただ這この〔四六〕 錦字きんじ焚けい燄けいとして、〔四七〕 銀鈎ぎんこう

小せうに。更さらに〔四八〕 羽うを度はかり宮きやうを換かへ。半米はんしの差さ没なし。

【三六】 拍傘。音節のこみあふ處。
【三七】 紅牙。牙板の紅色なるもの、女子の用ふる所、拍つて樂を節するものなり。
【三八】 蛾翠。翠娥に同じ。
【三九】 蝶衣。蝶の模様ある、紗衣に換易へる意。

【四〇】 朝。朝政をいふ。
【四一】 玉人。貴妃をいふ。
【四二】 胡麻。仙女の意、貴妃をいふ。劉晨阮肇薬を採りて、天台に遊び、桃花の溪に沿いて行く、上流より胡麻飯の流れるを見、往いて仙女に遇ひし故事。
【四三】 銀塘。前の故事による、清き流に沿へる塘、宮中の廊下に喩ふ。
【四四】 堆かく。几の上に一杯、筆や硯が出て居ること。
【四五】 韻事。すまじ、風流韻事をいふ。
【四六】 錦字焚燄。曲譜の工尺をいふ。
【四七】 銀鈎。工尺の形容なり。
【四八】 羽を度り宮を換へ。譜を製くること。

好だ奇怪なるかな。この譜は寡人すら也だ知らず。細かに音節を按ずるに、是れ人間の有る所ならず。

天より下りしに似たり。果して曲高くして、和する寡し。

妃子、爾の娉婷絶世なるは、説ふを要ひず。只この一點の靈心、誰有つて、爾に及び得來ん。

〔玉芙蓉〕 恁き聰明は。也た上陽の花を壓倒するに堪へたり。

〔旦〕 妝を換へ、老旦を引いて上る

〔普天上芙蓉〕 普天樂 輕妝に換へ。幽雅多し。生綃を試み。瀟灑を添ふ。

〔生に見る介〕

臣妾見駕す。

〔生〕 扶くる介

妃子、坐せよ。

〔坐する介〕

〔生〕 妃子、爾の晩妝新に試むるを見るに、媚態益増し。

〔四九〕 曲高く云云。曲が高尙にして、伴奏するもの少き意。

宋玉の「對楚王問」に「客有歌於郢中者、其始曰下里巴人、國中屬而和者數千人、其爲陽阿薳露、國中屬而和者數百人、其爲陽春白雪、國中屬而和者、不過數十人、引商刻羽、雜以流徵、國中屬而和者、不過數人而已、是其曲彌高、其和彌寡」とあり。

〔五〇〕 上陽の宮。上陽は宮の名、冷宮なり、梅妃を指す。

〔五一〕 生綃。うすきぬの衣。

〔五二〕 瀟灑。さつぱりの意。

〔五三〕 扶く。跪きし體を、扶け起すこと。

風を迎へて、裊裊たる楊枝に似。宛として波を濺いで、濯濯たる蓮花のごとし。芳蘭一朶斜に。

雲鬢を壓し。越、龐兒の風流煞なるを顯はし得たり。

〔旦〕 陛下、今日の退朝は、何に因つて恁く晩きや。

〔生〕 只靈武の太守、員缺け、地方緊要なるをもつて、廷臣と議すること半日なるも、其人を得難く、朕特に郭子儀を擢んで、此の缺に補授せり。此に因つて退朝すること遅し。

〔旦〕 妾陛下を候てども、至らざれば、獨り荷亭に坐して。

風來りて一たび、明紗を弄するを愛し。閒に新聲を譜して雅を奏するを學ぶ。

〔玉芙蓉〕 怕くは、他が驚鴻を舞ひ。曲終つて、滿座光華有るに輸けん

〔生〕 寡人適ま此譜を見るに、眞に乃ち千古の奇音にして、驚鴻何ぞ道

ふに足らんや。

〔旦〕 妾、臆見に憑りて、草草創成せり。其中の錯誤は、還た陛下の更

定したまはんことを望む。

〔五四〕 裊裊。なよなよと風に靡く貌。

〔五五〕 濯濯。水に洗はるる貌。

〔五六〕 芳蘭一朶。蘭をかざすこと。

〔五七〕 風流煞。煞は殺に同じ、語を強むる辭。

〔五八〕 員缺け。缺員の意。この處、前の疑識の句に應ず。郭子儀は唐室再造の人物なれば、繁忙の中に挿入するを忘れず、細心の所なり。

〔五九〕 明紗を弄す。あかるき窓かげの風が吹くこと。

〔六〇〕 他。梅妃を指す。

〔六一〕 滿座光華有り。光彩を座中に放つこと。

〔六二〕 臆見。うすおぼえの意。

〔生〕再び妃子と同一細細に〔三〕點勘一番せん。

〔老旦・貼〕暗に下る〔一〕生・旦、並び坐して譜を翻する介〔二〕

〔朱奴折芙蓉〕〔朱奴折〕〔四〕長袖に倚りて。香肩並亞び。新譜を翻して。〔五〕

玉織同に把る。

〔生〕妃子、

儻の似き絶調の佳人は、世に眞に寡し。〔六〕破綻を覚めんと要するも、並して毫髪もなし。

再び妃子に問はん、此譜は何と名づくるや。

〔旦〕妾昨夜、夢に月宮に入り、一群の仙女の樂を奏するに、盡く〔七〕

霓裳羽衣を著けたるを見て、意ふに此の四字を取りて、以て此曲に名づ

けんと欲す。

〔生〕好し箇の霓裳羽衣は、

虚假に非ず。果して〔八〕天香桂花に合伴ふ。

〔旦〕看るを作す介〔九〕

〔玉芙蓉〕仙姿を覩れば。想ふに前身は原是れ月中の〔一〇〕娃ならん。

〔三〕 點勘。調査すること。

〔四〕 長袖に倚る。貴妃によりそふこと。香肩。貴妃の肩をいふ。

〔五〕 玉織。美人の指をいふ。

〔六〕 破綻。誤謬の意。

〔七〕 霓裳羽衣。羽衣は天人のはごろもをいふ。

〔八〕 天香桂花。月中の桂子をいふ。

〔九〕 娃。美人のこと。貴妃は原來月中の嫦娥、その人ならんとの意。

此の譜は即ち當に宣して梨園に〔一〇〕付すべきも、但だ俗手俗工の、未だ其妙を諳せざるを恐る。朕永新念奴をして、先づ圖譜を抄さしめ、妃子の親自しく指授し、然る後〔一一〕李龜年等に傳與へて、梨園の子弟に教習せしめんと欲す。却て是好からずや。

〔旦〕領 旨。

〔生〕旦を攜へて起つ介〔一二〕

天已に薄暮なれば、宮に進み去來なん。

〔尾聲〕晚風吹いて。新月挂り。

〔旦〕正に一縷の涼は〔一三〕鳳榻に生ず。

〔生〕妃子、

欄看、這の池上の鴛鴦は、早く雙び眠り。〔一四〕蒂を並ぶるの花。

〔生〕芙蓉も及ず、美人の妝。〔一五〕王昌齡

〔旦〕楊柳風多くして、水殿涼かなり。〔一六〕劉長卿

〔老旦〕花下偶然、一曲を歌ふ。〔一七〕曹唐

〔合〕〔一八〕法部を傳呼して、霓裳を按せしむ。〔一九〕王建

〔一〇〕 付す。申しつける意。

〔一一〕 李龜年。梨園の樂長なり。

〔一二〕 鳳榻。天子の御座をいふ。

〔一三〕 蒂を並ぶる花。蒂は蒂に同じ、くきなり、蓮の蒂を並べて開くこと、夫婦に喩ふ。

〔一四〕 鴛鴦の雙眠に對して、花の並蒂といふべきを押韻の爲、轉倒して、並蒂花となせしなり。

〔一五〕 法部。樂部に同じ、前の法曲の條參照すべし。

第十三齣 權 関

〔副淨、祇從を引いて上る〕

〔雙調引子〕秋蕊香 狼子野心、料り難し。

看よ、跋扈漸く咆哮を肆にするを。勢を挾んで、

〔三〕恩に辜くこと、更に惱むに堪へたり。

索に 忠言を假りて、入り告ぐべし。

下官、楊國忠は、外は右相の尊に憑り、内は

貴妃の寵を恃めば、滿朝の文武、誰か 趨承

せざらん。獨り安祿山這廝あり、外面は假に

癡愚を作し、肚裏には暗に狡詐を藏す。知ら

ず、聖上甚に因つて他を愛し、王爵に加封し

たまへるや。他れ竟に下官が救命の恩を忘れ、

事に遇へば欺き凌ぎ、言を出せば 挺撞す。好生恨む可し。前日曾て聖上に奏して説へらく、他れ

〔一〕權関、楊國忠と安祿山と、權力を争ふ場。

〔二〕狼子野心。安祿山の非望を企つることをいふ。左傳宣公四年に「諺曰、狼子野心、是乃狼也、其可畜乎」と。又同書昭公二十八年に「叔向母謂三伯石曰、是狼之聲也、狼子野心」とあり。豺狼の子は、その心常に山野に在りて、馴れ服すべからず、之を養へば、必ず人を害するをいふ。轉じて非望を企つることに用ふ。

〔三〕恩に辜く。前日楊國忠、路を納れて安祿山の罪を救せしこと、第三齣、賄權に詳なり。

〔四〕惱む。腹立たしき意。

〔五〕忠言を假りて。佞人の君に告ぐる、未嘗て忠言なくんばあらず、但し意盡惑に在り、故に黑白を混淆して、反て亂をかますこと多し。

〔六〕趨承。御機嫌を伺ふこと。

〔七〕挺撞す。衝突すること。

狼子野心、面に反相あり、恐らくは日後禍を醸さんことを防ぎたまへと。怎奈を未だ聽從せられざるや。今日朝に進み、須索らく機を相て再び奏すべし。必ず他を黜退かしめて、方に吾が意を快うせんと要す。此に來れば已是に朝門なり、左右廻避けよ。

〔從、下る〕〔内にて、道に喝する介〕

〔玉井蓮後〕 寵は君の心を固め。暗中に 計狡を包藏す。

左右廻避けよ。

〔從、下る〕〔淨、副淨を見る介〕

請了。

〔副淨、笑ふ介〕

哦、原來是、安祿山。

〔淨〕 老楊、爾ち我を叫ぶは怎麼。

〔副淨〕 這是は 九重の禁地なるに、爾怎ぞ敢て此に在つて大聲に呵殿するや。

〔淨〕 勢を作す介。

〔八〕 道に喝す。人拂ひすること。

〔九〕 呵殿の聲。喝道の叫をいふ。

〔一〇〕 計狡。狡計に同じ。

〔一一〕 老楊。侮蔑の意。

〔一二〕 九重の禁地。宮中をいふ。

〔一三〕 勢を作す。伸びあがりて威張る様子になすこと。

老楊、爾我を見よ。御衣を脱下して親しく賜著はり、(四)龍馬を進來めて毎に騎らしめられ、常て密旨を承けて朝に趨くこと數ばなり、獨り(五)邊機を奏して殿を出づること遅し。我は郡王と做る、便ち這麼一聲兒呵殿するも、也妨げず。爾ち右相の比似きは、還ほ早し。

〔副淨、冷笑する介〕

好好、(六)箇も妨げず。安祿山、我れ且つ爾に問はん、這般の(七)大模大様は、是れ幾時より起れるぞ。

〔淨〕 下官は從來此の如し。

〔副淨〕 祿山、爾も也還該に、自ら去想一想るべし。

〔淨〕 甚麼を想ふや。

〔副淨〕 爾只想へ當日、來つて我を見し時節、可是這個模様なりしか。

〔淨〕 (八)彼も一時、此も一時、他を説つて怎んせん。

〔副淨〕 唉、安祿山、

〔仙呂入雙調過曲〕風入松 爾は本是 刀頭の活鬼。罪逃れ難し。那の時節、階前に (九)長跪いて (一〇)哀告す。我 (一一)封章入り奏して、(一二)機關巧に。

〔淨〕 爾の身軀をば (一三)全保せり。

〔淨〕 罪を赦し、官を復せるは、聖恩より出づ。爾と 何ぞ涉はらんや。

〔副淨〕 好くも (一四)倒説得 (一五)乾淨。

只太だ良心をば味了し。恩と義と。 (一六)水萍の飄るに付與す。

〔淨〕 唉、楊國忠、爾曉得る可し。

〔前腔〕 世間の榮落は、(一七)偶ま相逢ふ。勢に誇著りて群僚を壓するを休めよ。

爾は我が機を失へるの罪を道ふも、可也た (一八)南詔の事を記得するか。

胡盧提。敗を掩ひ、(一九)功をば冒し。怪しむ、(二〇)浮雲の天表を蔽遮ふを、

〔副淨〕 聖明上に在り、誰か敢て朦蔽せん。這是君を誘るならずや。

〔淨〕 還ほ朦蔽せずと説ふか。

爾を賣り官を鬻ぐこと多少ぞ。財貨を貪つて、(二一)脂膏を竭くす。

〔副淨〕 住了よ、爾は官を賣り爵を鬻ぐと道ふも、只問ふ爾の富貴は、

是れ那裏より來れるものぞ。

〔冷笑する介〕

〔四〕 龍馬。外國より進上せる名馬をいふ。

〔五〕 邊機。外國の事情をいふ。

〔六〕 箇も妨げず。それも苦しからずの意。

〔七〕 大模大様。大だ的の模様、大袈裟の様子をすること。

〔八〕 彼も一時、此も一時。昔は昔、今は今、昔のことを、今言うてどうするぞといふ意。

〔九〕 刀頭の活鬼。俎上の魚といふ如し、當然頭を刳れらるべき、活きたる幽靈なりとの意。

〔一〇〕 長跪。丁寧に跪き拜すること。

〔一一〕 哀告。哀を告ぐ、救を乞ふこと。

〔一二〕 封章。一封の上奏文をいふこと。

〔一三〕 機關巧に。うまく取り計らひしこと。

〔一四〕 全保。保全に同じ。

〔一五〕 何ぞ涉はらんや。何の關係なき意。

〔一六〕 倒。かへつてと訓す。

〔一七〕 乾淨。きれい、さつぱりの意。

〔一八〕 水萍の飄る。水草の漂ふにまかせて願みず、恩と義とを水に流す意。

〔一九〕 偶ま相逢ふ。榮枯盛衰は世のならひの意。

〔二〇〕 南詔。國名、その先本六詔あり、蒙舍長も南なり、之を南詔といふ、五詔皆并さる、唐の開元二十六年蒙歸義を册して、雲南王となす、天寶九年、遂に雲南の地を取り、僭して大蒙と號し、羊苴咩城に治す、即ち今の雲南大理縣なり、後國號を南詔と改む、楊

〔淨〕也止だ這の〔一〕椿のみに非ず。
若し備の〔三〕威里を待みて。姦狡を施し。國を悞るの罪を論ずれば。千條有り。

〔副淨〕〔三〕誣讒の語を把つて。虚に憑つて造るを休得よ。

〔淨を扯ふる介〕

我備と前に去いて〔六〕當朝に面せん。

〔淨〕誰か備を怕れん。前に去ん、前に去ん。

〔同上〕前に去つて朝に進み、俯伏するを作す介

〔副淨〕臣楊國忠、謹んで奏す。

〔前腔〕〔本調〕〔三〕祿山異志、腹に刀を藏し。外は癡愚の容貌を作す。奸は石勒の東門に倚つて嘯くに同じ。他は〔四〕儲君を拜せず。公然〔四〕桀暴。

この無禮は、聖朝に容れ難し。

望むらくは吾が皇、立ろに罷斥を賜ひて。

兇惡を除き、早く禍の根苗を絶たれんことを。

〔淨、伏する介〕

國忠邊功を立てんと欲し、南詔を伐たんことを請ひ、却て大に敗れる。

〔三〕胡盧提。元代の俗語、糊塗に同じ、いかげんにごまかすこと。

〔三〕功をば冒し。敗をかくして功となす意。

〔三〕浮雲の天表を蔽遮す。君の聰明を蔽ふ意。

〔三〕脂膏。民の膏血をいふ。

〔三〕一椿。一件に同じ。

〔三〕威里。外威のこと。

〔三七〕誣讒の語云云。事實もなきに、讒誣の言を、勝手に造ることなかれの意。

〔三六〕當朝。今上に同じ。

〔三元〕祿山異志云云。楊國忠は専ら祿山の反心あるをいふ、明皇の耳に入り難し。

〔四〇〕石勒。後趙の主、石勒は羯人なり、西晉の末、洛陽に至り、上東門に倚りて長嘯す、

臣安祿山、謹んで奏す。

〔前腔〕〔四〕念ふに微臣、謬つて主恩を荷ふこと高く。遂に〔四〕嫌をして權要に生せしむ。愚蒙〔四〕觸忤、保ち難きを知る。

〔泣く介〕

陛下呵、

怕るらくは孤立して、終に他の〔四〕圈套に落ちんことを。

微臣呵、

寸心の赤きは。只吾が皇の鑒照あるのみ。〔四〕鎮に出でて、〔四〕犬馬の微勞を效すを容せ。

〔内〕聖旨に道來ふ、楊國忠・安祿山は、互に相訶き奏す。將相和せずんば、以て朝を同じくして共に理め難し。特に安祿山に命じて、〔五〕范陽の節度使と爲し、期を剋めて鎮に赴かしむ。〔五〕恩を謝せよ。

〔淨・副淨〕萬歲。

〔起つ介〕〔淨・副淨に向ひ〕手を拱する介

老丞相、下官は今日去了らん。備ち再び我が大模大様を怪むを休めよ。

王衍その異志あるを識る、長嘯は歎息の意、天下の亂るるを知りて、竊に天下を伺ふの意あるなり。

〔四〕儲君。太子のこと。

〔四〕桀暴。兇暴なること。

〔四〕念ふに微臣云云。安祿山は憐を乞ひ、且つ天子に同情する意を述べ、故に明皇もつかりその手に乗せられて外に出づるを許す、是れ祿山の奸、遠く楊國忠の及ぶ所に非ざるなり。

〔四〕嫌。嫌疑の意、それまるること。

〔四〕觸忤。天子の御意にさからふこと。

〔四〕保ち難き。一身の安を謀り難き意。

〔四〕圈套。わなのこと、楊國忠の術中に陥ること。

〔四〕鎮に出で。地方の鎮臺に赴きて、司令官となること。

朝門の内は。一に爾が〔五〕牙爪を張るに任す。

我は去つて幕府を開き。〔四〕自ら逍遙せん。

〔副淨〕冷笑する介〔淨〕下らんと欲し、復

轉じて副淨に向ふ介〔淨〕

還ほ一句の話兒あり、今日下官鎮に出づるは、

想ふに也。回天の力に仗りて、相提調せ

り。

〔五七〕「手を擧ぐる介」

請了。

我れ且に冷眼を將て伊曹を看んとす。

〔下る〕〔副淨〕淨の下るを看る介〔淨〕

呀、這等き事あるか。

〔前腔〕本調 一腔の塊壘、怎生ぞ消えん。我れ他が威風をば抹し倒さんと待せしに。誰か知らん、

反つて節鉞を分つて、榮耀を添へんとは。この話靶は、人をして嘲笑せしむ。

咳、但願はくは、祿山〔五八〕此去、事を做出來さば、

〔兕〕犬馬の微勞。國家の爲に力を盡すこと。

〔五〇〕范陽の節度使。唐の初、邊境に十節度使あり、范陽の節度使は幽州に治し、奚契丹を制す、今の北京に在り。

〔五一〕恩を謝せよ。「謝恩」は辭令の尾に用ふる形式なり。

〔五二〕手を拱す。揖禮に同じ。

〔五三〕牙爪を張る。勢力を振ふる意。

〔五四〕自ら逍遙せん。自由にする意。

〔五〕回天の力。廻天に同じ、第三齣賄權に出づ、君の心を挽回する意。ここは楊國忠が明皇を動かした御蔭で、范陽の節度使に拔擢せられたといふ意、反説なり。

〔五六〕提調。轉任のこと。

〔五七〕手を擧ぐ。武人の挨拶なり。

〔五八〕此去。此一去到同じ、此行の意。

〔五九〕我が忠言。齣首に應ず。

方に〔五九〕我が忠言の最も早きを信せん。

聖上、聖上。

此際に到つて、可也た今朝を悔いん。

邪を去るは當に斷すべし、狐疑する勿れ。〔周曇〕

禍は〔六〇〕蕭牆に〔六一〕稔つて、竟に知らず。〔儲嗣宗〕

壯氣未だ平かならず、空しく咄咄。〔徐鉉〕

甘言狡計、嬌癡を奈かんせん。〔鄭嗣〕

〔六〇〕蕭牆。家中の意、禍は近き處より起ること。論語に「吾恐季孫之愛、不在蕭牆之内也」とあり。

〔六一〕稔。熟すること。

〔六二〕咄咄。驚怪の聲、歎息の意なり。晉の殷浩黜けられ、終日、咄咄怪事の四字を空に書せりと云ふ。

第十四齣 偷曲

〔老旦・貼〕譜を攜へて上る

〔仙呂過曲〕〔入聲甘州〕〔老旦〕霓裳の譜定まり。

〔貼・合〕綺窗深き處に向つて。秘本を翻謄す。香喉玉口。親しく絶調をば教へ成す。

〔老旦〕奴家は永新。

〔貼〕奴家は念奴。

〔老旦〕娘の霓裳の新譜を製就りしより、我れ二人親しく教授を蒙る。今駕華清宮に幸し、即日此曲を奏せんと要し、我れ二人に命じて、朝元閣上に在りて、譜を傳へて李龜年に與へ、連夜梨園の子弟に教

演へしむ。

〔貼〕散序は俱に已に傳習したれば、今日は拍序を傳ふべし。

〔老旦〕備看、月明水の如く、正に演奏するに好し。我備と曲譜を攜

〔二〕偷曲。李暮が霓裳羽衣の曲を偷み聴く場。

〔三〕合。老旦と合唱すること、前にもあり。

〔四〕翻謄す。譜をうつすこと。

〔五〕香喉玉口。美しき聲、貴妃親ら教授せしこと。

〔六〕朝元閣。閣の名、驪山に在り。

〔七〕梨園子弟に教演す。第十二齣、製譜の末に應ず。

〔八〕散序。曲調の名、後に詳なり。

〔九〕拍序。同上。

へて先づ閣中に到ること便し。

〔行く介〕

〔合〕涼蟾正に高閣に當つて升り。簾は薰風に捲き。水晶に映じて、高く清し。恰も廣寒宮の仙樂の聲に稱ふ。

〔下る〕末 蒼髯、李龜年に扮して上る

〔道宮近詞〕〔魚兒賺〕樂部に舊と名聞え。班首新に推されて、獨り老成。

早暮 趨承。上直更番、内廷に入る。

自家は李龜年とは是れなり。向きに伶官と作り、萬歲爺の點を蒙り

て、梨園の班首と爲る。今貴妃娘娘の霓裳の新曲あり、旨を奉じ、永新

念奴をして、譜を傳へて出で來り、朝元閣上に在りて教演し、立どころ

に、供奉を等たしむ。只得連夜趨習す。不免衆兄弟毎を喚び齊へて、

同に去ん。兄弟每何里ぞ。

〔副淨、馬仙期に扮して上る〕

仙期の方響、鬼神驚く。

〔外、雷海青に扮して上る〕

〔九〕涼蟾。月をいふ。

〔一〇〕水晶。水晶の簾をいふ、月光が薰風に捲がるる水晶の簾に映じて、高樓は、恰も廣寒宮を現出せるに似たりといふ意。

〔一一〕蒼髯。白髯に同じ。

〔一二〕班首。部長の意。

〔一三〕趨承。供奉の意。

〔一四〕上直更番。更番に宿直すること。

〔一五〕點。點呼、指命の意。

〔一六〕趨習。大急ぎで習ふこと。

〔一七〕方響。樂器の名、長方形の銅片十六枚を以て、共に一架に懸け、小銅鐘を以て、之を撃つ、その聲板の厚薄によりて、清濁同じからず。

〔二〇〕鐵撥争つて推す、雷海青。

〔二一〕淨、白鬚、賀懷智に扮して上る。

賀老の琵琶、〔二二〕場屋を擅にす。

〔二三〕丑、黄幡綽に扮して上る。

黄家の幡綽、〔二四〕板尤も精し。

〔二五〕同に末を見る介。

李師父、拜揖。

〔末〕請了、列位呵。

君王の命、霓裳を演ずるを催がして、〔二六〕停まらしめず。

那の永新・念奴呵、

兩の娉婷。〔二七〕紅牙小譜をば、攜へて端正。早くも〔二八〕朝元に向つて、月明

を待つ。

〔衆〕此の如くんば、我毎就ち去くこと便し。

〔末〕請ふ同に行かん。

〔同〕同に行く介。

〔二八〕鐵撥。鐵製の琵琶のばちをいふ、第二十八齣、罵賊の條参照。

〔二九〕賀老の琵琶。樂府雜錄に、「開元中、賀懷智樂器、以石爲槽、鷓鴣筋作之、鐵撥彈之」とあり。

〔三〇〕場屋を擅にす。獨舞臺の意。

〔三一〕板。拍板のこと、曲を奏する時、以て節となすものなり。

〔三二〕停まらしめず。休む暇なく、絶えず催促せらるること。

〔三三〕紅牙小譜。牙板と音譜と。

〔三四〕朝元に向つて。朝元閣に在つての意。

〔三五〕遅遅たる宮漏を趁へば、夜涼生ず。新腔をば〔三六〕敲訂す。新腔を敲訂す。

〔同〕同に下る。〔小生〕巾服し李暮に扮して上る。

〔仙呂過曲〕〔解三醒犯〕〔解三醒〕〔二七〕風魔を逞うす、少年の逸興。曲中の妙理を借りて、情を陶ほす。

傳聞ならく、今夜蓬萊の境。妙譜を翻して、新聲を奏す。

小生は李暮とは、是れなり。本貫は江南にて、京國に遨遊ぶ。小より音

律を諳通じ、久しく鐵笛を以て、名を擅にす。近ごろ聞く、宮中にて

新に一曲を製し、名づけて霓裳羽衣と曰ひ、樂工李龜年等、毎夜朝元閣

中に在りて演習すと。小生此の新聲を慕ふも、其秘譜を得るに従無し。

打聽的、那の閨子は、恰も好し、宮牆に臨著み、聲外に聞ゆと。不免鐵

笛を袖にして、驪山に到來り、此の月明の晝の如きを趁ひ、竊み聽くこ

と一回せん。一路行き來れば、果然好き景致なり。

〔行く介〕

林は暮靄收まりて、天氣清く。山は寒空に入りて、〔三〇〕月影横はる。眞に佳景なり。

〔入聲甘州〕宛がら身は晝裏より遊行するがごとし。

〔場〕場上に紅帷牆を設け、内に一閣を搭つるを作す介。

〔三五〕遅遅たる宮漏。晝の永き意。

〔三六〕敲訂。おさらひの意。

〔三七〕巾服。通常服のこと、巾は頭巾をいふ。

〔三八〕風魔を逞うす。風流三昧の意。

〔三九〕蓬萊の境。宮中をいふ。

〔四〇〕月影。一本月影に作る。

〔小生〕 説話の間に、早くも宮墻の下に來到れり。

〔道宮調近詞〕〔應時明近〕 只だ見る 五雲の中。宮闕の影。窈窕玲瓏として、月明に映ず。光り輝きて、看れども定まらず。光り輝きて、看れども定まらず。想ふに潜に御氣通じ。處處の仙樓。闌干の畔、玉人の間に凭る有らん。

聞く那の朝元閣は、禁苑の西首に在りと。我れ且らく 紅墻を繞り 逶迤として行去かん。

〔行く介〕 前腔 花陰の下。御路平かに。緊く紅墻に傍ひ、款款として行く。

〔望む介〕 只だ這の垂楊の影裏に、一座の高樓の、牆頭に露出せるは、想ふに就ち是ならん。

眸を凝らして、重ねて細省る。眸を凝らして、重ねて細省れば。只見る、畫簾の 縹緲として。文窗の掩ひ映するを。

〔指す介〕 兀的、上に紅燈あるならずや。

- 【三】 五雲。五色の雲をいふ。
- 【三】 窈窕玲瓏。宮闕の美しきこと。長恨歌に「樓閣玲瓏五雲起」とあり。
- 【三】 看れども定まらず。ちらちらすること。
- 【三】 御氣。仙氣をいふ。
- 【三】 玉人。宮人をいふ。
- 【三】 紅墻。御所の屏をいふ。
- 【三】 逶迤。まがること。
- 【三】 款款。ゆるゆるの意。
- 【三】 縹緲。高遠の貌。
- 【四】 文窗。彩色したる窓のこと。

〔老旦・貼〕 牆内に在りて、閣に上る介。末・衆、内に在りて云ふ

今日は該に拍序を演ずべし。大家先づ散序をば、頭より演習すること一番せよ。

〔小生〕 爾看、上面は燈光隱隠として、人聲有るに似たり。一定、是れ這裏ならん。我れ且らく 潜み聴くこと一回せん。

〔潜に立つて聴くを作す介〕 〔雙赤子〕 悄悄冥冥。牆陰に竊み聴く。

〔内にて、樂を作す介〕 小生、袖より笛を出す作す介。不免、笛を取り出し來つて、聲に倚りて之に和し、就ち音節をば、細細に記明すぞ便からん。

聽いて月高く、初更の後に到れば。果然 絃索、齊しく鳴る。恰も喜ぶ、禁垣の夜深くして人静かなるを。淨瑠璃齊しく應ず。この數聲は、恍然として心に領す。

〔内にて、〕 細十番し、小生、笛を吹いて和する介。樂止み、老旦・貼、内に在り、閣上にて、後曲を唱へ、小生、笛を吹いて合はす介。

〔畫眉兒〕 老旦・貼。驪珠散して迷り。拍を入れて 初めて驚く。

- 【四】 悄悄冥冥。そつとの意。
- 【四】 絃索。琴瑟琵琶の類をいふ。
- 【四】 淨瑠璃。奏樂の聲をいふ。
- 【四】 恍然。うつとりと聽きほれること。
- 【四】 心に領す。よく覚えて居ること。
- 【四】 細十番。細は粗の反、曲調の名。
- 【四】 驪珠散して迷る。玉をころ

せざるならん。

人散じて曲終り。紅樓靜に。半墻の殘月、花影に搖ぐ。

〔六〕河。銀河のこと。斗。北斗七星なり、北極星を中心として轉ず、夜の更くるをいふ。

〔七〕參。星の名、前に出づ。

〔八〕高雲に轉ず。歌の聲が雲外に徹すること。

〔九〕斗轉じ。參横はる。不免回り去らん。

〔一〇〕尾聲。却つて身を廻へして。歸徑を尋ぬ。只だ聽得く、玉河流水の韻幽清にして。猶ほ霓裳の。嫋嫋たる聲に似たるを。

〔一一〕天に倚る樓殿、月分明なり。(杜牧) 歌は。高雲に轉じて、夜更に清し。(趙嘏)

〔一二〕偷み得て新に翻す、數般の曲。(元稹) 酒樓笛を吹いて、新聲あり。(張祜)

第十五齣 進果

〔末、使臣に扮し、竿を持ち、荔枝の籃を挑び、馬に鞭うつて急ぎ上るを作す〕

〔過曲〕〔柳穿魚〕一身萬里、征鞍に跨り。荔枝を進むるが爲めに、艱難を受く。上命遣差、己に

由らず。算へ來れば、名利は怎んぞ。閒なるに如かん。巴得箇と。長安に到りて。只貴妃の看一

るを圖る。

自家は。西川道の使臣なるが、貴妃楊娘娘の

鮮の荔枝を愛吃するに因て、敕を奉じて、

涪州より年年進貢するに、天氣又熱く、路途

又遠き爲に、只得辛勤を憚らず、馬を飛ばし

て前み去る。

〔馬に鞭ち、重ねて「巴得箇」の三句を唱ひ

て、跑るを作して、下る〕〔副淨、使臣に扮し荔枝の籃を持ち、馬に鞭うつて、急ぎ上る〕

〔撼動山〕 海南の荔枝、味尤も甘し。楊娘娘、偏に喜び啖ふ。採る時連葉包緘し。封じて小竹

〔一〕進果。荔枝を献上する場。

〔二〕荔枝。大ききかやの果の如く、味は甚美なり、南海に産す、今は六月頃、その生果を東京にて味ふを得べし。

〔三〕上命遣差。上の御用に、自分のままならぬこと。

〔四〕閒なるに如かん。役人な

どになるものでなしと、歎息する意。

〔五〕巴得箇。巴は俗語、盼望の意、待ち遠くなること。

〔六〕西川道。今の四川省。

〔七〕涪州。今四川重慶府に屬し、大江の南に在り。

〔八〕海南。道の名、秦の南海郡の地、今廣東省のこと。

籃に貯へ。獻じ來つて、曉夜驂を停めず。一路の裏、(一〇)耽れんことを恐れ。(二)一站を望んで也麼一站を奔る。

自家は海南道の使臣なるが、只だ楊娘の鮮の荔枝を愛吃し、俺が海南の産する所は、涪州より勝似るが爲に、此に因つて、救して涪州と並び進めしむ。但だ是れ俺が海南の路兒は更に遠きに、この荔枝は七日を過了ぐれば、香味便ち減ず。只得飛び馳せて趕り去るなり。

「馬に鞭うち、重ねて「一路の裏」の二句を唱ひて走り下る」「外、老田夫に扮して上る」

「十棒鼓」田家の耕種、辛苦多し。旱を愁へ、又雨を愁ふ。一年この幾莖の苗に(一)靠る。收め來れば、半は(二)官賦を償はんことを要す。憐む可し、能く幾粒か肚に到るを得ん。毎日成熟を盼みて。天に求め、神助を拜す。老漢は是れ、(三)金城縣の東郷の一箇の(四)莊家にて、一家八口は、單だこの幾畝の薄田に靠著て(五)過活す。早間聽說らく、鮮の荔枝を進むるの使臣、一路の上、徑道を(六)稍著つて行走り、人家の多少の禾苗を踏み壞るを知らずと。此に因りて、老漢は特に田中に到りて看守るなり。

【九】驂。早馬のこと、押韻の爲め驂の字を用ふ。
【一〇】耽。俗語耽慢に同じ、途中のながびくこと。
【一一】一站。一驛に同じ。
【一二】靠る。わづかばかりの禾苗によつて、生命をつなぐ意。
【一三】官賦。租税のこと。収入の半分は租税として、納めなければならぬ意。
【一四】金城縣。今甘肅省鞏昌府に屬す。
【一五】莊家。農家のこと。
【一六】過活。生活すること。
【一七】稍著。道をつツきること。

「望む介」那邊に兩箇の算命的來れり。

「小生、(一)算命の瞎子に扮して、手に竹板を持ち、淨、女の瞎子に扮し、絃子を弾じて、同行き上る」

「蛾郎兒」(二)褒城に住し。咸京に走る。細かに(三)流年と(四)五星とを見て。生と死と、分明に斷ず。(五)一張の鐵口、盡く(六)名を聞く。瞎先生。眞に聖靈にして。(七)一聲叫べば、神仙の來つて命を算するが賽し。

「淨」老的、我れ(八)幾程を走了りて、今日脚疼み、委實に走不動。是れ算命ならずして、倒つて這裏に在つて(九)拚命せん。

「小生」媽媽、那邊に人の説話する有れば、待我問他。

「叫ばはる介」前面の客官に借問す、這裏は是れ什麼なる地方ぞ。

「外」這是は、(一〇)金城の東郷と、(一一)涇城の西郷との交界なり。

「小生、(一二)斜に揖する介」客官の指引を多謝す。

【一八】算命。運星を卜するもの。
【一九】褒城。今陝西漢中府に屬す。
【二〇】咸京。咸陽のこと、京師をいふ。
【二一】流年。年まはりのこと。
【二二】五星。木、火、土、金、水の五星、即ち五行のうらなひなり。
【二三】一張の鐵口。一言にて決すること。
【二四】名を聞く。有名なること。
【二五】一聲叫べば云云。一言吉凶を斷すれば、神の託宣の如く、よく當ること。
【二六】幾程。幾里の意。
【二七】拚命。命をたられること。算命どころではない、ここで拚命するのであらうと、詞のしやれなり。

〔内にて鈴響き、外、望む介〕

呀、一隊の騎馬的來れり。

〔叫ばはる介〕

馬上の長官よ、大路の上へ走り、田苗を踏む要からず。

〔小生、一面、淨に對して語る介〕

媽媽、且つ喜ぶ、京に到ること遠からず。我毎叫びながら、前へ去

き、(一)箇の毛驢子を僱つて、爾のために騎らしめん。

〔重ねて、「瞎先生」の三句を唱へて走る介〕「末・馬に鞭うち、重ねて前の

「巴得箇」の三句を唱ひて、急ぎ上り、小生・淨を衝き倒して下る」〔副

淨、馬に鞭うち重ねて前の「一路の裏」の二句を唱ひて急ぎ上り、小生

を踏み死して下る〕「外、跌倒して、鬼門に向つて哭する介〕

天なるかな。爾看よ、一片の田禾は、都て那厮に踏み爛られて、眼見的、沒用了。説ふを休めよ、

一家の性命存し難しと。現今官糧緊急なるに、何を將て辨納めん。好だ苦也。

〔淨、一面に爬ふを作す介〕

哎呀、人を踏壞したり。老的呵、爾は那裏に在りや。

〔小生を摸著るを作す介〕

呀、這是、老的、怎麼を聲を做さざる。敢是、踏昏せるならん。

〔又摸る介〕

哎呀、頭上の濕漉漉的するは、

〔又摸りて手を聞く介〕

不好了、腦漿を踏出來せり。

〔哭し叫ぶ介〕

我那天呵、地方、救命。

〔外、身を轉じて、看るを作す介〕

原來、一箇の算命先生、踏み死されて此に在り。

〔淨、起きて斜に福する介〕

只だ地方に求す。那の跑馬的人をして來りて命を償はしめよ。

〔外〕哎呀、那の跑馬的呵、乃是ち鮮の荔枝を楊娘娘に進貢するものにして、一路上來、多少人を踏

壞せるかを知らざるも、敢て他が命を償ふを要せず。何を況んや爾ち這の一箇の瞎子をや。

〔淨〕此の如くんば怎んせん。

〔二〕金城の東郷。甘肅の東境。

〔三〕渭城の西郷。陝西の西境。

〔四〕斜に揖す。瞎なるを以て見當違に挨拶するなり。

〔五〕へ走り。原文、往大路上へ走に作る。

〔六〕叫びながら。算命とながしなから。

〔七〕毛驢子。驢のこと。

〔八〕性命。生命に同じ、苗が踏まれて、一家が食べられな

いなどと、いふどころか、何はさて租税はどうして納められようかの意。

〔小生を摸著るを作す介〕

呀、這是、老的、怎麼を聲を做さざる。敢是、踏昏せるならん。

〔又摸る介〕

哎呀、頭上の濕漉漉的するは、

〔又摸りて手を聞く介〕

不好了、腦漿を踏出來せり。

〔哭し叫ぶ介〕

我那天呵、地方、救命。

〔外、身を轉じて、看るを作す介〕

原來、一箇の算命先生、踏み死されて此に在り。

〔淨、起きて斜に福する介〕

只だ地方に求す。那の跑馬的人をして來りて命を償はしめよ。

〔外〕哎呀、那の跑馬的呵、乃是ち鮮の荔枝を楊娘娘に進貢するものにして、一路上來、多少人を踏

壞せるかを知らざるも、敢て他が命を償ふを要せず。何を況んや爾ち這の一箇の瞎子をや。

〔淨〕此の如くんば怎んせん。

〔三〕踏昏。踏まれて氣絶せること。

〔四〕地方。名主といふ如し、地方の役人のこと。

〔五〕斜に福す。見當違ひに挨拶すること、福は萬福、婦人の禮なり。

〔哭する介〕

我が那の老的呵、我原と備を算ふに、備の命は、是れ路に倒れて死せんと要するものなり。只だ這箇の屍首は、如今怎麼に斷送らん。
〔外〕也罷、備那裏に去いて地方を叫ばん。就ち是れ老漢、備と共に擡ぎ去つて埋了めん。

〔浄〕此の如くんば多謝 我れ就ち備に跟著して 一家兒と做らん。
〔四〕可不是好。

〔同上〕小生を擡いで、哭しながら、譚けて下る。〔丑〕驛卒に扮して上る。

〔小引〕

驛官は逃れ。驛官は逃れ。馬死して單單 馬腹を刺せり。驛子は一人有るも。錢糧は半分も没し。打と罵とを受くるに拵す。身を將て、去いて 招架せん。身を將て、去いて招架せん。

自家は 渭城驛中の、一箇の驛子とは便ち是なり。只だ楊娘の鮮の荔枝を愛吃するがために、六月初一は、是れ娘の生日なれば、涪州、海南兩處の、進貢の使臣、俱に趕け到らんと要し、路本驛より經過するも、怎奈せん驛中、錢糧は分文も有る没く、瘦馬剛に一

- 〔三〕 斷送。野邊送りの意。
- 〔三〕 一家兒と做らん。夫婦とならうとの意。
- 〔四〇〕 可不是好。前の悲劇を轉じて喜劇となす、譚話なり。
- 〔四一〕 驛官。驛長のこと。
- 〔四二〕 馬腹。腹は尻に通ず、きんたまをいふ、馬腹を刺すとは、馬がみんな死んでしまつたといふ意、譚話なり。
- 〔四三〕 錢糧。費用のこと。
- 〔四四〕 拵す。あきらめる意。
- 〔四五〕 招架。ふせぐこと、あたる意。
- 〔四六〕 渭城。即ち咸陽、長安を去ること五十里、一日程なり。

匹を存するのみ。本官は打るるを怕れて、那裏に逃れ去れるかを知らず。區區 便に就いて、權りに此驛に 知たり。只だ是れ使臣の到來せば、如何に 應付せん。且らく他が自由にせん。

〔末〕馬を飛ばして上る。

〔急急令〕 黃塵の影内、日山に衝まる。趕り、趕り、趕りて。長安に近づく。

〔馬を下る介〕

驛子、快く馬を換へ來れ。

〔丑〕馬を接け、末、果籃を放ち、衣を整ふる介。〔副〕浄、馬を飛ばして上る。

一身の汗雨、四股 癱る。趨り、趨り、趨りて。行鞍を換へん。

〔馬を下る介〕

驛子、快く馬を換へ來れ。

〔丑〕馬を接け、副浄、果籃を放ち、末と見る介。

請了。長官も也た是れ荔枝を進むるの請。

- 〔四七〕 本官。驛官をいふ。
- 〔四八〕 區區。不才といふ如し。
- 〔四九〕 便に就いて。便宜上の意。
- 〔五〇〕 知たり。知事の知、つかさどる意。
- 〔五一〕 應付。挨拶の意。
- 〔五二〕 日山に衝まる。落日西山に没すること。
- 〔五三〕 長安。唐の都、今陝西西安府。
- 〔五四〕 癱る。疲れて、身體のだるきこと。
- 〔五五〕 行鞍を換へん。馬を取り換へようとの意。

〔末〕 正是。

〔副淨〕 驛子、(五) 下程の酒飯は那裏に在りや。

〔丑〕 不曾備得。

〔末〕 也罷。我每飯を吃せず。快く馬を連れて來れ。

〔丑〕 兩位爺(五) 在上。本驛には只だ一匹の馬を剩有すのみ。但だ那か一位爺の騎し去るに(五) 憑せて、就ち是し。

〔副淨〕 唛、偌大なる一個の涓城驛にして、怎麼んぞ只一匹の馬あるのみならんや。快く爾が那の(五) 狗官を喚び來れ。他に驛馬の那里に去れるかを問はん。

〔丑〕 若し驛馬のことを説起へば、連年都て荔枝を進むる爺毎に騎り死され、驛官は(六) 沒法、如今は走れり。

〔副淨〕 既是に驛官の走れるからには、只だ(七) 爾に問うて要めん。

〔丑、指す介〕

この(八) 棚の内は、是れ一匹の馬ならずや。

〔末〕 驛子、我れ先に到れり。且つ我が與に、先づ騎了して去らしめよ。

〔五〕 下程の酒飯。辨當のこと、出發に際して、食へるもの、猶我が「たちふるまひ」の如し。

〔七〕 在上。恭敬の語、謝罪の時に多く用ふ。

〔五〕 憑せて。よる、まかせる意。

〔五〕 狗官。罵語なり。

〔六〕 沒法。今の俗語に「沒法子」といふ、致方のなきこと。

〔六〕 爾に問ひて要む。爾の責任なりといふ意。

〔六〕 棚。馬棚をいふ。

〔副淨〕 我が海南の來路は更に遠ければ、還た我に讓つて先づ騎らしめよ。

〔末、内に向ふを作す介〕

〔恁麻郎〕 我只だ先づ馬を換へん。爾と(九) 口を闘はさず。

〔副淨、扯むる介〕

(十) 強を恃んで、我を惹著て手を動かさしむるを休めよ。

〔末、荔枝を取つて、手に在る介〕

爾敢て我がこの荔枝を(十一) 亂丟くか。

〔副淨、荔枝を取つて、末に向ふ介〕

爾敢て我がこの竹籠を碎扭すか。

〔丑、勸むる介〕

請罷休。(十二) 氣吼つを免めよ。この(一) 匹の瘦馬を把つて、同に騎して(十三) 一路走くに如かず。

〔副淨、荔枝を放つて丑を打つ介〕

唛、(十四) 胡說。

〔前腔〕 我は只爾ちこの潑腌臢(十五) 死囚を打たん。

〔六〕 口を闘はす。口論すること。

〔十〕 強を恃んで云云。威張るな、なぐるぞといふ意。

〔十一〕 亂丟。丟は捨てる意。

〔十二〕 勸むる。宥める意。

〔十三〕 氣吼。立腹すること。

〔十四〕 一路走。同行の意。

〔十五〕 胡說。ばかいへ、じようだんいふなの意。

〔七〕 死囚。重罪人の意、罵語なり。

〔末、荔枝を放つて、丑を打つ介〕

我も也、爾這の放刁頑賊頭を打たん。

〔副淨〕 官馬を剋き、(七二) 嘴兒太だ油すべる。

〔末〕 (七三) 上の用を誤り、(七四) 膽兒斗に似たり。

〔合〕 (七五) 鞭は亂れ抽き、拳は痛く毆つ。(七六) 爾を打ち得て、握へ難くんば。

那の馬自ら有らん。

〔丑、叩頭する介〕

〔前腔〕 地上に向つて連連叩頭し。(七七) 臺下に望む、輕輕手を放さんことを。

〔末・副淨〕 若し爾を饒すを要めば、快く馬を換へ來れ。

〔丑〕 馬は一匹。驛中に現に有り。

〔末・副淨〕 再た一匹を要す。

〔丑〕 第二匹は、實に(七八) 補湊め難し。

〔末・副淨〕 有る没くんば、只是れ打たん。

〔七二〕 官馬を剋き。官馬を養ふ錢をこまかす意。

〔七三〕 嘴兒太だ油。おしゃべりの意。

〔七四〕 上の用を誤る。驛馬整はず、上の御用の足らぬこと。

〔七五〕 膽兒斗に似たり。大膽な奴だといふ意。

〔七六〕 亂れ抽く。鞭の亂下すること。

〔七七〕 爾を打ち得て云云。打たれて到底こらへられなきに至らば、馬は自然に出で來らん、尋常の手段では馬を出さない、圖太い奴だとの意。

〔七八〕 臺下。貴下、足下に同じ。補湊。補充の意。

〔丑〕 且らく(七九) 慢紐めて。請ふ聽割へ。我れ只得衣裳を脱下いで。爾の與に、權りに(八〇) 酒に當てん。

〔末〕 誰か爾の這の衣裳を要せんや。

〔副淨〕 衣を見て、披いて身上に在るを作す介。

也罷。路を起ること要緊なり。我れ原と那馬に騎了つて(八一) 前站にて換へ去らん。

〔末〕 果を取つて馬に上り、重ねて前の「一路の裏」の二句を唱へて跑り下る。

〔丑〕 快く馬を換へ來れ、我騎らん。

〔末〕 馬は此に在り。

〔末〕 果を取つて馬に上り、重ねて前の「巴得箇」の三句を唱へて跑り下る。

〔丑〕 楊娘、楊娘。只だ這の幾箇かの荔枝の爲めに、呀。

〔末〕 鐵關金鎖、(八二) 明に徹して開く。(八三) 崔液。

〔丑〕 黃紙初めて飛んで、(八四) 勅字回る。(八五) 元稹。

〔七九〕 慢紐。紐は手をれじること。

〔八〇〕 酒に當てん。著物を賣つて、酒を買ひませうとの意。

〔八一〕 衣を見て云云。衣を取り上げて自分で着ること、衣を取つて馬をあきらめる意、支那人の根性をよくあらはす。

〔八二〕 前站。次の宿場をいふ。

〔八三〕 場を弔ふ。跡をながめること。

〔八四〕 鐵關金鎖。關所のこと。

〔八五〕 明に徹して開く。夜中開くこと。

〔八六〕 黃紙。勅旨のこと、黃紙に記するを以てなり。

〔八七〕 勅字回る。返事のこと。

〔八八〕 若。物の裂ける大音をいふ。

〔八九〕 人の是れ云云。杜牧の全詩に云ふ、長安回望繡成堆、

驛騎の鞭聲、(八)着として流電のごとし。(李郢)
人の是れ荔枝の、來るを知る無からんや。(杜牧)

山頂千門次第開、一騎紅塵妃
子笑、無人知是荔枝來

第十六齣 舞盤

〔生、二〕内侍を引き、丑、随つて上る

〔仙呂引子〕〔奉時春〕山は靜に風は微にして、晝漏長し。殿角に映す、
火雲の千丈。(四)紫氣は東より來り。(五)瑤池は西に望む。翩翩たる青鳥、
庭前に降る。

朕妃子と共に、暑を驪山に避く。今六月朔日に當り、乃ち是れ妃子の誕
辰なれば、特に宴を設けて、長生殿中に在り。他の與めに慶を稱げ、竝
せて霓裳の新曲を奏せん。高力士、旨を後宮に傳へ、娘娘に宣して、殿
に上らしめよ。

〔丑〕領 旨。

〔内に向つて傳ふる介〕〔内にて、應じて旨を領する介〕〔旦、盛粧し、老
旦・貼を引いて上る〕

〔唐多令〕日影 椒房に耀き。(六)花枝は綺窗を弄す。門には懸く小幌、

〔一〕舞盤。貴妃が盤上にて、
霓裳羽衣の舞をなすこと。
〔二〕内侍。黃門なり。
〔三〕火雲の千丈。夏の雲をい
ふ、所謂夏雲多奇峰の意。
〔四〕紫氣。瑞氣をいふ。この
句杜甫の詩句を用ふ、西望瑤
池王母降、東來紫氣滿函關と
あり。
〔五〕瑤池。西王母の居る所。
〔六〕青鳥。西王母の側に三青
鳥あり、常に使を奉ずといふ。
漢武故事に云ふ、「七月七日、
忽有青鳥、飛集殿前、東方
朔曰、此西王母欲來、有頃
王母至、三青鳥夾侍王母旁」と、こゝは青鳥を高力士に、

緒羅の黄、文鸞を繡得て、一對を成し。高く(一〇)五雲に傍著うて翔る。

〔見る介〕

臣妾楊氏、見駕す。願はくは陛下の、萬歲萬萬歲ならんことを。

〔生〕 妃子と之を共にせん。

〔旦、坐する介〕

〔生〕 紫雲深き處、(二) 葵光明かなり。

〔旦〕 露を帯ぶるの、(三) 靈桃、日に倚つて榮ゆ。

〔老旦・貼〕 歲歲花前に、人老いざらんことを。

〔丑、合〕 長生殿裏、長生を慶す。

〔生〕 今日妃子の、(四) 初度なれば、寡人は特に、(五) 長生の宴を設け、同

〔旦〕 竟日の歡を爲さん。

〔旦〕 薄命の生辰に、天寵を荷蒙る。願はくは陛下の爲めに、千秋

萬歲の觴を進めん。

〔丑〕 酒到れり。

〔旦、拜して生に酒を獻じ、生、答へて賜はり、旦跪いて飲み、叩頭し

王母を貴妃に喩ふるなり。

〔七〕 椒房。皇后宮のこと、前

に出づ。

〔八〕 花枝は綺窗を弄す。花の

影が窓に移ること。

〔九〕 小幌緒羅の黄。あかきい

るの手巾、女子の用ふる所な

り。女子の生辰を設祝といひ、

男子に懸弧といふ。

〔一〇〕 五雲。五色の雲、前に出

づ。

〔一一〕 葵光。葵女は星の名、女

宿なり、以て貴妃に喩ふ。

〔一二〕 靈桃。三千年に花咲く、

王母の仙桃、貴妃自ら喩へ、

日を以て明皇に喩ふ。

〔一三〕 長生殿。實は齋宮なり、

ここは唯その名の長生にちな

めるなり。

〔一四〕 初度。誕生日のこと。

〔一五〕 長生の宴。千代を祝ふ

意。

〔一六〕 竟日。終日に同じ。

て萬歲と呼び、坐する介〕

〔高平過曲〕〔八仙會蓬海〕〔入聲甘州〕〔生〕 風熏じて日朗かに。看る、一葉

の、階莫、炎光に搖動するを。華筵初めて啓き。(一) 南山遙かに霞觴に映

ず。

〔翫仙燈〕〔合〕 果は歡を合せて、桃は千歲に生り。(二) 花は蒂を並べて、

蓮は開くこと十丈。

〔月上海棠〕 宜しく歡賞すべし。恰も好し、殿は長生と號し。境は(三) 蓬

閭に齊し。

〔小生、(三) 内監に扮し表を捧げて上る〕

手に(四) 金花の紅榜子を捧げ。齊しく寶殿に來つて、千秋を祝ふ。

〔見る介〕

萬歲爺と娘娘とに啓す。國舅楊丞相は、韓・魏・秦三國夫人と共に、壽禮

の賀箋を獻上し、外に在つて朝賀せり。

〔丑、箋を取つて生に送り、看しむる介〕

〔生〕 (三) 生受他毎。丞相は、禮を行なふを免じ、朝に回りて事を辦せし

〔一七〕 薄命。貴妃の謙稱なり。

〔一八〕 階莫。葉莫、一に曆草と

も云ふ、月初に一葉を生じ、

漸次十五日に至るまで、十五

葉を生じ、十六日より一葉づ

つ落ち初むと、堯の時階前に

生ぜりといふ。

〔一九〕 南山。詩經天保の篇に、

「如南山之壽」の句あり、壽

九祝ふ時に用ふ。

〔二〇〕 果は歡を合せて云云。即

ち西王母の桃、三千年に一度

實るといふ、漢武故事に云ふ、

「西王母降、出桃、自啖二枚、

五枚與帝、帝留核欲種、母

曰、此桃三千年、一開花、三

千年、一結し」と。

〔二一〕 花は蒂を並べて云云。並

蒂の蓮、夫婦に喩ふ、前に出

づ。

〔二三〕 蓬閭。蓬萊と閭苑、共に

仙境をいふ。

〔三〕 内監。内侍に同じ。

め、三國夫人は、朕が娘と同一宮に回つて筵宴するを候たしめよ。
〔小生、領旨りて下る〕「淨、内監に扮し、荔枝の黄袱蓋を捧げて上る」

正に 瑤圃 千秋の宴に逢ひ。 炎州の 十八娘を進到す。

〔見ゆる介〕

萬歳爺に啓あぐ。 涪州海南より、鮮の荔枝を貢進して此に在り。

〔生〕 取り上げ來れ。

〔丑、荔枝を接げ、袱を去つて送上る介〕

〔生〕 妃子、朕は爾が此果を愛食するに因り、特に 地方に敕して、

飛馳進貢せしめたるに、今日壽宴初めて開き、佳果適ま至る。當に妃子の爲めに再び一觴を進すべし。

〔旦〕 萬歳。

〔生〕 宮娥毎、酒を進せよ。

〔老旦、貼、酒を進むる介〕

〔杯底慶長生〕〔傾杯序〕〔換頭〕 筐に盈つる佳果香ばし。幸に 黄封、遠く敕して 川廣より來らし

〔三〕 金花の紅榜子。金箔を散らしたる紅紙に、記したる賀箋のこと。

〔四〕 生受。御苦勞、御世話、御手数などの意。

〔五〕 黄袱蓋。黄色の袱紗を以て蓋へること。

〔六〕 瑤圃。瑤池のこと。西王母の宴に喩ふ。

〔七〕 千秋の宴。千代を祝ふ意。隋唐嘉話に云ふ、「八月初五日、明皇生辰、爲千秋節」と。ここには貴妃に用ふ。

〔八〕 炎州。南方をいふ。

〔九〕 十八娘。荔枝の別號なり。

〔一〇〕 地方。地方官をいふ。

〔一一〕 飛馳。早馬を飛ばす意。

〔一二〕 黄封。みことのりのこと。黄紙に書して封する意。

〔一三〕 川廣。四川と廣東との略稱。

む。愛す、他が濃く紅絹を染め。薄く晶丸を裹み。手に入るの清芬。齒に沁むの甘涼。

〔長生導引〕〔合〕 便ち 火棗も交梨も、應に讓るべし。只合に 萬歳臺前。千秋筵上に來り。

〔四〕 瑤池の阿母に伴ひて、瓊漿を進むべし。

高力士、旨を李龜年に傳へ、梨園の子弟を押し、殿に上つて 承應せしめよ。

〔丑〕 領 旨。

〔内〕 内に向つて傳ふる介〕末、外、淨、副、淨、丑を引き、各錦衣花帽、應へ領旨りて上る〕

〔五〕 紅牙は拍を待ち、箏は柱を排し。紅羅を催著して、舞筵に上らしむ。柘枝の新帽子を換戴して。班に隨ひて行き到る、御階の前。

〔五〕 濃く紅絹を染め。荔枝の皮をいふ。
〔六〕 薄く晶丸を裹み。荔枝の肉をいふ。晶丸は水晶の丸の如く、白く美しきこと。
〔七〕 清芬。香氣をいふ。
〔八〕 甘涼。美味をいふ。この數句、荔枝を形容して適切なり。
〔九〕 火棗。交梨。神仙の食ふ所の果なり。眞語に云ふ、「玉醴金漿、交梨火棗、此則飛騰之藥、不レ比ニ金丹」と。
〔一〇〕 萬歳臺前。御所のこと。
〔一一〕 瑤池の阿母。即ち西王母のこと。周の穆王が瑤池に到り、西王母と宴せし故事、穆天子に出づ。唐人は明皇貴妃のことを穆天子、若くは漢の武帝に比すること、常なり。即ち清平調の「若非群玉山頭見、會向瑤臺月下逢」とは、

穆天子の故事を用ひしなり。

〔三〕 承應。御用を待つ意。

〔四〕 紅牙。紅牙の拍板をいふ。

〔五〕 箏は柱を排す。こののちをはめて、用意すること。

〔六〕 紅羅。紅羅の裙を著けたる舞姫のこと。

〔七〕 柘枝。柘榴の枝を挿したる帽子をいふ。

〔八〕 班に隨ふ。順番にの意。

〔九〕 霓裳の散序。第十四齣、偷曲の首に應ず。

〔一〇〕 羽衣の第二疊。即ち同齣に、所謂拍序なるべし。

〔一一〕 六奏。六段といふ如し。

〔一二〕 歌拍。流拍。促拍。演奏上の調子、拍子の入れ所にて、緩急の調を異にするなり。

〔一三〕 中序。即ち拍序に同じ、白樂天の霓裳羽衣歌の注に云ふ、「散序六遍無レ拍、故不レ舞、

【見ゆる介】

樂工、李龜年、梨園の子弟を押領て、萬歳爺と娘娘とに叩見す。

【生】李龜年、(五)霓裳の散序は、昨已に奏過せり。(四)羽衣の第二疊は、

曾て演熟したる可きか。

【末】演熟せり。

【生】用心去いて奏せよ。

【末】領 旨。

【起つ介】(暗に下る)

【旦】妾陛下に啓く、此曲、散序、六奏は、止だ(五)歇拍ありて、流拍

なく、(五)中序六奏は、流拍ありて、促拍無し。(五)其時未だ舞態あらず。

【八仙會蓬海】(換頭)只是れ悠揚。聲情俊爽なり。(五)彩雲を停住めて、

(五)飛んで虹梁を繞らんと要す。

羽衣の三疊に至つては、名づけて(五)飾奏と曰ふ。

一聲一字。都て舞態をば含藏す。

其間、漫聲あり、纏聲有り、袞聲有り。

中序始有レ拍亦名拍序と。

【五三】其時未舞態あらず。この

處、霓裳羽衣を論ずること甚

詳なり、霓裳羽衣は、唐の大

曲にして、舞曲なり、碧雞漫

志には、十二疊とあれども、

夢溪筆談には十三疊といへ

り、霓裳曲凡十三疊、前六疊

無レ拍、至第七疊、方謂之疊

遍、自レ此有レ拍而舞起」と、

因みに大曲は唐より宋に至つ

て、その説益、詳なり、碧雞

漫志に云ふ、「凡大曲有二數散

序、散序、排遍、正遍、入破、虛催

、流拍、遍、歇殺、滾、始成二曲、此

謂之大通」と、然れども樂家

の専門にして、固より門外漢

の通ずる所に非るなり。

【五】彩雲を停住む。樂聲の妙

なることなむ。

【五】飛んで虹梁を繞る。同前、

列子湯問篇に云ふ「薛譚學謳

於秦青、未窮青之技、自謂

レ盡レ之、遂辭歸、秦青弗止、

饒レ於郊衢、撫レ節悲歌、聲振

林木、響過三行雲、薛譚乃謝、

求レ反、終身不三敢言レ歸。秦青

願謂其友曰、昔韓娥東之

齊、匱糧過三雍門、鬻レ歌假

レ食、既去、而餘音繞三梁、

三日不絶」と。

【五】飾奏。奏樂上の術語、蓋

し賑なる演奏にて、舞踏にあ

はすもの。

【五七】漫聲。纏聲。袞聲。歌ひ

方の調子、或はゆるく、或は

ふるはし、或ははやく歌ふこ

と。

【五八】清圓なる驪珠。玉をころ

がす如き聲をいふ。

【五九】入破。攤破。出破。奏樂

上の緩急の調子をいふ。

【見ゆる介】

樂工、李龜年、梨園の子弟を押領て、萬歳爺と娘娘とに叩見す。

【生】李龜年、(五)霓裳の散序は、昨已に奏過せり。(四)羽衣の第二疊は、

曾て演熟したる可きか。

【末】演熟せり。

【生】用心去いて奏せよ。

【末】領 旨。

【起つ介】(暗に下る)

【旦】妾陛下に啓く、此曲、散序、六奏は、止だ(五)歇拍ありて、流拍

なく、(五)中序六奏は、流拍ありて、促拍無し。(五)其時未だ舞態あらず。

【八仙會蓬海】(換頭)只是れ悠揚。聲情俊爽なり。(五)彩雲を停住めて、

(五)飛んで虹梁を繞らんと要す。

羽衣の三疊に至つては、名づけて(五)飾奏と曰ふ。

一聲一字。都て舞態をば含藏す。

其間、漫聲あり、纏聲有り、袞聲有り。

【五】清圓なる驪珠の一串に應ず。

【五】入破あり、攤破あり、出破あり。

【六】嬌娜たる氍毹の千狀に合す。

【六】還た(六)花犯あり、道和あり、傍拍あり、間拍あり、催拍あり、儉拍あり

て。

音響多し。皆(六)慢舞と相生じ。緩歌交暢ぶ。

【生】妃子の言ふ所、歌舞の蘊を曲盡す。

【旦】妾製して、翠盤一面有り。請ふ試みに其中に舞ひ、以て天顔の一

笑を博せん。

【生】妃子の妙舞は、寡人(五)従と未だ見るを得ず。永新・念奴は、鄭觀

音・謝阿蠻と同一娘娘に伏侍して、(六)翠盤に上り來らしむべし。

【老旦・貼】領 旨。

【旦】起て(五)福する介(六)退を告げて、衣を更ふ

衣裳を整頓して、重ねて結束し。一身飛び上る、翠盤の中。

【老旦・貼】引いて下る

〔生〕高力士、旨を李龜年に傳へ、梨園の子弟を領み、譜を按じて樂を奏せしめよ。朕は親しく羯鼓を以て、之を節せん。

〔丑〕領旨。

〔内〕向つて傳ふる介〔生〕起つて衣を更め、末衆場内に在つて樂を作す介〔場〕上に翠盤を設け、旦、花冠白繡袍、瓔珞、錦雲肩、翠袖、大紅舞裙し、老旦・貼、二雜の鄭觀音・謝阿蠻に扮すると共に、各舞衣白袍にて、五彩の霓旌、孔雀の雲扇を執り、密に旦を遮り、簇りて翠盤に上す介〔樂〕止みて、旌扇徐ろに開く〔旦〕盤中に立つて舞ひ、老旦・貼・雜唱ひ、丑、跪いて鼓を捧げ、生、坐に上りて鼓を撃ち、衆、場内に在りて細十番を打ちて、合す介

〔羽衣第二疊〕畫眉序 羅綺は花光に合し。 一朶の紅雲、自ら空に漾ふ。

〔皂羅袍〕看よ、霓旌の四もに繞り。 天香の亂れ落るを。

〔醉太平〕安詳、徐ろに扇影を開いて、 明妝を露はす。

〔白練序〕渾かも天仙の月中より飛び降るに一似たり。

〔合〕軽く颯つて彩袖張り。 翡翠盤中に向つて、技を顯はして長し。

〔應時明近〕飄然として、來り又往く。 宛がら風を迎ふる 菡萏のごとし。

〔雙赤子〕翩翩たる 葉上。 袂を舉げて空に向ひ、去らんと欲するが如くにして。 乍ち身を廻らし、 側度むくこと方無し。

〔急に舞ふ介〕

〔畫眉兒〕盤旋跌宕。 花枝は 招颺して、柳枝は揚り。 鳳影は高く

驚りて、鸞影は翔る。

〔拗芝蔴〕體態嬌にして、 狀し難く。 天風吹き起りて。 衆樂繽紛として響く。

〔小桃紅〕冰弦玉柱、聲嘹唳。 鸞笙、象管、音飄蕩。

〔花藥闌〕恰も羯鼓の低昂に合著せ。 新腔を按じ。 新腔を 度す。

〔怕春歸〕金裙を裏かし。 齊しく 留仙の想を作す。

〔生〕鼓を住め、丑、攜へて去る介

備拍。偷拍。皆奏樂の調子、その詳を知り難し。

〔三〕慢舞。緩歌。緩歌と慢舞と相應すること。長恨歌の「緩歌慢舞凝三絲竹」の意なり。

〔四〕翠盤。翡翠の盤。

〔五〕福。御辭儀すること、前に出づ。

〔六〕退を告ぐ。御前をさがること。

〔七〕羯鼓。本西域より傳はる、足付の臺に横に置き、二本の撥にて打つ太鼓の一種、明皇、尤も之を善くせりといふ。

〔八〕霓旌。美しき旗、天子の儀仗に用ふ。

〔九〕雲扇。遮陽に同じ。

〔十〕簇りて。簇擁すること、大勢にてかつぎあげる意。

〔十一〕羅綺。幕をいふ。

〔十二〕一朶の紅雲。同上。

〔一〕天香の亂れ落つ。香氣の馥郁たること。

〔二〕安詳。よい處での意。

〔三〕明妝。貴妃の姿をいふ。

〔四〕軽く颯がる。舞容をいふ。

〔五〕長し。長技を顯はす意。

〔六〕菡萏。蓮の花のこと。

〔七〕葉上。翠盤を蓮葉に喩ふ。

〔八〕側度むくこと方無し。自由自在に身を舞はすこと。

〔九〕盤旋跌宕。くるくると、はやくめぐること。

〔十〕招颺。風に靡くこと。

〔十一〕鳳影。舞容をいふ。

〔十二〕狀し難く。形容し難きこと。

〔十三〕冰弦玉柱。箏をいふ。

〔十四〕象管。笛をいふ。

〔十五〕新腔。新しき調子。

〔十六〕度す。按に同じ、曲を按じて、歌にあはせること。

〔古輪臺〕 舞住んで、霞裳を斂む。

〔上に朝して拜する介〕

重ねて 低頼す。山呼萬歲、君王を拜す。

〔老旦・貼・雜、旦を扶けて盤より下す介〕〔二雜、暗に下る〕生、起ち前
んで旦を攜ふる介〕

妙なる哉、舞や。逸態横生し、濃姿百出す。宛として 翻風廻雪
の若く、恍として 飛燕游龍の如し。眞に獨り 千秋を擅にす。宮
娥毎、酒を看來れ、朕は妃子の與に杯を把らんとす。

〔老旦・貼、酒を奉じ、生、杯を撃ぐる介〕

〔千秋舞霓裳〕〔千秋歲〕 金觴を把り。笑を含んで微微として向ふ。請ふ一
點點。檀口軽く嘗めんことを。

〔旦に付す介〕

留殘すことを得るを休めよ。留殘するを得るを休めよ。懶の舞を酬謝し。
腰肢の勞攘れたるを怯る。

〔旦、杯を接けて謝する介〕

〔八六〕 留仙の想を作す。裙が風

にしはみて、留仙裙を想ひ起
さしむとの意。飛燕外傳に云
ふ、「帝於三太液池、作三千人舟、
號三合宮之舟、后歌三舞歸風送
遠之曲、侍郎馮無方吹笙、以
倚三后歌、中流歌酣風大起、后
揚三袖曰、仙乎仙乎、去レ故而
就レ新、寧忘レ懷乎、帝令三無方
持三后裙、風止、裙爲レ之縵、
他日宮妹或襲レ裙爲レ縵、號三留
仙裙」こと。

〔九〇〕 低頼。低首に同じ、拜す
ること。

〔九二〕 山呼。萬歲といふに同
じ、漢の武帝嵩山に登りし時、
萬歲と三呼せしを聞けりと、
漢書武帝紀に出づ、是に由つ
て、萬歲といふべきを、山呼
といふ。

〔九三〕 逸態横生。舞の手の多き
こと。

〔九三〕 翻風廻雪。舞姿を形容す。

萬歲。

〔舞霓裳〕 親しく 玉醞を頒ちて、 恩波廣し。惟だ庸劣を慚づ、怎ん
ぞ承當らん。

〔生、旦を看る介〕

俺仔細に他が模様を看るに。只這の杯を持つ處。萬種の風流ありて、
人の腸を 滞ます。

〔生〕 朕に 鴛鴦萬金錦十疋、 麗水 紫磨の 金步搖一事あ
り、聊か 纏頭となさん。

〔香囊を出す介〕

還た自ら佩べる 瑞龍腦 八寶錦の香囊一枚あり、解き來つて、卿
が 舞珮を助けん。

〔旦、香囊を接けて、謝する介〕

萬歲。

〔生、旦を攜へて行く介〕

〔尾聲〕〔生〕 霓裳の妙舞千秋の賞。 千秋を合助して、祝して未央な

〔九四〕 飛燕游龍。同上。

〔九五〕 千秋を擅にす。千歳一人
の意。

〔九六〕 檀口。美人の口をいふ。

〔九七〕 留殘云云。乾杯の意。

〔九八〕 玉醞。美酒をいふ。

〔九九〕 恩波。御恩をいふ。

〔一〇〇〕 萬種の風流。言ひ得ざる
風情のこと。柳耆卿の詞に「便
縱有三千種風情、更與三何人
一説」とあり、この意なり。

〔一〇一〕 滞。困極なり、玉簫に見
ゆ。

〔一〇二〕 鴛鴦萬金錦。金絲にて鴛
鴦を繡ひ出だせる錦のこと。

〔一〇三〕 麗水。地名、金を産す。

〔一〇四〕 紫磨。金の最上なるもの
を紫磨金といふ。

〔一〇五〕 金步搖。金の花簪。

〔一〇六〕 纏頭。歌舞の人に賞する
もの、即ちばなのこと。

〔一〇七〕 瑞龍腦。香の名。

〔一〇八〕 八寶錦。色色の模様ある

らす。

〔旦〕 微倅殺、親しく君恩に沐して、體に透りて香し。
 〔生〕 長生秘殿、(二二) 青蒼に倚り。(吳融)
 〔旦〕 玉醴還た分つ、壽を獻するの觴。(張説)
 〔生〕 飲罷んで更に憐む、雙袖の舞。(韓翃)
 〔旦〕 滿身新に帯ぶ、(二三) 五雲の香。(曹唐)

錦をいふ。
 〔一九〕 舞。舞衣のおびもの。
 〔二〇〕 千秋。千秋宴をいふ。
 〔二一〕 青蒼。天をいふ。
 〔二三〕 五雲の香。天上の香氣をいふ。

第十七齣 合圍

〔外・末・副淨・小生〕 四番將に扮して上る。
 〔外〕 三尺の鑽刀、雪に耀いて光り。
 〔末〕 腰間の明月、角弓張る。
 〔副淨〕 葡萄酒は酔ふ、臙脂の血。
 〔小生〕 貂帽花は添ふ、錦繡の装。
 〔外〕 俺は范陽鎮東路の將官、何千年とは是れなり。
 〔末〕 俺は范陽鎮西路の將官、崔乾祐とは是れなり。
 〔副淨〕 俺は范陽鎮南路の將官、高秀巖とは是れなり。
 〔小生〕 俺は范陽鎮北路の將官、史思明とは是れなり。
 〔各〕 腰を彎めて見る介。
 請了。昨は王爺の將令を奉じ、我等を傳集めければ、只得齊しく帳前に至つて伺候す。道猶未了、王爺は帳に升れり。

〔一〕 合圍。まきがりの場。
 〔二〕 番將。番は蕃に通ず。
 〔三〕 鑽刀。鐵の精良なるもの、面上に紋あり、刀劍を造るに好し、西蕃より出づ。
 〔四〕 明月。弓を滿月に引きしぼる意。
 〔五〕 角弓。角を以て飾りたる弓。
 〔六〕 臙脂の血。滿面朱を濺ぎ、まつかに酔ふこと。
 〔七〕 貂帽花。貂の帽に花をかざす意。
 〔八〕 錦繡の装。美服を着ける意。
 〔九〕 腰を彎む。胡の禮なり。
 〔一〇〕 王爺。王公の俗稱。

〔内にて、鼓吹、掌號する。科〕〔淨〕戎装し、番姬番卒を引いて上

〔越調紫花撥四〕〔四〕貍貅を統べて。〔五〕邊關に雄鎮す。雙眸戲破る、〔六〕番と漢と。掌兒の中に、江山を握定す。先づこの四週圍の〔七〕爪牙をば、〔八〕迭に辨す。

俺安祿山、夙に大志を懷き、久しく異謀を蓄へしも、只一向朝に在りて封を東平の王爵に受け、寵倖雙び無く、富貴已に極まるに因り、嗜が心願も、倒つて也罷めり。耐へ耐し、楊國忠那厮は、嗜と合はざれば、出でて〔九〕范陽を鎮す。且つ喜ぶ、跳つて〔一〇〕樊籠を出で、正に暗に大事を圖るに好し。俺家轄ぶる所、原三十二路の將官あり。番漢並び用ひ、性情各別にして、以て任じて腹心と爲し難ければ、此に因つて奏請して、〔一一〕一概に俱に番將を用ふ。如今大小の將領は、皆嗜が部落なり。

〔笑ふ科〕
意の爲す所に任せて、都て顧忌する無し。日昨他毎を傳集め、俱に帳前に赴かしむ。這嗜敢待齊也。

- 〔二〕 帳に升る。御出になつたといふ意。
- 〔三〕 掌號。號令をかける意。
- 〔四〕 科。介に同じ、前に出づ。
- 〔五〕 貍貅。強兵のこと。
- 〔六〕 邊關。國境をいふ。
- 〔七〕 番と漢と。漢將と蕃將とを區別すること。
- 〔八〕 爪牙。部將をいふ。
- 〔九〕 迭に辨す。吟味する意。
- 〔一〇〕 也罷めり。満足する意。
- 〔一一〕 范陽を鎮す。范陽の節度使となりしこと。權閥の末に應ず。
- 〔一二〕 樊籠。かごのこと。朝廷に居る間は籠の鳥なりしが、范陽に出づれば、虎の山に歸るが如し。
- 〔一三〕 一概。一切に同じ。

三十二路の將官、參見す。

〔淨〕 諸將 少禮。

〔衆〕 王爺に請ひ問ふ、某等を傳集むるは、知らず、何の鈞令かある。

〔淨〕 衆將官、目今秋高く馬壯にして、正に武藝を演習するに好し。特に爾等を召して、同に〔一〕沙地に往き、大に〔二〕圍場を合せて、〔三〕較獵

一番すること、多少是れ好からん。

〔衆〕 謹んで將令に遵はん。

〔淨〕 此より馬に跨つて進み去かん。

〔衆と同一に、馬に上るを作す科〕

〔胡撥四犯〕〔淨〕 紫韁軽く挽く。

〔合〕 雙手紫韁をば軽く挽き。馬に〔四〕驅び上り。〔五〕盔纓をば〔六〕低く按

ず。

〔行く科〕

〔七〕旗影閃めきて雲般に。〔八〕沒揣的、〔九〕龍蛇動き。一直的に霄漢に通ず。

〔一〇〕奇門を按じて、九連環を布下了し。這の小中原を觀定了めて、〔一一〕眼に在

- 〔一〕 較獵。武技を較べること、今の觀兵式の意なり。
- 〔二〕 紫韁。手綱をいふ。
- 〔三〕 驅び上り。ひらりと馬の背に跨り、馬の知らぬこと。
- 〔四〕 盔纓。かぶとの紐。
- 〔五〕 低く按ず。垂れること。
- 〔六〕 旗影閃き云云。旌旗空を蔽ふ意。
- 〔七〕 沒揣的。思ひがけの意。
- 〔八〕 龍蛇。旗印なり。
- 〔九〕 奇門。九連環。共に陣法をいふ。
- 〔一〇〕 眼に在り。眼中に收める意。
- 〔一一〕 消ひ得ず。つかひきれぬ

り。俺が衆路の強番を消ひ得ず。

〔衆、四面に立ち、淨、指す科〕

この一員は身材慥慥。那の一員は結束牢控。この一員は莽兀刺、

拳毛高鼻。那の一員は惡支沙、雕目胡顔。この一員は急進格邦的、

弓開き月滿るを會くし。那の一員は滴溜樸祿的、鎗落ちて星寒きを

會くし。この一員は咭叱克擦的、鎗風閃爍するを會くし。那の一員は悉

力颯刺的、劍雨澎灘たるを會くす。端的是、人は猛虎の山澗を離れたる

が如く。英雄の天可汗を顯はす。

〔衆行く科〕

〔合〕軍威を振ひ。撲通通と鼓鳴り。魂を驚かし膽を破る。陣勢を排

し。韻悠悠たる角聲。人は習ひ馬は開ふ。雷轟電轉も抵多少。可

正是、海沸き也那河翻へることし。折末的、銅を壁と乍し鐵を壘

と作すも。甚麼の攻むれども破れず、攻むれども破れざる也の雄關あらん

や。

〔淨〕 这里是地澗く沙平かなれば、此にて圍場を擺開き、射獵すること

意。結束牢控。小作りにて、

しつかりせること。

〔三九〕 莽兀刺。莽の意、蠻勇を

いふ。

〔四〇〕 拳毛。毛むくじやらのこ

と。

〔四一〕 惡支沙。容貌の兇惡なる

こと。

〔四二〕 雕目胡顔。目がくりくり

して、顔は蕃人らしきこと。

〔四三〕 急進格邦的。音の形容、

以下四つ同じ。

〔四四〕 弓開き月滿つ。弓を滿月

に引きしほること。

〔四五〕 鎗落ちて星寒し。鐵鎗を

流星の如く、打ち下ろす形容。

〔四六〕 鎗風閃爍。鎗尖が風をき

つてひらめくこと。

〔四七〕 劍雨澎灘。劍をばらばら

急雨の如くに、ふりまはすこ

と。

〔四八〕 天可汗。可汗は突厥の酋

長の稱、唐の太宗は突厥に對

して、天可汗と稱せり、蕃皇

帝の意なり。

〔四九〕 撲通通。太鼓の響をい

ふ。

〔五〇〕 韻悠悠。喇叭の聲をい

ふ。

〔五一〕 雷轟電轉。人馬の叫ぶ聲

の盛なること。

〔五二〕 抵多少。當らざる意。

〔五三〕 海沸き河翻る。軍勢の多

きこと。

〔五四〕 折末。恁麼に同じ、音譯

なり、文語如何といふ如し。

〔五五〕 銅を壁と作し云云。如何

なる金城鐵壁と雖も、破つて

見せるの意。

〔五六〕 圍を排し。圍陣を作る

り。俺が衆路の強番を消ひ得ず。

〔衆、四面に立ち、淨、指す科〕

この一員は身材慥慥。那の一員は結束牢控。この一員は莽兀刺、

拳毛高鼻。那の一員は惡支沙、雕目胡顔。この一員は急進格邦的、

弓開き月滿るを會くし。那の一員は滴溜樸祿的、鎗落ちて星寒きを

會くし。この一員は咭叱克擦的、鎗風閃爍するを會くし。那の一員は悉

力颯刺的、劍雨澎灘たるを會くす。端的是、人は猛虎の山澗を離れたる

が如く。英雄の天可汗を顯はす。

〔衆行く科〕

〔合〕軍威を振ひ。撲通通と鼓鳴り。魂を驚かし膽を破る。陣勢を排

し。韻悠悠たる角聲。人は習ひ馬は開ふ。雷轟電轉も抵多少。可

正是、海沸き也那河翻へることし。折末的、銅を壁と乍し鐵を壘

と作すも。甚麼の攻むれども破れず、攻むれども破れざる也の雄關あらん

や。

〔淨〕 这里是地澗く沙平かなれば、此にて圍場を擺開き、射獵すること

一回せん。

〔淨、番姫と共に高處に立ち、衆、圍を排し、射獵して下る〕

〔淨〕 圍場を擺ぶ、這間に。這間に。四下裏、來り擠趨る。擠趨る。

馬蹄兒潑刺刺と。旋風散じ。不住的、弓をば緊く彎く。弦をば急に攀つ。

一回呵沙場に滾んで。兔鹿兒。無頭趕り。都て。動彈難く。就地裏

跪踉まる。

〔衆、鳥獸を射て上る〕

〔淨〕 鷹犬をば放過去者。

〔衆、應じて鷹犬を放つ科〕

跑下。

〔淨〕 呀呀呀、疾忙裏、一壁相には、翅を把て雷を摩するの。玉爪は

空に騰つて散じ。一壁廂には、足を把て。霧に駕する。金髮は、路を逐

うて攔ざる。霎時の間、獸は積み。獸は積んで山の如し。

〔衆、上つて獵物を獻する科〕

王爺に稟す、衆將獸を獻す。

〔淨〕打ちたる鳥獸は、衆軍に散給ふれば、此の高坡の上にて、人馬をば、歇息片時、大家肉を炙り酒を煖め、番姬毎歌ふ者は歌ひ、舞ふ的は舞ひて、〔六七〕灑落るること一回せよ。

〔衆〕得令。

〔同〕地に席して坐し、番姬淨に酒を送り、衆、刀を挟んで肉を割き、背壺を提げて酒を斟み、大に飲み啖ふを作す科。〔番姬、琵琶を弾じ〕

〔合〕この 酪漿兒を斟み起して。滿滿的と金盞に浮ぶ。滿滿的と金盞に浮ぶ。更に那の連毛帶血の肉を生餐し。笑つて番姬の 雙頬丹を擁著し。琵琶を把つて、忒楞楞と、弾じ也麼彈じて。新聲の 菩薩蠻を唱ふ。

〔淨、起つ科〕

喫了一會、酒は酔ひ肉は飽けり。天色已に晚ければ、諸將各 汎地に回り、須要らく兵器を整頓し、軍馬を練習して、將令を聽候すること便了。

〔五〕無頭。向ふ見ずに走り出すこと。

〔六〕動彈し難く。畏縮して動けなくなる事。

〔六一〕就地裏。即坐にの意。

〔六二〕踉蹌。ちぢみあがつてもかくこと。

〔六三〕一壁廂。一面にはの意。

〔六四〕玉爪。鷹をいふ。

〔六五〕霧に駕す。勢よく走る形容。

〔六六〕金樊。猛犬をいふ。

〔六七〕灑落。愉快をつくすこと。

〔六八〕背壺。背に負ふ壺、今の水筒の如し。

〔六九〕渾べて是らす。その調子がなつてをらぬ意。

〔七〇〕太平鼓板。鼓板を叩いて太平樂を唱ふ意。

〔七一〕酪漿兒。胡人は牛乳、馬乳を飲む。

〔七二〕雙頬丹。紅粉をつけたる

〔衆、應ずる科〕

得令。

〔同〕馬に上つて、海螺を吹き、〔七〕帽を側て、手を擺り、場を繞つて、疾行するを作す科。

令を聽き罷み。疾く身を翻し、躍つて錦鞍に登り。帽を側著て、手を擺ること 輕儼なり。各自裏回つて鎮に還り。疆藩を守定る。些の旗竿を擺

擲べ。〔天〕輪輻を裝摺著ひ。傳番を聽候つて。凶頑を施逞うす。〔八〕天摧殘を降し。地波瀾を起す。漁陽をば凝盼み。一たび羽箭を飛ばせば。争つて兵壇に赴き。専ら爾が〔一〕箇の 赤心を抱ける將軍、將軍の來つて調

〔衆、下る〕

〔淨〕爾看、諸路の番將、一箇箇人強く馬壯なり。眼に見得たり、俺の羽翼已に成れるを。

〔笑ふ科〕

唐の天子、唐の天子。爾怎ぞ俺に當り得んや。

ほうべたをいふ。

〔七〕忒楞楞。音の形容。

〔七二〕菩薩蠻。曲の名、新聲といへば、できあひの意。

〔七三〕汎地。衛戍地、もち場のこと。

〔七四〕帽を側て、手を擺る。酔ひたる形容。

〔七五〕輕儼。なまいき、人情輕薄の意。

〔七六〕輪輻。輻重の車をいふ。

〔七七〕傳番。命令のこと。

〔七八〕天摧殘を降し、地波瀾を起す。唐の天下の亂るること。

〔八〕一たび羽箭を飛ばす。命令一下の意。

〔九〕赤心を抱ける將軍。安祿山のこと。

〔一〇〕照會没く。勝手にの意。

〔一一〕助臂。一臂の力を添ふる意。

〔一二〕華清。華清宮、驪山に在

〔煞尾〕 (三) 照會没く。先づ那の掣肘する漢家の官を去了り。機謀有りて。暗に這の (八四) 助臂せる番兒漢を添上ふ。等ち的す、(八五) 華清に宴して。霓裳法曲の終るを。早くも俺が鼓鞞鬧がしく。(八六) 漁陽の驍將の反するを看ん。

六州の番落、戎鞍に従ふ。(薛逢)

戰馬間に嘶いて、漢地寛し。(劉禹錫)

倏忽 (八七) 風を搏つて羽翼を生ず。(駱賓王)

山川 (八八) 龍戰つて、血漫漫。(胡曾)

- 【八六】 漁陽の驍將。安祿山のこ。
- 【八七】 風を搏つて。風に乗すること。莊子逍遙遊に「鵬之徒於南冥也、水擊三千里、搏扶搖而上者九萬里」とあり。
- 【八八】 龍戰。群雄の相争ふこと。易、坤の卦に「龍戰于野、其血玄黃」とあり。

第十八齣 夜怨

〔旦、上る〕

〔正宮引子〕〔破齊陣〕〔破陣子頭〕 寵極つて

は、拵て難きを軽く捨て、歡濃かにしては、分外に憐を生ず。

〔齊天樂〕 比目は (四) 遊ぐにも雙び。鴛鴦は眠る

にも並ぶ。未だ恩の移り情の變ずるを許さず。

〔破陣子尾〕 只だ恐らくは、(五) 行雲の (六) 風に隨

つて引かるるを。争奈せん (七) 閒花の (八) 日に妍なるを競ふ。終朝 (九) 心暗に牽かる。

〔清平樂〕 簾を捲いて語らず。誰か識らん、

愁の (一〇) 千縷なるを。生怕くは (一一) 韶光 (一二) 定

主無く。暗裏に (一三) 春を亂催し去るを。心中剛

- 【一】 夜怨。貴妃怨言の場。
- 【二】 寵極つては云云。この二句は即ち寵極まつて、歡情が他人に移つるの意。
- 【三】 比目。比目の魚、夫婦に喩ふ。第七齣、倖恩に出づ。
- 【四】 遊雙。眠並。雙遊。並眠に同じ。
- 【五】 行雲。巫山の神女の故事。
- 【六】 風に隨つて引かる。君の心のまにまに、愛情の移ること。
- 【七】 閒花。むだ花、梅妃をいふ。
- 【八】 日に妍なるを競ふ。美を競ふ、寵を争ふ意。
- 【九】 心暗に牽る。内内心配の意。
- 【一〇】 千縷。長きこと。
- 【一一】 韶光。春の光、君恩に喩ふ。
- 【一二】 定主無し。定らぬこと、一人を寵することなき意。
- 【一三】 春を亂催し去る。花の盛りを過ぐすこと、君の寵を衰へさす意。
- 【一四】 蹤跡。帝の行動をいふ。
- 【一五】 日暮空階。日暮空階に立つて、幸を待つ意。
- 【一六】 愛。恩愛の情をいふ。
- 【一七】 梅精。精は妖の意、罵詈なり。
- 【一八】 意相下らず。まけて居ら

に自ら疑猜す。那ぞ堪へん、(四)蹤跡の全く乖くに。鳳輦却つて何處に歸るや。凄凉たり (五)日暮空階。

奴家楊玉環、久しく聖眷を邀へ、(六)愛の君心を結ぶに、耐へ耐し、(七)梅精江采蘋の、意相下らざるを。恰も好し、聖上に觸忤ひしかば、他をば遷して (八)樓東に置きり。但恐る、采蘋の巧計、(九)天を回らし、皇上の舊情未だ断えざらんことを。此に因つて、常に自ら隄防す。

唉、江采蘋、江采蘋、是れ (一〇)我が儂を容れ得ざるに非ず。只怕らくは、我れ儂を容れるも、儂ち就ち我を容れ得ざらんことを。今早聖上朝に出でて、日色已に暮るるも、宮に回るを見ず。連に永新・念奴をして打聽きに去かしむ。此時情緒、好だ消遣し難きかな。

〔仙呂入雙調〕〔風雲會四朝元〕〔四朝元頭〕 (一一)香串を焼き残す。深宮暮れんと欲する天。文窓をば頻りに啓き。 (一二)翠箔高く巻き。眼兒幾んど (一三)望み穿つ。但だ常時此際、但だ常時此際は。

〔會河陽〕 定す早くも駕 (一四)西宮に到り。手を執り (一五)肩を齊へ。〔四朝元〕 花は房櫺に映じ。 (一六)春は顔面に生じ。

- 【一】 樓東。即ち上陽宮の東樓。後齋に出づ。
- 【二】 天を回らす。君の心をかへすこと、前に出づ。
- 【三】 我が儂を容れ得ざるに非ず云云。嫉妬の心情、寫し出して妙なり。
- 【四】 香串。團練香のこと。
- 【五】 翠箔。箔は簾のこと。
- 【六】 望み穿つ。あなづあくほど見つめる意。
- 【七】 西宮。皇后宮、貴妃の居る所をいふ。
- 【八】 肩を齊へ。並んで歩む意。
- 【九】 春は顔面に生じ。滿面に笑を含む意。

〔駐雲飛〕 百種の歡戀に耽るに。嗒、今夕は問ふ、何に縁てか。

〔一江風〕 芳草黄昏。 (一)回輦を見承けざる。

〔内にて、鸚哥の〕 (二)「聖駕來る」と叫ぶを作す介 (三)旦、驚き看るを作す介

呀、聖上來了る。

〔看るを作す介〕

呸、原來是、

鸚哥の巧言を弄して。愁人をば故らに相騙くなり。

〔四朝元尾〕 只だ (四)落得、徘徊佇立し。思思想想、畫欄に凭り徧し。

〔老旦上る〕

聞道ならく、君主前殿に宿すと。 (五)内家各自 (六)紅燈を撤す。

〔見る介〕

娘に啓あぐ、萬歲爺は、已に (七)翠華の西閣に宿在たまふ。

〔旦、呆るる介〕

這等の事有るか。

- 【一】 回輦。こちらへ御回りになること。
- 【二】 聖駕來る。鸚鵡に言ひ慣はしてあること、第九齣、復召の首に應ず。
- 【三】 落得。結果をいふ、さうなる意。
- 【四】 内家。宮人をいふ。
- 【五】 紅燈を撤す。宮人は毎夜その局に在り、紅燈を掛けて、君の幸を待つに、君が既に宿を定めらると、聞けば、各自燈を撤して、寢に就くなり。
- 【六】 翠華西閣。離宮別館の名。

〔泣く介〕

〔前腔〕君の情何ぞ浅き。人の望懸するを知らず。正に晩妝は卸すに慵
く。暗燭は剪るを羞づ。君の來つて同に笑言し。瓊筵の啓く處に向ひ。
瓊筵啓く處に向ひて。醉月の觴飛び。夢雨の牀連なり。命を共にして、
分るる無く。心を同うして、舛はざらんと待ひしに。怎んぞ暮ち人
をば疎遠するや。

〔老旦〕萬歲爺は、今夜偶宮に進まざるも、料るに意有りて疎遠するに
非ず。娘請ふ懷を傷むる勿れ。

〔旦〕嗒、若し是れ情の遷るならずんば。便ち離宮に宿るに。阿監、何
ぞ遣はすを妨げんや。

我思ふに聖上呵

從來未だ獨り眠らず。鴛衾孤り展ぶるを厭ふ。怎んぞ今宵の枕畔。清清
冷冷として、竟に人の薦むる無きを得んや。

〔貼、上る〕

雪は鷺鷥を隠して、飛んで始めて見。柳は鸚鵡を藏して、語つて方

に知る。

〔見ゆる介〕

娘、奴婢は翠閣の事を打聽き來れり。

〔旦〕怎麼説

〔貼〕娘、啓すを聽きたまへ、奴婢は方纔呵、

〔月臨江〕悄かに翠華の西閣に向ひ。時を守將りて、黄昏に近し。忽

ち密旨、黄門を遣はすを聞く。

〔旦〕他を何處に遣はし去りしぞ。

〔貼〕鞭を飛ばして、戲馬に乗じ。燭を滅して紅裙を召す。

〔旦、急に問ふ介〕

那の一箇を召ししか。

〔貼〕眨して樓東に置ける怨女。梅亭舊日の妃嬪。

〔旦、驚く介〕

呀、這是梅精なり。他來りしや不曾。

〔貼〕須臾にして那の佳人を簇擁し。暗中に翠閣に歸れり。

〔三〕望懸。待ちこがれるこ
と。

〔三〕剪るを羞づ。暗燭を剪つ
て、あかるくするのいやの
意。

〔三〕醉月。夢雨に對す。

〔三〕夢雨。巫山神女の故事を
用ふ。

〔三〕分るる無く。離れないこ
と。

〔三〕待。期待の意。

〔三〕阿監。老女をいふ、若し
帝が心變りされたるに非れ
ば、今夜別宮に宿らるるに就
て、一言御斷りがあるべきで
あらうといふ意。

〔三〕清清冷冷。さむしきこ
と。

〔三〕薦む。枕席を進むる意。

〔三〕雪は云云。雪も白く、鷺
鷥も白くして、よく見分けが
つかず、飛び立つて始めて、

それと知らるる意。

〔四〕柳は云云。同上、柳も青
く、鸚鵡も青くして、鸚鵡の
居るのが明ならず、鳴いて始
めて知らるる意。

〔五〕怎麼説。どんな話かとい
ふ意。

〔六〕時を守將りて。待つて居
ること。

〔七〕黄門。宦官のこと。

〔八〕戲馬。曲馬の馬といふ
意。内密の使なれば、表向き
の馬に乗らず、宮中に養はる
る戲馬を飛ばせしこと。